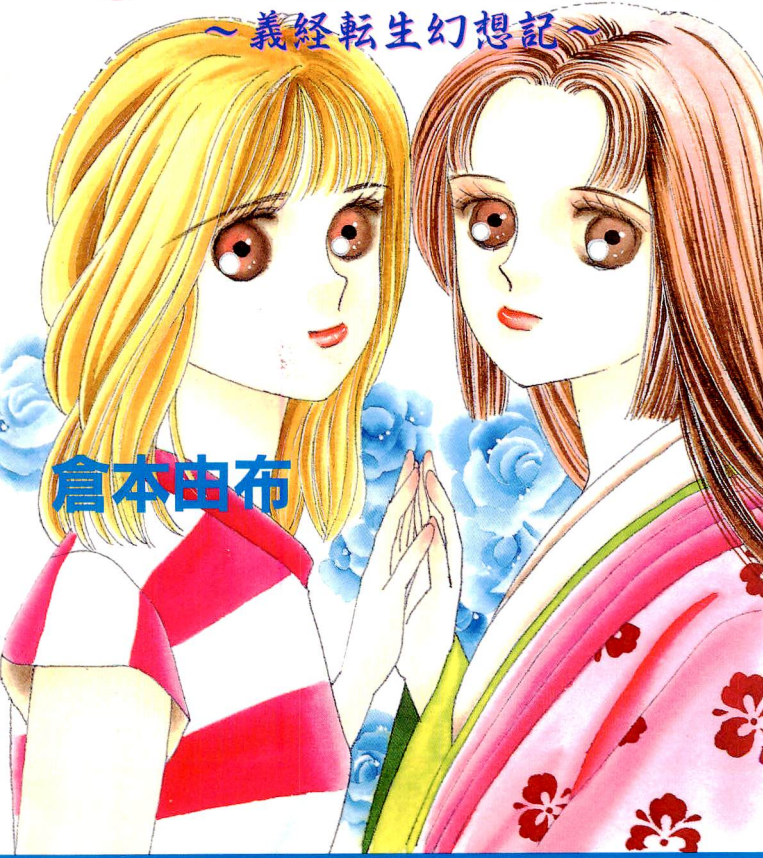
COBALT-SERIES

千の夢を見る

～義経転生幻想記～



倉本由布

集英社

越智家に伝わる男女のミイラを見に、奥州平泉にやってきたあづさと陸の双子の兄妹。ミイラを見た夜、あづさは夢を見る……。

夢の中で、彼女は羽衣という少女。羽衣は藤原秀衡の娘綾姫につかえる侍女なのだ。源九郎義経との縁談をいやがる綾姫のために、羽衣は九郎に会いに行くのだが……。

あなたと恋するために生まれてきたの！八百年の時空をこえた恋を描く、歴史ロマン。

恋気分いっぱいの夢♥小説誌！

コバルト
Cobalt

1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売

隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。
あらかじめ書店にご予約をおすすめします。

集英社



COBALT-SERIES

千の夢を見る

～義経転生幻想記～

倉本由布

集英社

目次

千の夢を見る～義経転生幻想記～

prelude あづさ……6

～夢のほとりへ～……28

星の記憶Ⅰ～承安四（一一七四）年・羽衣～……31

interlude あづさ……61

星の記憶Ⅱ～ふたたび、羽衣～……83

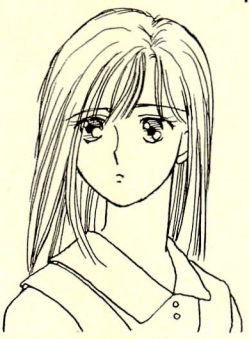
final あづさ……226

あとがき……244

イラスト／湯口聖子

千の夢を見る～義経転生幻想記～

prelude
あづさ



1

「双子は心中の生まれ変わり――」
死んだ母方のおばあちゃんはそう言って、私と陸を気味悪がり、決してそのそばに近づけようとはしなかった。
親戚中の誰もが笑い飛ばした話だ。
おばあちゃんはウチの両親の結婚には反対していた人なので、私と陸のことも、ケチをつける材料にしているだけだよ――と。
陸も、笑う。
「ばかみてーな話」
顔中をくしゃくしゃにして笑い、でも決まってそのあとに、
「だとしたら俺たち、前世で恋人同士だったってことになるよな？」

私の目を真っすぐにのぞき込む。
「それも、叶わない恋の末に心中した恋人同士――」

私、三浦あづさ、十八歳。
双子の兄、三浦陸、十八歳。
もうすぐ十九になろうとしている夏休み――。

☆

陸の友達がいるのだ。
岩手県の平泉町――。
奥州藤原一族と、彼らが遺した中尊寺の金色堂で知られる、東北の小さな町。その町に、陸が大学で出会い、親しくなった友達がいる。
越智靖彦。
夏休み、陸とともに平泉を訪ねた私は、初めて彼に引き合わされた。
「あんまり似てないね」
それが、私を見た彼の第一声。
いったい、それは、どういう意味の言葉だったのか。私と誰とを比べて、くちびるに浮かべ

た言葉だったのか。

その時は、もちろん、わかろうはずもなかった。ただ、陸の顔と見比べて、似ていないね、と言われたのだと思った。だから、

「そりゃそうよ、二卵性の双子だもの」

と笑った私に、彼はただ、不思議に深い微笑を浮かべるだけの答えをくれる。

☆

私たちは、実はミイラを見に来たのだ。

陸が大学で出会った、越智靖彦という男の子。ここ平泉にある彼の実家には、代々、大事に守ってきたミイラがあると聞いて、陸が興味を示した。

「でも、妹まで連れてくるとは思わなかったよなあ」

赤信号に止まったクルマの中、越智くんは、ハンドルを抱え込むようにして笑った。

「だいたい、俺、三浦に双子の妹がいるなんて知らなかったし」

そうなの。陸は、大学で出来た友達には、私のことを隠しているの。

「なんで隠すの？」

訊ねる越智くんに、けれども助手席の陸は、彼の問いをそのまま押し返すような素っ気なさで、

「おまえらなんかに見せるのは、もったいないから」
しかも、まったく不躾なことに、窓の外を往く景色を瞳に映したままなのだ。
やだなあ、また、いつものだわ。
陸は、私に興味を示す人に対しては、いつもこんなふうに、ずいぶんな態度に出る。
でも、友達に対してまでこういうのは、ちょっと……だと思うけどなあ？
越智くんも、さすがに、眉のあたりに不満げな色を滲ませている。
私は、後ろの座席から、ハラハラしながらふたりの様子を見つめた。
けれどもやがて、信号が青に変わる。
越智くんは、ちらりと目を上げ、それを確認したようだ。
クルマはするりと滑りだす。

2

越智家は、国道からそれた高台を、少し奥へ入ったところにあった。
大きな家だ。
平屋の、よく手入れされた純日本家屋で、離れがあったり枯山水の坪庭があったり。裏手には、渡り廊下でつながれた小さなお堂のような部屋があり、ミイラは、そこに安置されている

のだという。

「いろんな団体から、引き取りたいとか研究させてくれとか言ってきてるみたいだけど、親父が絶対、渡さないんだよ。ご先祖から引き継いだ、大事なものだから――って」

と、言いながら越智くんは、目の高さで両手を合わせ、パンッと大きな音を鳴らした。虫退治だったようだ。

夜――。

陸がお風呂から出るのを待ちながら、坪庭に面した濡れ縁に出ている。先にお湯をいただいた私は、ほてった肌を涼ませつつ、枯山水の見学をしているところだ。

だって、こんなの、京都のお寺さんあたりにしかないものだと思っていたもの。個人の家にもあっていいものだなんて知らなかったから、もの珍しくって。

すると、そこへ越智くんが顔を見せたのだった。

「涼んでるの？」

「うん。お風呂、熱かったし」

「でも、夜はもう冷えるから――って、これ、オフクロが」

差し出してくれたのは、レース編みのカーディガンだった。

夏休み――といっても、もう九月。ちろちろと震える虫の声が、あちらこちらの草葉から幻のように立ちのぼり、この夜を幽玄の中に沈めている。

半袖のパジャマから出た腕を、さらりと風が撫でた。冷えたその感触に、私は、身ぶるいをひとつ。それから、慌てて、渡されたカーディガンを羽織る。

「ミイラ――って、いったい、何のミイラなの？」

羽織りながら、訊いた。

「――知らないで来たの？」

振り向いた越智くんの目が、びっくりの形に見開かれている。

「うん。陸がミイラを見に行くぞって言うから、ついてきただけだもの」

「……ふーん？」

「日本のミイラっていうと、ほら、坊さんが修行のためにミイラになったっていう話とか――あとは、中尊寺のミイラの話とかしか聞いたことないなあ、私」

中尊寺は、この家からほど近いところにある。

平安の末期というから、八百年――九百年くらい昔のことになるんだろうか？　そのころ、百年間にわたって東北を支配した奥州藤原家という一族、四代のミイラが、中尊寺にある金色堂というお堂に安置されているんだそうだ。

その話は以前、テレビで見て知っていたから、陸が、

「平泉へミイラを見に行くぞ」

と言い出した時、私はてっきり、その藤原一族のミイラを見に行くのだろうと思ったのだ。

でも、そんなの一般公開しているの？

陸に訊くと、

「ばか。そんなもん見に行くんじゃないよ」

陸の友達の家にあるプライベート・ミイラを見に行くなんて言うものだから、もう、ただただだびっくり——だったのよ。

「時代的には、藤原一族のミイラと同じ頃のものらしいよ」

越智くんは、あまりに呑気な様子の私に苦笑しながら、言った。

「男女一対のミイラで——うちに伝わる話では、源氏に縁のある人らしい」

「源氏——って、光源氏じゃなくて？」

「じゃなくて、源義経とか源頼朝とか——」

「清和源氏とか、なんとか源氏とかいう人たち？」

「そう」

なるほど。その源氏か。

「平泉は、源義経の終焉の地といわれているから、そのあたりからの縁かもしれないね」

「どうして、越智くんの家でそのミイラを守ってきたの？　何か理由があるの？　たとえば、越智くんの家のご先祖さまだとか」

「さあ——？　うちの直接の先祖ではないらしいよ。もともと、ここには昔から、ミイラを守

るためのお堂が建っていたらしくて、うちは、そのお堂の守りをしていた一族だとか、そこを預かっていた寺の坊さんの末の一族だとか——いろいろ言われてはいるみたいだけど。とにかく、なんの文献も残されていないんだよ。なにもかも、口で伝えられてきただけ」

「誰々のミイラだ——って、名前は伝わっていないの？」

「ない。ただ、源氏と奥州藤原家に縁の人物だから、丁重にお守りするように——って、そのことだけが言い伝えられてきたらしい。ミイラになっちゃったっていうのも、藤原一族のミイラと同じように、偶然のことらしいしね」

「案外、義経のミイラだったりして」

ふと思いついたことを、私は口にしてみた。

考えられないことじゃないわ。義経って、死んだ時のことがハッキリしない人だというし。

「じゃあ女のミイラのほうは？」

「女のミイラは、だから静御前なのよ」

「義経と静？」

「そう！」

我ながらすごい発想だわ——と、私は思った。

乙女ちっくすぎるかもしれないけれど、そう考えてみると、ロマンだわ。どきどきする。義経と静が、人知れず、こんな日本の片隅で、ミイラになってまで寄り添っているなんて——。

でも。

越智くんは、それには頷いてもくれなかった。ただ、静かに私を見つめる。

「違うの？」

義経と静ではないの？　そういうことは、ありえないの？

と、彼の目に訊ねながら。

なんだか奇妙な心地が、胸の底から疼くようにのぼってくるのを、私は感じている。

なんだろう――？

なんだか、とても妙なかんじ。止まった時間の中に、ふわりと浮き上がってしまうような、なんとも頼りないような――。

この人の、目だ。こんな気持ちになるのは、私を見つめるこの人の目のせいだ。私の内にある何かを、見透かそうとしているかのような目。

越智くんは、

「さあ？　知らないよ」

薄い笑いの浮かんだくちびるを動かし、

「俺は、知らない」

そう言った。

私は、まばたきをひとつ、した。

越智くんの気配が、ゆっくりと動いた。
「そんなことより――」
彼は、庭先に目を遊ばせて、
「兄妹同士、仲がいいんだね」
それまでと、まったく違う話だ。
でも、そう言う彼の瞳が、あまりに自然に笑っているものだから、私の中の〝妙〟は、さらりと消えた。
彼は、私をからかうように、
「ふつう、この歳になって、兄妹で旅行なんかするもの？　姉妹ならそういうこともあるだろうけど、男と女の兄妹がさ」
「それは、確かに――」
言えている。
でも、私たちって、昔からちょっと変なんだもの。
ああ――、違うか。〝私たち〟じゃなくて、〝陸が〟だわ。
実際、昔から、兄妹仲はかなり良かったと思う。双子だということもあるけれど、小さいころなんかは特に、どこへ行くにも何をするにも一緒。そうでないとお互い、不安で動けないようなところもあったくらいで……。

でも男の子と女の子なんだもの、思春期になればさすがに、なんとなく離れてしまうものでしょう？　ひとりひとり、友達なんかも違ってくるはずだし。

ところが、陸はそれを嫌がった。私が、陸の知らないところに、陸の知らない、私だけの世界を持つことを、ひどく嫌がったの。

だから陸は、他人が私に近づくことを嫌う。さっき、ここへ来るとき、クルマの中で越智くんにずいぶんな態度を取ったように、いつもあの調子なのよ。

私が陸の気持ちを裏切れば、もちろん、怒る。それも、ひどく傷ついた顔をして――。

そんな顔を見たくはなかった。だから、とにかく陸の言う通りにしてきた。そうしていれば面倒も起こらずにすむし――そんな諦めの気持ちで、高校卒業までを、陸にべったりくっつかれたままで過ごしてきた。

でも、高校卒業後。

「当然、陸と同じ大学に引っぱって行かれるんだろうなと思っていたんだけれどね、もちろん、試験を受けさせられたんだけどね」

受からなかったの、私。陸と一緒に受けた大学は、ことごとく落ちちゃったの。さすがの陸も、私の学力のことだけはどうしようもなかったってわけよね。

結局、すべてを落ちたのち、ひとりで短大を受け、

「今は、生まれて初めて、陸とは離れた学生生活を送っているわけ」

「せいせいしてる？」
「うん。快適よ」
私は、心から頷いたのだけれど。
その、次の瞬間、
「でも――」
と、越智くんの瞳から、冷たいしずくのような視線が、ぽつり、落ちてきた。
「陸が〝行くぞ〟って言えば、やっぱり、こんなとこまでミイラを見に来ちゃうんだ？」
「――え？」
「陸が変だから――って、あづさちゃん、言うけど、そういう陸が嫌なら、ケンカしてでも離れればいいのに。そうしないってことは、あづさちゃんにも、陸にしがみついていたい気持ちがあるんだ？　でも、自分からしがみつかなくても陸が手を放さないでいてくれるから、それに甘えてるんだ？　違う？」
彼の目は、さらに冷たく尖り、刺すように私を見つめる。
頬が痛い。瞳が痛い。しみるように痛い。
「変だよ、あんたたち。〝陸が〟じゃなくて、〝あんたたちふたりが〟ちょっと変だ。異常だよ。よくないんじゃないの、そういうのって」
……どうして？

どうして、今日、出会ったばかりのこの人に、こんなことを言われた上、こんな目を向けられなくちゃいけないの？

嫌だわ。この人、嫌だ。

私は、そっと立ち上がった。

「もう、眠いから。おやすみなさい」

その言葉を残し、彼から離れた。彼からは、なんの言葉も返ってはこなかった。

与えられた客間へ急ぐ私の髪の上で、夜をはらんだ風が、ひやりと揺れる。

☆

部屋に戻ると、陸が帰っていた。

いつの間にか敷いてあった布団に寝そべり、私を見上げ、

「濡れ縁のところで、越智とふたりでいた？」

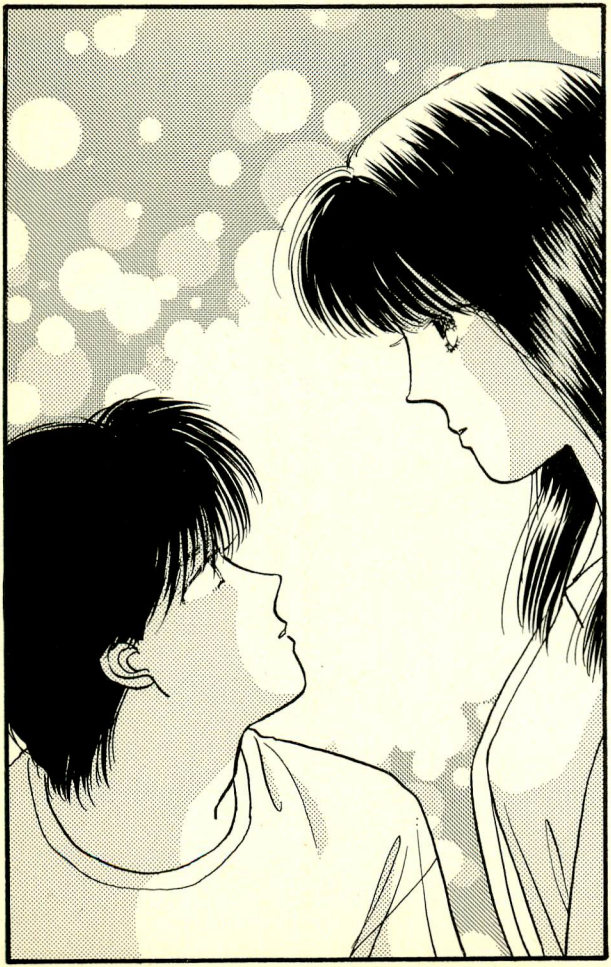
訊いてくる。

見てたのね。

「いたわよ」

私は、素直に頷いた。

「ふうん……？」



陸は、あまり面白くなさそうなふうに唸り、
「なに話してた？」
「ミイラのこと」
「それだけ？」
「あとは――」
言いかけて、くちびるを一度、閉ざしたあと、
「あとは、つまんない話」
布団の上に座り込み、ごみ箱を近くに引き寄せ、髪を梳かした。
陸が伸ばせというから、長く長く伸ばした髪。陸が、長いほうが好きだと言うから……。
「つまんなくてもいいから、言えよ」
陸はしつこく言ってきた。
「ほんとに、つまんないのよ。もう忘れちゃったくらい」
「嘘つけ」
「ほんとよ」
「話せよ」
陸は、しつこい。なんだか苛立った。
「ほんとだってば！」

私はブラシを投げ捨てて、頭からすっぽり、夏掛け布団を被ってしまったのだけれど、
「話せよ！」
陸は、それを力まかせにはがそうとする。
私は、陸の手をそれたところから顔を出し、
「なに話してたって、いいでしょ、べつに！　越智くんと私がふたりで話したりするのが気に入らないなら、私をここに連れて来なければよかったんじゃないの！」
陸は、ちょっと怯んだようだ。出した手を引っ込めつつ、
「俺だけこっちに来たら、おまえ、ひとりになる」
「いいじゃないの、べつに」
「俺は、嫌だ。ひとりにしといたらおまえ、何するかわからない。俺の知らないことは、させられない」
「そんなふうに思うの、変よ」
「変じゃない！」
「変よ！」
叫んだあと、また布団の中に籠った。
すっぽり被った闇の中で、私は膝を抱える。
「……どうしたんだよ？」

陸の声が、薄い夏掛け布団越しに、少しだけ曇った響きで染みてくる。
「今まで、そんなこと言わなかったのに。——越智が、何かしたのか？」
布団をふるわせ、私は、〝違う〟と伝えた。
「じゃあ、何か言ったのか？」
今度は答えなかった。
「俺たちのこと、変だって言ったのか？」
「そうじゃないけど……」
と、一応、否定しておいたのだけれど、その私の声が、聞こえたのか聞こえていないのか、陸は、布団ごと私を抱きしめた。
「いいじゃん、誰が何を言ったって。俺たちは、俺たちなんだから。死んだばあちゃんが言ってたろ？　俺たちは——」
「心中した恋人たちの生まれ変わり？」
「そう。だから、一緒にいたいと思うんだよ。俺だけじゃないだろ？　おまえもそうだろ？」
思わず、頷きそうになった。
そんな自分に、愕然とした。
違う。私が陸の意のままに従ってきたのは、陸と同じ気持ちでいるからじゃなく、そうじゃなく、そうしておけば面倒が起こらないから、ただそれだけのため——だったはずなのに。

私、今、頷きそうになった。
あまりのことに愕然として、私は黙り込んだ。
「ミイラを見せてもらったら、すぐに帰るよ。俺、もともと、越智ってあんまり好きじゃなかったんだ。それほど親しい友達ってわけでもなかったんだ。でも、ミイラの話を聞いたら、どうしても見たくなって。気持ち、抑えられなくなって――」
私を抱きしめた陸の手に、わずかに力が込められた。
「でも俺、越智は嫌いだ。あいつ、何かを見透かすみたいに俺を見る。なんだか、あいつって――」
言いかけた陸の言葉を、私がつないだ。
「あの人って、なんだか、初めて会う人じゃないような気がする」

3

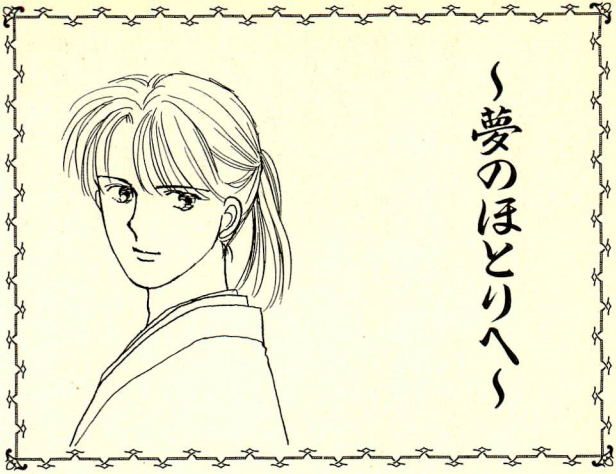
地の底に眠る土のような色を、している。
深い土色をした皮膚が裂け、骨ののぞいた胸。ひからびて残る眼球。怒ったような表情でむき出しになった歯。
まずは、男のほうのミイラを見せてもらったのだけれど。

からだの中で、胃液が、ごぼっと動くのを感じた。
思わず目をそむけた先に、陸の肩があった。自然、そこに顔をうずめたような形になる。陸は、背中を抱いて支えてくれる。
昨夜の今日だっていうのに、越智くんの前でこういうのは、どうかと思った。
また、異常だよ——と言われるんじゃないかしら？　軽蔑されるんじゃないかしら？
でも、真剣に気持ち悪くて動けない。
「鼠に食われちゃってるんだよな、だいぶ」
そう言いながら越智くんは、女のほうのミイラの柩を開けはじめた。
私たちの様子になど、さして興味を持っていないといった調子の声だ。
それをいいことに、私は陸に守られたままでいる。陸も、私を放すつもりなどないらしい様子でいる。
母屋からは渡り廊下でつながっている、この、ちいさな建物を、越智家の人々は供養堂と呼んでいるらしい。
ここは、ミイラを安置するために、わざわざ作られたものなのだというけれど、とにかくすごい。中央には須弥壇があり、その上に三体の仏さまが祀られていて、なんだか、お寺さんにいるみたいなのだ。
越智くんは、須弥壇の裏に回り、その下から木棺をふたつ、引っぱり出して来た。それが、

ミイラの納められた柩だった。
「親父は、ミイラを守るために研究団体には渡さない、なんて言ってるけど、逆だよなあ。この先、どんどん破損していくだけなんだから、残していきたいと思ったら、永久保存できるようにしてくれることを条件に、学者に見てもらうのが一番いいと思うのに」
ぶつぶつ言いながら、越智くんは女のほうの柩を開けたようだ。
その、妙に現実的な話のおかげで、少し気分が落ち着いた。私は陸から顔を離し、柩のほうをうかがった。
「平気？」
陸が、囁きをくれる。
「大丈夫よ」
私は、微笑みを返す。その様子を、越智くんが見ていた。無表情に、だからこそ冷たく見える目を、一瞬だけ私に合わせ、
「女のほうが、けっこう、マシに残ってるから」
すぐに柩に視線を落とす。
蓋が、開けられていた。
おそるおそる、私はその中をのぞき込む。
一瞬――。

眠る女性を見たような気がした。
やわらかな淡紅色の衣装をまとい、おなかのあたりでゆるやかに両手を組み、静かに微笑む人の……。
でも、幻だった。
よく見れば、男のほうのミイラと同じ。茶褐色の皮膚がぐるりと骨に貼りついた、ひからびた人間の残骸なのだ。それがどういうわけか、新しい衣装に包まれている。
「バイトして、俺が作ってやった」
越智くんが、言った。
「中学生のころからずっとバイトを続けて、最近、やっと作ってやれた」
淡紅色に紅梅の模様が織り出された表着に、彼は、そっと手を触れる。
その手は、不思議な表情をしていた。微笑むような、愛おしむような、哀しむような——。
私は、彼の顔を見上げた。彼の手から滲むものとよく似た気配が、そこにはある。
彼は気がつき、私を向いて、
「やっぱり、似てないね」
「——似てない？」
「そう。似てない」
彼の瞳は、私を——私だけを映していた。

陸を見ていない。陸の存在など、その瞳の色からは消えている。
誰と比べているの？　陸とじゃないの？
「まあね、おんなじ顔をして生まれてくるわけでもないんだろうけれどね」
越智くんの視線が、木棺に落ちた。
女のミイラ――。
私とミイラを比べているの？
なぜ？
と、訊ねようとした。
けれども、そのとき。
瞳の奥で。
意識と無意識、可視と不可視、過去と未来、私と彼女、すべてが混じり合うくらいにまで奥の奥で。
真夏の陽ざしのように白く、鋭く、懐かしいものが、きらめいた――ような気がした。
そして、白日夢――。



とろり――、眠りの裾がほどよく溶けはじめた、ちょうどそのとき。

「源九郎義経どの――！」

と、太陽のしずくのように葉陰からこぼれ落ちてきたその声が、自分の名を呼んだような気がした。

川べりの木陰で真夏の午睡を楽しもうと、やって来た少年である。

彼は、わずかに眉を動かした。そして、そのままぶたを開くのかと思えば、ころりと寝返りをうつ。

どうも、名を呼ぶ声は夢の中のものだろうと決め込んだものらしい。

けれどもまた、

「源九郎どの――！」

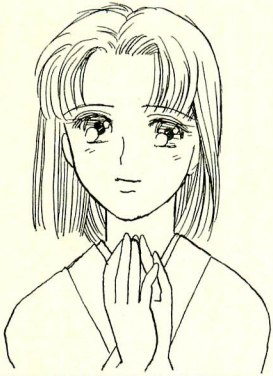
降ってきた声は、けだるい夏の気配の中にも凛々と冴えるのだ。

少年は、さすがに薄目を開けた。
「……誰だよ？　うるさいな」
すぐにもまた眠り込んでしまいそうな、だれた声で文句を言い、わずかに頭を上げた。そして、あたりを見回してみるのだが、誰もいない。
「……なんだよ、やっぱり夢かよ」
寝ぼけた目を、ふたたび閉じようとしたのだが、
「ここよ、頭の上！」
「……頭の上？」
言われるままに、見上げた。
太陽の輝きをたっぷりと含んだ緑の合間に、ちらりちらり、薄紅梅の色が揺れている。
何かと思えば、薄紅梅は小袖の裾なのだ。木の上に人がいる。
少年は、緑と太陽のまぶしさとに目を細めながら、薄紅梅の主を確かめた。
少女である。
大きく張り出した、姿のいい枝に、ちょこんと腰かけ、あたりの輝きをみんな集めたよりもまぶしい笑顔で、こちらを見下ろしている少女――。
「誰だ、おまえ？」
少年は、寝ころがった姿のまま訊ねた。

けれども少女は答えず、するすると、器用に木から降りてきた。
「お話があるの」
少女は、少年のかたわらに立ち、彼の顔を真っすぐにのぞき込む。
それでも彼の様子には、起き上がろうとする気配もない。
少女は、かまわず続けて、
「綾姫さまのことは、あきらめてください」
「……綾姫？」
「そうよ。綾姫さまには、あなたの奥方になるおつもりなんか、ぜーんぜん、ないんですからね！」
少女の髪の輪郭を金いろに縁どる陽ざしが、淡く、濃く、揺れている。

☆

承安四（一一七四）年。
羽衣、十六歳。
源九郎義経、十六歳。
奥州藤原氏三代目・秀衡の支配のもと、平泉、至福のとき——。



星の記憶Ⅰ

～承安四（一一七四）年・羽衣～

一

私の名前は、羽衣という。

今年、十六。両親はいない。歳の離れた兄をひとり、家族に持っているだけだ。

こどものころから藤原家の綾姫さまに仕えているんだけれど、今朝、その綾姫さまが、私の前で突然、しくしくと泣き出した。

「どうなさったんです!?」

驚いて訊ねる私に、綾姫さまは一生懸命、答えようとしているけれど、まずは涙で声にならないみたい。

綾姫さまのかたわらに回り、そっと、その髪を撫でてさしげた。

「ゆっくりでいいんですよ？　――ね？」

綾姫さまは、こくんこくんと頷きつつ、髪

の流れをさらりと動かし、私の胸にぺたんと頬をつけてきた。
「あのね？」
甘くやわらかな声に、まだすこし涙を滲ませて、
「お父さまが、わたくしのお婿さまが決まったっておっしゃるの。来月にでも婚礼の式を――って、そうおっしゃるの」
「姫さまが、ご結婚を――？」
「そうなの」
綾姫さまは、すん……っと涙の残りを鼻先で揺らした。
「まあ、姫さまがご結婚を……」
おめでたいお話じゃないの。
一瞬、くちびるに〝おめでとうございます〟の言葉が浮かび上がりかけたけれど。
……この涙だものねえ。
私は、あやういところでその言葉を飲み込む。
案の定、綾姫さまは、
「わたくし、結婚なんていや！　まだまだ、いや！」
私の胸の中で、新しい涙を咲かせている。
綾姫さまは、私よりひとつ年下の十五歳。

けれど、お父さま――私たちが〝お館さま〟と呼んでいる、お父さまの藤原秀衡さまが注がれるたっぷりの愛情の中、ゆらゆらと泳がされるままに育ってきた綾姫さまは、歳よりもすこし、幼い。

結婚に対しても、まだまだ夢だけ見ていたい気持ちでいたところへ、いきなり生身のお婿さまを突きつけられて、きっと混乱してしまっているんだろう。

綾姫さまがこんなに嫌がられるんなら、私としては、この結婚、なんとか、なしにしてさしあげたい。こんなにもか細い輪郭の姫さまが、人妻になるなんて、思うだけでも痛々しくて、私の胸まで痛くなる。

……でもねえ。

お館さまから、あんまり姫さまを甘やかさないよう、言われているのよね。

姫さまは、この奥州（東北地方）一帯を支配する藤原一族の姫として、そろそろ相応のお婿さまを迎えなければならない年ごろなんだもの。いつまでも子供気分で甘えてはいられないはず。

時には、突き放すことも愛情だわ。

と、心を鬼にして、私は微笑し、

「でもね、姫さま？　お館さまが、姫さまに良かれと決めてくださったご縁ですもの。きっと、間違いなく姫さまを幸せにしてくださるお婿さまに、違いありませんわ？」

「……羽衣まで、わたくしに結婚しろと言うの？」
綾姫さまは、あふれそうなほど涙の盛り上がった瞳で、すがるように私を見上げてくる。
……だめだわ、私、この瞳に弱いの。
迷子の子猫にしがみつかれたような気持ちになる。腕の中で、溶けるまで抱きしめてあげたいような気持ちになる。
ぐらり、気持ちが揺れた。
でも、だめよ。綾姫さまの本当の幸せはなんなのか、ちゃんと考えなくちゃ。
私は、ぐっとこらえて、
「姫さまのお婿さまに決まった方は、どなたですの？」
名前を訊き出し、その人を徹底的に褒めちぎってやろうというつもりだ。
そうすれば、私の意見ならなんでも素直に胸に吸い込んでしまう綾姫さまだもの、案外、その気になってくださるかもしれない。
ところが。
「源九郎義経さまよ」
と、姫さまの泣き声が綴ったその名前を聞いた途端。
「――なんですって？」
私は、自分の役目をすっかり忘れた。

「源九郎義経どの……」

といえば、私はまだ会ったことはないのだけれど、近ごろ噂の人物じゃないの。

都からやって来た、源家の御曹司――。

「そうはいっても九郎どのは、十六年前の平治の乱で平清盛さまに敗れた源義朝さまのお子。あんな人を匿っていて平家に睨まれでもしたら大変なのに、お館さまはいったい、何を考えていらっしゃるのか」

そんな噂話を、私も聞いたことがある。

都の朝廷では平家一族が栄の華を咲かせているというこの頃だもの、彼の噂をするときは、誰もが眉をひそめ、こそこそと頷き合う。

そんな人物だというのに。

それを、綾姫さまのお婿さまに――ですって？

お館さまは、ほんとに何を考えていらっしゃるのよ？

「九郎どのになど、姫さまを渡してなるものですか！」

気がつくと、くちびるから、そんな言葉が落ちている。

「私にまかせてくださいね、姫さま!?」

綾姫さまのちいさな手を、包み込むようにして抱きしめ、

「私が、この縁談、絶対、壊してさしあげますからね！」

☆

綾姫さまのお部屋から駆け出した私は、そのまま真っすぐ、九郎どのを探しに出かけた。
彼は、私たちの起き伏しする、ここ――伽羅御所と呼ばれる藤原家の館に同居している。
九郎どの付きの者に訊いてみると、
「御曹司は、衣川のほうまで遊びに出られましたよ」
という。
すぐに追いかけた。
けれども見つからない。
さあ、どうしましょう？
と、あたりを見回してみたところ。
うん、なかなかいい枝ぶりの木があるじゃないの。
木登りは、大得意なのよ。
うん……っと気合いを入れると、幹に飛びつき、するすると登った。
具合のいい高さからなら、きっと九郎どのも見つかるに違いないわ――そのつもりで下界を見下ろしてみた、そのとき。
川沿いを、ぶらぶらと呑気な足取りで、こちらへ向かってくる少年を見つけた。

見たことのない顔だ。
けれど、ピンときた。
あの人が、源九郎義経どの――。
すぐに声をかけようとした。
でも、ちょっと待って――と、私は、開きかけたくちびるを押さえる。
考えてみれば、私、九郎どのの顔を知らないはずじゃなかった？
勢いのまま飛び出してはきたものの、いったい、どうするつもりだったんだろう？
我ながら、あきれてしまったけれど、でも。
私には、すぐにわかったのだ。
あの人に、違いない！
すると――。
そう思った、その瞬間。
くちびるの端から、我知らず、微笑がこぼれた。なんだか、妙に嬉しかった。
会えたわ、会えた――会えちゃった！
胸の底から、奇妙な感動が湧き上がる。
なんなの、これ？
頭の芯は、すっかり覚めているのに。それなのに、胸が勝手に感動する、頬が勝手に微笑す

る――。

両頬を、両手でペタペタと叩いた。

私は、九郎どのに文句を言いに来たのよ!?

胸のほうにも、そう言い聞かせた。

ところが、そうしているうちに、九郎どのは、なんと私のいる木の下に、ころんと寝ころがってしまったのだ。かと思うと、もう安らかにまどろみはじめている。

……あらまあ。

なんて平和そうなんでしょ。

両頬を両手で包んだまま、彼の寝顔を見下ろすうち、私の胸に、ふ……っといたずらな気持ちが滲んだ。

木の下の九郎どのの様子を、じっと見つめる。

彼のまぶたが、口許が、眠りの中にほどよく溶けはじめるその瞬間を見逃さず、

「源九郎義経どの――！」

私は、わざと声をかけてやったのよ。

☆

と、いうわけだった。

綾姫さまのことはあきらめて――私にそう言われた九郎どのは、けれども、
「……綾姫？」
その名を、きょとんと繰り返すばかりなのだ。
しかも、この人、寝ころんだまま起き上がろうともしないの。
「綾姫……奥方……？」
きょろりと瞳を動かし、
「なんのことだ？」
私を見上げてくる。
いくら待っても起き上がってくれないものだから、彼を見下ろしている今のこの状況が、なんだか気まずく思えてきた。
私は、九郎どののかたわらに、そっと腰を下ろした。
その様子を、九郎どのはじっと目で追っている。かと思うと、
「それでおまえ、誰なんだよ？」
思いきり不躾に、訊ねてきた。
なによ、偉そうに……！
思わず、ムッと眉が寄ってしまった顔のまま、
「綾姫さまのおそば近くに仕えさせていただいております、羽衣と申します」

ちょうどいいだけ厭味になるように、ばか丁寧に答えてやった。
すると、その途端。
それを受け取った九郎どのは、こともあろうか、くちびるに薄い笑いを滲ませたのだ。
……これ、どういう意味？
寄っていた眉が、さらに複雑に絡まりかけたけれど、それでもまずは慎重に、九郎どのの様子をうかがう。
けれども彼は、滲んで揺れるほどの笑いをくちびるから下げたまま。
はっきりいって、切れた。
「なんなの!?　ばかにしてんじゃないわよ!?」
気がつくと啖呵をきり、私は仁王立ちに立ち上がってしまっている。
目の下に九郎どのの薄笑いがあった。
私は、仁王さま気分のまま、それを睨みつけてやった。
ところが――。
彼の薄笑いはやがて、にっこりとやさしく広がってゆくのだ。
「そうか、綾姫の侍女どのか！」
瞳が溶けてなくなるくらいにまで細めた目で笑い、
「面白いなあ、おまえ」

言いながら、勢いよく半身を起こす。
木の幹に背をもたれ、
「それで、綾姫がなんだって？　綾姫が、俺の奥方になりたいって言ってるの？」
なんとも呑気な笑顔なんだもの。
どういう人なのよ、この人は。
私は、すっり毒気を抜かれ、その場にふたたび、へらりと座り込んだ。
でも、
「違います。そうじゃなくて、綾姫さまはあなたの奥方になどなるおつもりは全然なくていらっしゃるのよ――って、私、さっきも言ったでしょ？」
九郎どのの勝手な言いぐさを訂正するのは忘れない。
「だが、俺は綾姫を妻にと望んだ覚えなどないぞ？　妻にもらってやってくれと誰かに頼まれた覚えもないし」
そう言う彼の頬が、すっと引きしまった。
どうやら、嘘をついているわけではないみたい。
「……変ねえ」
私は、おとなしく首をかしげた。
「姫さまは、お館さまにそう言われた――っておっしゃるの。でも、泣いて嫌がられて……。

だから私、姫さまのことはあきらめてくれるよう、あなたに頼みに来たのよ」

九郎どのという人物が気に入らないから反対して、飛び出してきたのだ——という事実は、さすがに言えない。

「——ふうん？」

何もしらない九郎どのは、呑気に唸り、

「秀衡は、そのつもりでいるわけか」

けれども、そのあと、急に何か思いついたという顔で、

「——あ、そういえば」

「……なに？」

「おとと い、秀衡のやつ、なんか言ってたよなあ。綾姫がなんとかかんとか……」

「なによ？」

「綾姫が十五で、俺よりひとつ年下で、だから年回りがちょうどよくて、なんとかかんとか……」

——あきれた。

なんなのよ、つまりは、

「それがそうなんじゃないの！　やっぱり聞いていたんじゃないの！」

九郎どのは、ちらりと私に横目をくれ、



「そっか。言われてたんだわ、俺」
ちかりと光る太陽のように、悪びれない顔で笑う。
「でもさあ、酒、入ってたしなあ。酔ってたしなあ。よく覚えてないんだよなあ」
「なんていいかげんな人なの!? お館さまは、もうすっかり、そのおつもりでいらっしゃるのよ!? そんなんで一生を決められたんじゃ、綾姫さまも浮かばれないわ！」
「……ふん？ それもそうだな」
考え込んだ顔で唸ったあと、
「でもさ、まあそんなに心配することもないぞ？」
と言われても、ちょっと信用する気にはなれないわ。
黙り込む私におかまいなしに、九郎どのは続けて、
「俺、綾姫なんかと結婚する気、まったくないから」
けろりと言った。
……なんですって？
私の右眉が、ぴくりと動き、
「……まったく、ない？」
「ああ、ない。だってあれだろ？ 綾姫って、ちらっと顔を見たことあるけど、なんか甘えたっぽい、ちんまりした姫だろ？ 俺、べたべた甘えられるのって苦手。自分が甘えるのは好き

だけど」
　私はふたたび、左の眉をぴくりと動かし、
「……まったく、ないですって？」
「俺さあ、自分の妻にする女は自分で見つける。これ――って思う女をひとりだけ、一生かけて大事にする。――あこがれてるんだ、そういうの」
　九郎どのは、いい気分で夢を話し続けている。
　だから、気がついていないみたいね、私のこの頬が、あまりの怒りにみるみる蒼ざめていったことには。
　私は、爆発するための息をゆっくりと吸い込み、
「綾姫さまなんかと結婚する気は、まったくない――ですって？　綾姫さま〝なんか〟と――ですって？」
「――え？」
　九郎どのの目が、きょとんと止まった。
　そこへすかさず、
「ばかにしないでちょうだい！　あなた、綾姫さまの何を見て、何を知ってて、そんな言い方をするの!?　綾姫さまはね？　あんなに可愛らしい方はこの平泉には他にいない――ってほど、可愛らしい方よ。素直で愛らしいの。女の私でさえ、守ってさしあげなくちゃって無条件

に思ってしまうような方なの。知らないくせに、勝手なことを言わないでちょうだい！　失礼な人ね！」

　文句の雨を降らせてやると、九郎どのはびっくり目をさらに丸く見開いて、けれどもずうずうしく、

「でも、綾姫のほうだって、俺のことなんにも知らないくせに、嫌だ嫌だって泣き叫んでるんだろ？　おなじくらい失礼な話じゃないか？」

　反論をしてきたけれど、

「男の子と女の子は違うんです！　男の子は女の子に失礼にされても怒っちゃいけないんです！」

「……勝手な理屈だな」

「勝手なもんですか！」

「――とにかく！」

　九郎どのも、さすがに、うんざりしてきたらしい。

「とにかく、俺には綾姫を娶る気はない。それでいいんだろ？　綾姫は、それでホッと出来るんだろ？　羽衣も満足だろ？」

　投げやりに言うけれど、

「いいえ、それで済む問題じゃなくなってるわ。――いい？」

と、私は居住まいを正した。
「あなたさっき、ずいぶんと偉そうなことを言っていたわね？　自分の結婚相手は自分で選ぶとか、なんとか……」
「ああ。言ったが、それがどうした？」
「綾姫さまはね、あなたが奥方を選ぶ目でしっかりと見つめ直せば、お館さまに頼み込んでも、深草少将のように姫さまのもとへ百夜を通いつめてでも、妻にしたいと思ってしまうに違いないような方なのよ？　そこのところ、ちゃんと認めてちょうだい」
「ちょうだいと言われても……」
九郎どのは、困ったように眉を寄せ、
「だから俺、綾姫には、ちらっとしか会ったことはないんだってば」
「じゃあ、ちゃんと見てちょうだい、会ってちょうだい。綾姫さまが、あなたが妻にと望むに足りる方なのかそうでないのか――ちゃんと見極めてみてちょうだい。それからなら、あなたの戯言も聞いてあげます」
「俺が……綾姫に会うの？」
「そうよ」
「でもって、妻にしたいかどうか見極めるつもりで……見るの？」
「そうです」

「……うーん」
大袈裟に唸ってみせたあと、
「おまえ、ほんとに面白いやつだな？」
九郎どのの頬から、ぽろりと苦笑が転がり落ちた。
その笑いに、陽ざしが鈍く反射して——。
真夏の午後も、そろそろ傾きはじめているようだ。

二

翌日のこと。
私は九郎どのを連れ、綾姫さまのお部屋に面した坪庭にひそんだ。
「いい？　今から姫さまが、奥方さまから琴の手ほどきをお受けになられますからね？　姫さまのお腕前を、よーく、聞きさだめてくださいな？」
「わかった、わかった」
頷いてはいるけれど、あくび混じりのだらしなさなんだから。
「ちゃんと聞いてくださいよ？」
九郎どのの袖を引き、萩の陰に隠れる。

ほどなく、綾姫さまと奥方さまが、廂の間に姿をお見せになった。
今日の綾姫さまは、私が念入りにお支度をしてさしあげたから、いつにも増して可愛らしさが輝くようだ。
小首をかしげられた拍子に、ゆたかな波のようにうねる黒髪が萌黄いろの袿をすべってゆく
あの様子なんて、可憐と言わずに、なんと表現したらいいんでしょう。
私は、実に満足した気持ちで、隣の九郎どのへ視線をまわす。
「……ふーん？」
そんなふうに、九郎どのは唸っただけだったけれど、内心では絶対、姫さまを見直す思いでいるはずよ。
そうしているうちに、廂の間では姫さまが、琴の爪をはめ終えられたようだ。
「さあ、姫」
奥方さまに促され、姫さまは頷いていらっしゃる。
やがて、つつがなく流れ出した琴の音は、蝉の声が低く滲む真夏の景色にも、さわやかに溶けはじめた。
姫さまの琴のお腕前は、ほんと、なかなかのものなのよ。
都育ちの貴族の娘である奥方さまは、箏の琴の名手なの。その奥方さまから、ご幼少のころから直々に手ほどきを受けられてきた姫さまなんですからね。

最近では、その音の中にも姫さまらしさが深まってきたというのか、冴えてのびる響きの尾が、なんとも可憐で愛らしくって……。

なんて、うっとりと瞳を閉じていられたのは束の間のこと。

突然、

——ビビーンッ……！

濁った音が、暑さにゆるんだ風の中、矢のように駆け抜けて消えた。

なんなの……!?

あわてて目を開けてみると、どうも琴の絃が切れてしまったようだ。

どうしたんでしょう？　姫さまにかぎって、こんなの、滅多にないことなのに。

廂の間が、急に騒がしくなった。

姫さまは——と見ると、絃の切れた琴を前に、今にも泣き出してしまわれそうなお顔なのだ。

ついつい、萩の陰から飛び出しかけた。

だって、こういうとき、姫さまをなぐさめてさしあげられるのは、私だけなんだもの。

でも、この状況をどう説明したらいいものかわからないから、うかつに顔を見せられない。

いらいらと、私は萩の陰にいる。

侍女のひとりが、姫さまに駆け寄り、まずは右手の親指から、爪を取ってさしあげているよ

うだ。

でも、だめよ。

こういうときは、とにかく姫さまの肩を抱いてさしあげなくちゃ。やさしく、あたためてさしあげるの。そうしないと——ああ、ほらほら、姫さま、本当に泣き出してしまわれたじゃないの！

あの侍女には、あとでひとこと、言っておかなくちゃだわ。

さらに募るいらいらを持て余し、思わず荒いため息を落としてしまった、そのとき。

「……ふーん？」

隣で、九郎どのの唸る声がした。

そうだ、この人がいたんだった……。

ああ、なんて悪いめぐりあわせだろう。よりによって、こんなところを見られてしまうなんて。

私は、内心、頭を抱えた。

気まずくて、九郎どのへと目を向けられない。

だって、彼がどんな顔をしているか、今の声でわかったもの。

どうせ、顔中に浮かべた薄笑いをニヤニヤと歪めて、私を見ていることでしょうよ。

「箏の琴っていうのはね、絃が切れやすいものなのよ」

九郎どのの顔を見ないままで言い、私は、そそくさと立ち上がった。

☆

このままじゃあ、すまされない。

九郎どのに綾姫さまを誤解されたこのままで、ことをすませてなるものですか。

だから、そのまた翌日。

私は九郎どのに、今度はひとりで、昨日と同じ萩の陰にひそんでいるように言っておいた。

昨日みたいな突発事故が起こっても、私がおそばについてさえいれば、どうとでも対処ができますからね。

そうしておいて私は、

「姫さま、今日は古今集をいたしましょう」

と、昨日よりもさらに念を入れたお支度で飾り上げた姫さまに、そんな誘いをかけた。

「古今集……？」

今日は碁をうって遊ぼうと決めていらっしゃったらしい姫さまは、わずか、不満げな色を眉のあたりに滲ませていらっしゃる。

「ええ。久しぶりに、おさらいをいたしましょうよ」

「でも……」

「せっかくのご才能ですもの、時には頭の蔵から取り出して風を通さなくちゃ。放っておいたら、腐ってしまうかもしれませんよ？」
「……そうかしら？」
姫さまは、ちいさく首をかしげられたあと、
「でも、そうね、羽衣の言うとおりね」
すぐに頷かれた。
これで、よし。
姫さまはなんと、古今和歌集一千余首を、すべて、そらんじていらっしゃるの。
これほどの才能を持ったお姫さまは、都にだってそうはいないはずよ。九郎どのに綾姫さまの素晴らしさを見せつけるには、まったくふさわしい場面でしょう？
私は、さっそく草紙を開き、
「うたたねに――」
と、最初の五文字を読みあげる。
すると姫さまが答えて、
「恋しき人をみてしより夢てふものはたのみそめてき。――小町ね」
まずは、無難にこなしてくださる。
では、次。

「秋の野に――」
「乱れて咲ける花の色の千種に物を思ふころかな。――今度は貫之」
「色見えで――」
「移ろふものは世の中の人の心の花にぞありける。――また小町。なんだか恋歌ばかりが続くわね？」
姫さまは、さすが、そこのところに、はやばやと気づかれたご様子だ。
そうなの。
なにしろ、妻問いのため垣間見ですからね。すこしは、姫さまの艶なるところも強調しておかなくちゃね。
私は、ふふふ、と笑ってみせたあと、さらに恋歌を続けて、
「言に出でて――」
「いはぬばかりぞ水無瀬川下に通いて恋しきものを。――紀友則だわ」
その後も姫さまのくちびるは、なめらかに恋歌をつづってゆく。
古今集には、実に三百六十首の恋歌が納められているんだけど、私が手当たり次第に選び出す五文字の続きを、すべて正確に歌い上げてくださる。
それだけじゃなく、私が時々、間違えて一度お出しした歌を読みかけると、
「羽衣、それはさっきも読みましたよ」

ゆったりとお笑いになりながら、おっしゃるの。
……はあー、さすがだわ。
いつもは、どことなく頼りなげで、はかなげでいらっしゃる姫さまが、古今集のこととなると、このご様子。ピーンッと一本、背中に筋が通ってしまわれるんだもの。
ただただ姫さまのご才能に感心するうち、私は、すぐそこの萩の陰に九郎どのがひそんでいるのだということなど、すっかり忘れてしまっていた。
やがて、恋歌も最後のひとつになる。
最後は、業平だ。
けれども私が、
「月や――」
と、はじめの五文字を口にしかけた、そのとき。
「おい羽衣、もういいよ」
坪庭のほうから、欠伸まじりの笑い声が聞こえた。
驚いて声を切り、そちらを見ると。
九郎どのなのだ。
高欄に肘をつき、その上に、妙に楽しげに笑う顔をのせた九郎どの。
「もういいよ、羽衣。よくわかったからさあ」

笑った頬が、ほろほろと崩れている。
「……羽衣？」
綾姫さまが、怯えた目を私に向けていらした。
他の侍女たちも、不審げに私を見つめる。
私はあわてて立ち上がり、
「なんで出て来るのよっ」
九郎どのに囁きを飛ばしながら、縁へと走った。
「だって、ほっといたら恋歌の次には四季の歌が始まっちゃうんじゃないかと思ってさ。飽きてきたよ、さすがに」
「恋歌だけで終わるつもりだったわよ。どうして我慢できないのよ」
「え？　そうなの？　じゃあ、あとひとつで終わるとこだったんだ？」
「そうよ」
と、答えたあと。
「――なんで？」
私は思わず首をかしげた。
「――？」
九郎どのの首も、一緒にかたむく。

〝なんで？〟の意味が、わからなかったらしい。
「つまりね」
私、これで終わりですよ——なんてこと、ひとことも言わなかったのに、それなのに、
「なんで、あと一首で終わるってわかったの？」
言葉を増やしてやると、九郎どのは、ああ——と頷き、
「古今集なら、俺もこどものころからよく読んでいたから」
「……九郎どのが？」
「俺が古今集を読んだらおかしいかよ？　俺はこれでも、都の貴族の家で育ってるんだぜ？」
「ああ——そうか」
九郎どのは、武家の生まれではあるけれど、実のお父さま亡きあと、お母さまが再婚したお相手、藤原長成さまに養われて育っている。
話は少しそれてしまうけれど。
実は、その養父の縁を辿ってゆくと、綾姫さまのお母さまにつながってくるの。
九郎どのが平泉へやって来た理由は、だからだったりするんだけれど、それはまあ、ともかく。
「歌は、男にとっても大切な教養だからな。今ここで何か詠んでみろって言われても、すぐに詠めるぞ？　詠んでやろうか？」

九郎どのは、豪語する。
さっきまでなら、
「ばか言ってるんじゃないわよ」
なんて、鼻先の笑いで切り捨てていたところだ。
でも、そうかあ……。
落ちぶれた源家の子よ——と、みんなの蔑む噂が、まずは頭にあって。
実際に会ってみたこの人も、木陰でだらだら昼寝なんかしてたりして。
なんだかすっかり、敬語を使うのも忘れちゃっていたような私だけれど。
そうよねえ。
この人って、世が世だったならば、時の歯車の回り方が何かひとつでも違っていたならば、こんなみちのくの地になんか来ることもなく、私なんかとは知り合うこともなく、もしかしたら宮廷にあがって、優雅な毎日を送っていたかもしれないような人だったんだわ。
「……そうよねえ」
思わず、ため息をついてしまった。
すると九郎どのの瞳が、いたずらっぽく、くるんと回る。
「おまえって、やっぱり面白いや」
「……え？」

「なんか、反応がすごく素直なんだもん。俺が綾姫をばかにすれば単純に怒るしさあ、昨日は昨日で、綾姫がトチればすぐにオロオロしちゃってさ。今だって、俺のことすっかり見直しちゃってるだろ？」

おっしゃるとおりでございますが。

「さっきまでは生意気な口をきいてたけどさ、今度、口を開いたら、きっといきなり敬語が出てきちゃったりとかするんだぜ？」

はいはい、まったくそのとおり。

私の中ではもう、〝九郎どの〟は〝九郎さま〟に変わってしまっているくらいよ。

「面白いよなあ、ほんと」

そう言う〝九郎さま〟は、なんだか妙に嬉しそうなの。

ほっぺたをニコニコとふくらませ、本当に嬉しそうに私を見るの。

「俺、おまえがいいや」

九郎さまは、言った。

「俺、綾姫よりおまえがいい。おまえみたいののほうが、すきだ」

――どういう意味？

私は、きょとんと首をかしげた。

すると、

「つまり――」

言いながら、九郎さまの手がやさしく髪にのびてきたかと思うと、あっという間に私は、彼の胸の中にすっぽりと収まってしまったのだ。

鼓動が聞こえた。高く、速く、波打つ音が、私の頬の上でふるえている。

「つまり、そういうことだ」

九郎さまは、抱きしめていた私の髪を、そっと撫でた。

そのままその手は離れてゆき、ふと気づくと、彼は後ろ姿になっている。テレた色を背中に滲ませ、走り去る。

〝そういうこと〟って……つまり、そういうことなの？

私は、ぽかんと縁に座り込んだままでいる。

蝉の声が、急に高くなった。

蝉に喰われて、真夏がどんどん深くなる。

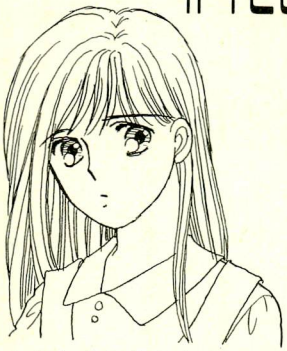
真夏という名の底なし穴に、ポンッと突き落とされたような気持ちがした。

私は、めまいを感じて目を閉じた。

ああ、どうしよう。

なんだか、気が遠くなってゆきそうだわ……。

interlude
あづさ



目が覚めたとき。
私は、ひどく幸福な気分に包まれていた。
私、還っていたような気がする。
どこだったか、還りたくてたまらない場所。誰だったか、還りたくてたまらない人。
いつだったか、還りたくてたまらない時間。
そこへ、私、還っていたような……。
ゆっくりと、まぶたを開けた。
見知らぬ夜が、目の前を流れていった。
ゆっくりと、起き上がる。
ここ——、どこだったかしら？
ゆっくりと、あたりを見回す。
私は、ひとりではなかった。隣に、よく知っている人が眠っていた。
でも、この人、誰だった？
ああその前に、ちょっと待って。
ねえ？　私って、誰だった？

……空っぽだ。
頭の中も、指の先も、視線の行方も。何もかもが空っぽで、どうにも頼りなさすぎて――。
と、突然。
「――起きたの？」
どこからか声がした。
辿ってみると、部屋の隅、窓辺の壁に背をもたれ、こちらを見ている人がいる。
あれも、誰だったかしら？
「午前中に倒れたまま、昼になっても夕メシになっても起きないから、心配してたんだよ？」
「――倒れた？」
「うん。ミイラを見たショックかな？　一緒に陸も倒れちゃった。こいつ案外、弱いな」
「……ミイラ。……陸」
呟くと、じわりじわり、沁みるように記憶が戻ってきた。
私の名前は、三浦あづさ。
隣に眠っているのは双子の兄、三浦陸。
それからあの男の子は、越智靖彦。ここは彼の家で、私は陸とふたりでミイラを見にやって来て……。
頭を振ってみた。

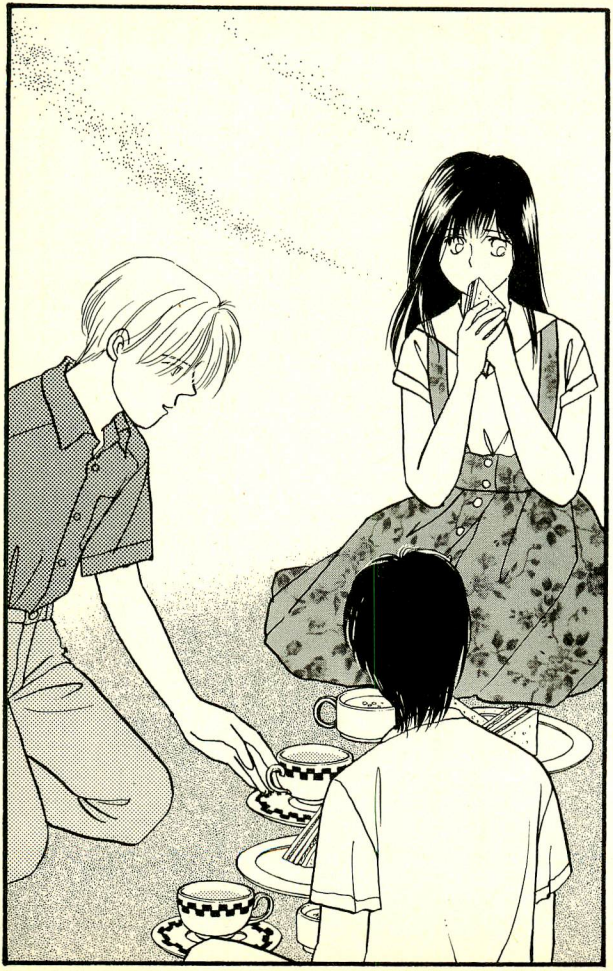
沈殿していた記憶が舞い上がり、混じり合い、私の意識はすっきりと、一色に晴れてゆく。
「……夢を見てた」
と、私は呟いた。
「夢――？　どんな？」
「わからない。忘れちゃった」
「ふうん――？」
「今、何時？」
「夜中の二時」
「……二時」
変な時間に起きちゃったなあ。どうしよう？
「なにか食べる？」
誘われてみると、そうね、おなかがすいている。
私は、こくりと頷いた。
「陸も起きるかな？」
越智くんが言うので、私は陸に近づき、
「……陸？」
囁いてみた。

陸はわずかにまぶたを動かしたけれど、起きない。
「起きないかな？　ほっとく？」
越智くんは言うけれど、でも私、この子とふたりきりでごはんを食べるの、嫌だわ。
「陸、陸？」
頬をピシャピシャと叩いてみた。
そしたら、ムニャムニャと唸る陸に、その手を払いのけられた。
じゃあ次は耳だわ。両手で両耳を引っぱって――。
陸は、やっと薄目を開けた。
「……なんだよ？」
「起きない？」
「やだ」
「だって、おなかすかない？」
「すかない」
「ずっと寝てたんだよ？　起きて何か食べたほうがいいよ？」
「いらない」
またまぶたを閉じそうになったので、布団の中から右腕を取り出し、引っぱった。
「ほら、起きようよ」

「やだってば」
「起きようってば」
右腕を、引っぱりに引っぱると、陸はしぶしぶ、半身を起こす。
でも、
「まだ眠い」
そのままま、足にかかった布団の上に、うつ伏せになってしまう。
まったくもう、しょうがないな。
「私、おなかすいた！　はやく何か食べたい！」
耳元で、怒鳴ってやった。
「うるさーい……」
陸はもごもごと文句を言っていたようだったけれど、結局、起きた。
ああよかった。これで越智くんとふたりきりにならずにすむ。
ホッとして、窓辺の彼を振り向いたとき。
「なんか、恋人同士みたい」
彼は、言った。くちびるの端を皮肉(ひにく)げに歪(ゆが)ませて。
私は——。
胸の奥に眠る何かが、たまらなくせつない音をたてて軋(きし)むのを感じた。

☆

サンドイッチとスープが用意されていた。
真夜中、越智くんの部屋で。
私と陸は、ぼそぼそとサンドイッチを口にする。
「あとこれ、ミントティーとかいうやつ。姉さんが眠れないときに飲んでるやつ。気持ちが落ち着くとかいうやつ」
越智くんが作ってくれたのは、濃い紅いろのお茶だった。なんだか、しぼり取ったばかりの血を涙で薄めたみたいな色——。
軽く、めまい。
「どうしたの？」
訊ねる越智くんに、私はただ、首をふってみせた。
サンドイッチはおいしかった。野菜がたっぷりで、さっぱりしていて。スープも、あっさり味のトマトスープ。みんな、越智くんのお母さんの手作りなんだろう。本当においしくて——普段だったら、この二倍は食べちゃうだろうくらいのおいしさなんだけど。
まるで、お通夜のお膳みたい。
陸が、なにもしゃべらない。越智くんとは、視線を合わせようとすらしない。



私は、横目で陸を気にしつつ、ミントティーのカップに口をつけた。
血と涙の塩味がするかと思ったら、それは、ほんのりと甘い。
沁みてゆくようだった。喉に、胸に、心に、想いに、記憶に——。
まぶたの奥で、なにかが揺れた。この甘さが私に教えてくれる、なにか——。
なんだった？
なにか、とても大切なもの。とても懐かしいもの。とても愛おしいもの。
思い出せたら、私、とても幸福な気持ちになれるような気がするんだけど。ほら、さっき、夢の中にいたときみたいに——。
ふわり——、まぶたが閉じかけた。
でも、そのとき。
「足りない」
陸が言った。
その途端、どこか遠くへ引き込まれかけていた私の意識が、ぱちんと晴れた。
「サンドイッチ、足りない」
「まだ食うの？」
訊ねる越智くんに、陸は、ぷっきらぼうに頷いてみせる。
「待ってな」

越智くんは、階下の台所へ残りのサンドイッチを取りに行ってくれた。
ふたりきり、残された私たち——。
それでも陸は、くちびるを開こうとすらしない。
「——ねえ？」
そっと肩をつついてみた。
陸は、ちらりとこちらを向いた。
「なんか、変なことになっちゃったね」
私の言葉に陸は答えず、スープカップを取り上げた。
ひと口、含む。ゆっくりと喉に溶かす。
それから、
「夜が明けたらすぐに帰る」
低く、言う。
「夜が明けたら——？」
「ああ。一番の電車で帰る」
「でも、越智くんのお母さん、わざわざ夜食を用意してくれたりしたのに、そんな慌ただしい帰り方をしたら失礼だよ？」
「いやだ。帰る。そんなの、どうでもいい」

「陸……」
「気持ち悪いんだよ、ここ」
「ミイラが？」
「そうじゃない。ここにいると、なんか気持ち悪い。夢が――気持ち悪い」
「……夢が？」
夢だったら私も見てたわ。
でも、気持ち悪くなんかなかったけどなあ。それどころか、今、この現実の中にこうしているよりも、ずっとずっと幸福な気持ちになれる夢を見ていたけどな、私。
そう言うと、陸はちらりと私に一瞥をくれた。
その目の中に、あまりにも複雑すぎて私には読み取ることすら出来ない色が、揺れている。
でもこの目、私、どこかで見たことがあるわ――。
ふと、そんな気がしたんだけれど。
気がした途端、笑ってしまった。
当たり前じゃないの。生まれたときから見ている陸の目だもの。
笑って、それでも胸の底で揺れ続ける奇妙な思いを、消し去ろうとして――。
でも、消えない。
なんだろう、これ？

なんか変だ、私。
食べかけて右手に持ったままだったハムサンドを、お皿に置いた。
なんだか食欲がなくなっちゃった……。
陸は、スープカップに口をつけたまま、もう何も言わない。
越智くんは、まだ帰ってこない。
私は、所在なく部屋の中を見回した。
ごく普通の、男の子の部屋だ。すっきりとモノトーンにまとめて、飾りなんかなんにもなくて。今、越智くんは、大学に通うために家を出て、ひとり暮らしをしているわけだから、なんにもなくなっちゃっていて、よけいにすっきりと素っ気なく見えてしまう部屋。
その部屋の片隅に、妙にそぐわない本が放り出してあった。
『義経記』と『保元物語』
古典なんだろうと思う。
だって、あれでしょ？『義経記』っていうのは、読んだことないけど、義経が主人公になっている話のはずで……。
でも『保元物語』って知らないな。なんだろう？
そちらへ膝で擦り寄り、手に取ってみようとした。
けれどもそのとき、ドアが開き、越智くんが帰ってきた。

「ほら陸、サンドイッチ」
山盛りサンドのお皿が、陸の前に置かれた。
陸は、ありがとうも言わずに手を出した。
無言でそれを見守った越智くんは、私のほうを向き、
「その本がどうかした？」
私の指の先、もうちょっとで触れそうなところに、『保元物語』の本がある。きれいな箱に納められた、なかなか立派な本なのだ。
「どうしたわけでもないんだけど、なんか、この二冊だけいきなり古典なものだから、気になっちゃって」
「変かな？」
「古典、好きなの？」
「別に好きなわけじゃないよ。高校のときの古典の成績、さんざんだったし」
「じゃあ、なんであるの？」
「……わかんない？」
越智くんの瞳が、不思議な角度にかたむいた。
とろりとして、水あめみたいに光る目は、なんだか私の反応を試しているみたい。
でも、反応って何？　何に対する反応？　わからないわ。見当すらつかないわ、あなたが何

を知りたがっているのか。
私は苦笑しつつ、
「わかるわけ、ないわよ」
「……そうか」
越智くんの目が、ふっと伏せられた。
そのとき、彼の睫から、ほんのり、寂しさの色がたったような……。
でも、それは一瞬のこと。越智くんの目は、すぐに元のおだやかさを取り戻し、
「それ、どういう話か知ってる？」
「それって――『保元物語』のこと？」
「そう」
「知らないわ」
「軍記ものだよ。『平家物語』みたいなやつ。源平合戦よりもずっと前に、保元の乱っていうのが起こって、そのときのことを書いたものがたり」
「ふうーん……」
「天皇家の内紛と摂関家の内紛とがからみあって起こった戦なんだけど、一方には平家がついて、もう一方には源氏がついて、戦うんだよ。でも、源氏は二手に分かれていてさ、源義朝ひとりだけが、平家と同じほうについて戦ってたの。父子兄弟で戦って、結局、勝ったのは

平家がついたほう。だから源氏は、義朝の他、ほとんどが殺されてしまったわけ。義朝の父親も、ちいさな弟たちも」

「ふーん……」

「そういう話。――そうだ、義朝っていうのは義経の父ちゃんだよ」

「へえ？　義経の？」

「うん。あづさちゃんが、あのミイラの正体かも――って言ってた、義経」

そうだった。

私、そんなことを言っていたんだった。

男のミイラが義経で、女のミイラが静御前。

ほんとにそうだったら、ほんとに素敵よねえ。

「実は、うちの姉さんも、おんなじこと言ってるんだよなあ」

越智くんは、苦笑しているけれど。

でもね、女の子にとってはね、最高に素敵で、最高に悲劇的な恋人同士が、それでも永遠に寄り添い合い、永遠を眠る姿というのは、究極のロマンチックなんだもの。

「義経の永遠の恋人は、やっぱり静？」

「そうよ。当たり前じゃない？」

「ふうん？　でも義経は、違う女と一緒に最期を迎えているよ？」

「――え？」

うそ……、そうなの？

「義経は、この平泉で藤原泰衡に攻め殺されたことになっているけど、そのとき義経のかたわらにいたのは、静じゃないもん」

「じゃあそれ、誰なの？」

「さあ？　義経が京都で娶った平家の姫だとか、平泉で娶った現地妻だとか、いろいろ言われているけど、頼朝が選んでやった関東の武家の姫だっていうのが、一番、有力な説みたい」

……ふうん？

でもさ――と、私は、あくまでもロマンチックを主張して、

「義経には、平泉で死なないで北海道へ渡ったとか、ジンギスカンになったとか、いろいろ伝説があるじゃない？」

「ああ、あるねえ」

「だからやっぱり、義経なのよ」

「――ん？」

「義経が北海道に渡ってね、静がそれを追いかけて行ってね、でもふたりは北海道で、あんまり寒くて死んじゃうの。その遺骸がミイラになってね、どういうわけか平泉に帰ってきてね、今は越智くんの家で守られている――そういうの、どう？」

「どう――って……」
越智くんは、くくっと肩をふるわせたかと思うと、こともあろうか、吹き出すのよ。
「なんなんだよ、その、あんまり寒くて死んじゃうってのは！」
……そっちこそ、なんなのよ。せっかく、すごい推理だと思ったのに。
私は、ムッと怒りの気持ちをくちびるに集め、
「だって、死んじゃう理由が思いつかなかったんだもの」
「べつに特別な理由なんかなくたって、ふたりは幸せに暮らして、しかるべき年齢がきたら死んじゃって、そのあとミイラになりました――それでよくない？」
「じいさんばあさんになってから死ぬのは、いや」
「なんでだよ？」
「義経と静は、若くてかっこよくてきれいじゃないと、いや」
「知るかよ、そんなの」
「だって――」
と、反論を続けようとした。
けれどもその瞬間のこと。
私は、は……っとくちびるを閉ざす。
――だって。

陸が見ている。
とろりと光のよどむ目で、私を——いいえ、私と越智くんとの間を行き来する言葉たちを見つめている。
私が黙り込んだ意味を、越智くんはすぐに理解したようだ。ゆっくりと、陸のほうを振り向いた。
陸は、彼の目に答えて、
「義経なんかであるもんか」
くちびるの端を、つ、と歪め、
「——ばかばかしい」
吐き捨てた思いが、苦く、私の胸に届いた。
陸は、寂しがってる。
私が、越智くんとばかり話していたから、陸のことを忘れてしまっていたから、寂しがってる。
陸のそばへ戻らなきゃ。
私は、ふらり、立ち上がりかけた。
けれども越智くんに左手を引かれ、戸惑った。
「——手を……」

放して？
見つめる瞳で訴えた。
でも彼は、私の左手首を摑んだ手に、さらに力を込めて、
「ミイラを見に行こうか？」
「……ミイラを？」
「そう、夜のミイラ。あれが義経なのかどうか、確かめに行こう？」
私は迷わず彼の手を払い、
「いやよ」
「どうして？」
「趣味悪いわ、こんな真夜中に」
「怖い？」
越智くんは、瞳の端で笑った。
そうね、怖い。
だって真夜中のミイラよ？　怖くないってほうがおかしいわ。
それが私の本音だけれど、怖いと言って弱味を見せるのはいやだった。
私は、精いっぱい、真っすぐに視線を伸ばし、
「ばかなこと、言わないでよ。今から見に行ったからって、あのミイラが義経かどうか、わか

るわけないでしょう？」
「――そう？」
「当たり前よ。それともなあに？　あのミイラ、夜になると血を取り戻して肉を取り戻して、動き出すとでもいうの？」
「かもしれないよ。だから、見に行こう？」
越智くんは、笑っている。おだやかに私を見つめる。
でも、何かおかしい。この人を包む何か――空気のようなもの、水のようなもの、ゆらりとゆらめく程度に動くもの、何かが……。
狂っている。
ミイラよりも、それが怖い。
私は、陸の目を探した。
その気持ちを言葉にしなくても、陸はすぐにわかってくれる。私が探すよりも早く、私の視線をたぐり寄せてくれる。
でも。
「いいよ。ミイラを見に行こう」
そう言ったのは、陸だった。
「陸――!?」

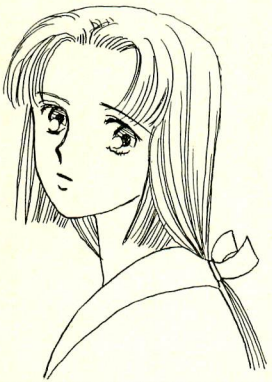
どうして？
訊ねる私の目に、陸は無言の制止をくれて、
「見に行こう、ミイラ。本当に義経なのかどうか、それがわかるのかどうか――」
そのとき、窓の外を、
――チカッ……！
と、一瞬の真昼が走った。
稲妻が揺れたのだ。

☆

供養堂の中には、濁った水の匂いが溜まっていた。
雨が近いのかもしれない。
越智くんはろうそくを一本だけ灯し、滲むその光を頼りにミイラの柩を出している。
私は陸の腕にすがり、伏せ気味の目をわずかにだけ開けている。
陸は、無言だ。
柩が開かれた。
陸の腕の隙間から、おそるおそる見ると、ミイラは昼間の姿のままに眠っていた。
「べつに、変わった様子なんてないじゃないの」

無残に枯れた、男のミイラ。
死んでいるのに不思議な瑞々(みずみず)しさをその身に宿した、女のミイラ。
「そうだな、変わらないな」
越智くんは、あっさりと頷いた。
でも、女のミイラの柩に寄り添い、そっと彼女を見つめている越智くんの、その目がどんな思いを滲ませているのかは、わからない。
「変わらず——八百年以上も変わらず、ここでこうして寄り添って——ミイラになってまで寄り添って——それは、やっぱり、ふたりが永遠の恋人同士だからなんだろうか？」
彼が、こちらを振り向いた。
その目に滲んでいたものは。
——絶望……？
「そんなに愛していたのかなあ？　そんなに……」
瞳に滲んだ絶望を、彼は哀しく歪ませて。
「教えてよ」
私と、そして陸に。
「今もまだわからないんだよ。教えてよ」
その、瞬間。

水の匂いが濃くなった。
——どーんッ。
と、天上から珠が降るような不思議さで、あたりは雨に埋めつくされた。
「教えてよ」
彼の声が、がらんどうの耳をまわる。
「教えてよ。そんなに愛していたの？」
夜を突く雨。
夢を突く声。
「教えてよ……」
夢が、私を、喰い荒らす——。



星の記憶II

～ふたたび、羽衣～

一

胸がさわぐ。
溶けて流れる夢の中、ちりちりと胸がさわぐ。
「……羽衣？」
なあに、それ？
「おい、羽衣？」
なんなの？
夢が飛沫をあげている。
私はちいさく右手を上げて、それを払った。
「おい、羽衣ってば！」
夢の飛沫が、また――。
もう一度、それを払おうとして、けれども、私は戸惑った。

今のは声？　誰の声？
「いいかげんに起きろよ？　寝過ごしても知らんぞ？」
起きる――？
ああそうか、私は眠っているんだわ。
じゃあ起きなくちゃ。
まぶしいものを瞳にゆっくりと馴染ませるように、まずは薄く、私はまぶたを開いてゆく。
「起きたのか？」
ええ、起きた。
「でもまだ頭が寝てるだろ？」
そんなことないわ。
「寝起き悪いな、おまえ？」
「だから、そんなことないんだってば」
呟きながら、半身を起こした。
「夢を見ていたんだけど、それがなんだか、からだにぴったりとはりついてくるような夢だったものだから、なんだか……」
「夢？」
「そうなの」

頷いたんだけれど。
そのとき、私の中から夢の気配がすっきり落ちた。目が、醒めた。
「あ、起きた」
私の顔をのぞき込み、九郎が言った。
彼を見つめ返す私の目は、思わず、きょとんと止まってしまった。
なんで――？
九郎が、なんで、ここにいるの？
ここ、私の部屋よ？　私、寝てたのよ？　今、朝なのよ？　なんで――。
「なんで、いるのよ!?」
「誘いに来た」
けろりと、九郎は言う。
「誘いに――ですって？」
「ああ。馬に乗せてやる。北上川を、行けるところまで北へ、走らせてみたいと思って」
けろけろと言ってのける。
「だったら外から声でもかけてちょうだい！　なんで中まで入り込んでくるのよ!?」
「声、かけたぞ？　でもおまえ、起きないんだもん」
……なんか、変にぐっすり眠り込んでたみたいだからなー。

でもさ、それにしても、よね。
「それにしても、勝手に女の子の部屋の中に入り込んでくるなんて、失礼よ」
「いいじゃん、俺とおまえの仲だもん」
「どういう仲よ？」
「こういう――」
と、九郎の手が私の髪に向けて動きかけた瞬間。
けれども私は、飛びすさってやった。
「……つまらねえなー。おまえは」
「朝からばかなこと、してんじゃないわよ」
「じゃ、夜ならいいの？」
九郎は、頬で、にっこり笑う。
……なんとかしてよ、もう。
あの日以来。
綾姫さまをはじめとした皆の前で抱きしめられて以来、九郎は、本気なのか冗談なのか遊びなのか、私のまわりをうろうろと歩き回って離れない。
おかげで、
「羽衣ももう十六ですものねえ。わたくしよりも男の方のほうを大事にするようになってしま

っては寂しいけど、でもね、身の回りが華やかになるのは、いいことだと思うわ」
なんて、姫さまにまで冷やかされちゃって、迷惑してるのよ、私は。
でもね。
姫さまは、私につきまとうこの人が、ご自分のお婿さまに——といわれている源九郎義経その人だとは、ご存知ないの。姫さまと九郎が正式に顔を合わせる機会は、まだ一度もなかったから。
私としても、なんだか姫さまの縁談に水をさしたみたいになってしまって言い出しにくくって、そのままなんとなく、ずるずると……。
言わなきゃいけない、いけないと思いつつ言い出せず、ここのところ、ゆううつな毎日が続いている。
私のせいばかりじゃないんだけど。
この人のせいでもあるんだけど。
おかげで、〝九郎さま〟とも〝九郎どの〟とも呼ぶ気はなくなっちゃって、思いきり呼び捨ててやったりなんか、してるんだけど。
「なあ、羽衣？」
九郎は、呑気な声で私を呼ぶの。
私は夜具を抱きしめつつ、ため息を洩らし、

「なによ？」
「なんか外が騒がしくなってきたけど、のんびりしてていいのか？」
言われて、耳をすませてみると、あちらこちらから、かたかたと今日一日が動きはじめた気配が聞こえている。
「起きなくちゃ！」
綾姫さまをお起こしするのは、毎朝、私の役目なのよ。
「支度するんだから、出てってよ」
「じゃあ、綾姫の朝餉がすむころに迎えに来る」
「だめよ」
「なんで？」
「私は九郎みたいにヒマじゃないの。今日は、姫さまのお供で衣河館に行くの」
衣河館と呼ばれる、この伽羅御所からほど近い高台にある館には、綾姫さまのお祖父さまが住んでいらっしゃる。
藤原基成さまとおっしゃるその方は、もとは陸奥守と鎮守府将軍を兼任なさっておられた、都の貴族。
基成さまの妹ぎみに当たられる方が、前関白さまに嫁いでいらっしゃり、その方はもう亡くなられているんだけれど、お子さまが——つまり、基成さまの甥御さまに当たられる方が、毎

年、ご機嫌伺いの使者を送ってくださるのだ。
「それで、綾姫も行くのか」
「そうよ」
「ふうん？　ご機嫌伺いか――」
九郎は、妙なものを含んだ声で唸り、
「それ、毎年、来てるのか？」
「そうよ」
「ご機嫌伺い――、ね。そんなことを言って、つまり平家の偵察使なんだろうが」
「平家の……？」
どういうこと？
「おまえ、藤原基実の一家と平家とのつながり方、知らないの？」
知るわけないでしょ、そんな遠いところの話。
「つまり――」
綾姫さまのお祖父さま・藤原基成さまの妹ぎみが嫁いでいらっしゃったお相手が、藤原基実という前関白。
基成さまの妹ぎみが早くに亡くなられたあと、後妻に入ったのが、平清盛の姫・盛子さま。
さらに、藤原基実の子――つまり基成さまの甥に当たる藤原基通に嫁いでいるのが、盛子さ

まの妹ぎみ。

「その縁を隠れ蓑に、ご機嫌伺いの使者を装わせて、奥州の――秀衡の様子を押さえておくために、実は清盛が送っている、偵察使」

そうに違いない、と九郎は言う。

「でなかったら基通も、こんなみちのくの、実母の兄というだけの人のところへなど、毎年毎年、ご機嫌伺いなど送ってくるものか」

私たちなんかは、ここで毎日、呑気に暮らしているから、よくわからないんだけれど。うちのお館さまが持ってらっしゃる力というのは、相当なものなんだそうだ。

まず、奥州藤原家には富がある。豊富に産出する金、良質の馬、そのほかにも北のめずらしい産物がいろいろと……。

それらの富と、広大な支配地の上に、ゆったりと座するお館さまのお姿は、あの平清盛をして脅威させるというのだもの。

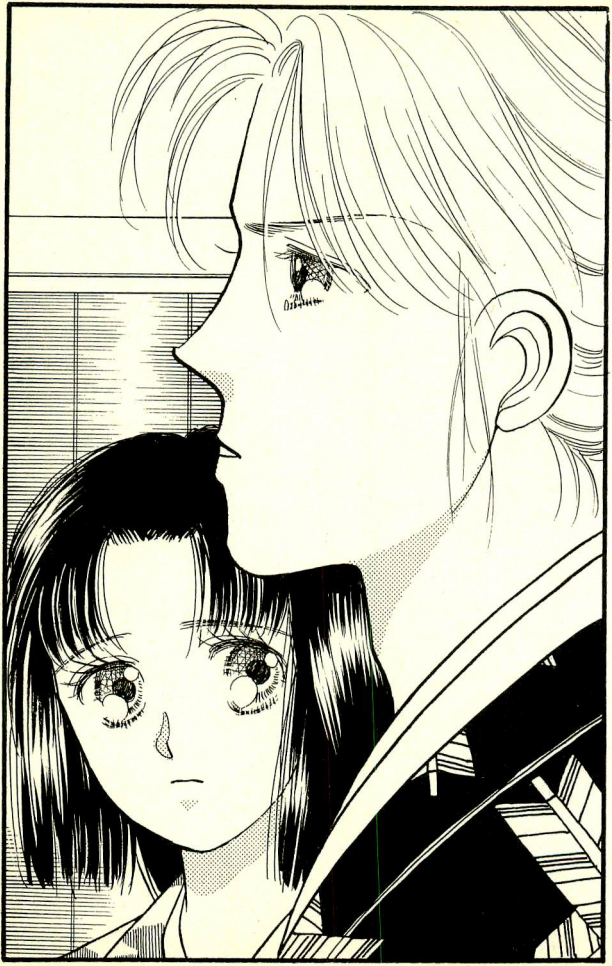
「せいぜい、豊かなところを見せつけてやって、びくびくさせておくがいいさ」

憎々しげに、九郎は見えない遠くを見つめた。

その視線の先にあるものに、そっと目を合わせてみつつ、

「平家のこと、嫌い？」

私は訊ねる。



「嫌いだ」

九郎はみじかく答えた。

平清盛に戦で敗れたのち、頼った家臣に殺された、九郎のお父さま。

九郎がまだ幼いころ、無理に請われ、いっときを清盛の側室として過ごさなければならなかった、九郎のお母さま。

はた迷惑小僧の九郎だけど。呑気ばかの九郎だけど。

でも、今、この瞬間ばかりは、その姿が、たまらなく小さく、頼りなく、そして愛おしい少年に見えるよ。

「――九郎？」

私は、やさしく彼を呼んだ。

彼は、まだ荒れたままの気持ちを持て余すように眉を寄せ、

「なんだよ？」

こちらを向いた目に、

「私、支度するんだから出てって言ったでしょ？」

私はわざと、いつも通りの素っ気なさを装ってみせた。

だって、こんな九郎、よくないよ。九郎には、いつもいつも、はた迷惑小僧で、呑気ばかで、いて欲しいよ。

元気、出してよ。
「――ね？」
私は、眉の端にだけ、かすかなやさしさを滲ませた。
――すると。
九郎は、私の気持ちをわかってくれたらしい。くちびるを、に……っと、笑ったかたちに歪ませた。
「わかったよ。出てってやるよ」
呑気に、ゆったり、立ち上がる。
そして、出てゆこうとする背中に。
「あのね、今、見ていた夢の中にね、九郎がいたよ」
私は、そっと呟いた。

☆

風が、揺れた。
途端に、ふわりと舞い上がる、さわやかに甘い香りがある。
「まあ、なんの……？」
袖口の色をさらりと揺らし、田鶴（たづ）さんは、縁の向こうの庭をのぞき込むように膝（ひざ）を立てた。

「くちなしでしょう」

そう言いつつ、私は立ち上がり、庭の様子をのぞいたけれど、近くにそれらしい花の白さは見えなかった。

「どこかに咲いているのが、風でここまで匂ってきたのじゃありませんか？」

「きっとそうね。でも、本当によい香りだこと」

田鶴さんは、うっとりとまぶたを閉じた。

――衣河館で。

綾姫さまには乳母どのおひとりが付き添い、使者からのご挨拶を受けている間、私は田鶴さんという姫さま付きの侍女とふたり、この間に控えているのだった。

都からの使者を迎え、忙しくしているのか、私たちの相手をしてくれる者もいない。

ふたりきり。

「今年は、御所のくちなしは、あまりよい香りに咲きませんでしたね」

「そうねえ。綾姫さまがお好きなのに」

「私、ひと枝もらってきましょうか？」

「じゃあ、どなたかをお呼びして――」

「それでは面倒だもの、ちょっと行って、さっと切ってきてしまえば、どうです？」

「そうね」

私と田鶴さんは、秘密のように笑い声を合わせた。
ちょっと行ってくる――と言ったのは私のほうだ。
素早く立ち上がり、庭に下りてみた。

☆

先客がいた。
くちなしの香りがさらりと流れる中、足を止め、花びらの輝く白を見つめる人。
都の公達だろうか？　いや、身なりからみて、その従者だろう。
どうしよう？
私は、こちらの存在をその人に知られるより早く、足を止めた。
だって私、花盗人なんだもの。ちょっと後ろめたいじゃないの。
戻ろうか？　それとも隠れていて、あの人が行ってしまうのを待とうか？
決めかねているうちに。
見つかってしまった。
その人は、香りの流れてゆく先を追うような自然な仕草で、こちらを向いた。
そして一瞬、その人の瞳に滲んだ驚きの色――。
けれどもそれは、すぐに微笑に溶けてゆく。

「こんな北の地にも、くちなしが咲くのですね」
その人は、言った。
「ええ、咲きますよ。こちらのお館もですけれど、伽羅御所では特に、藤原のお館さまのご威光のもと、咲かない花などひとつもないくらいですわ」
「なるほど――」
やさしく頷くその笑顔を、どこかで見たことがあると思った。
どこだろう？　いつだったろう？
でも都の人ならば、会ったことなどあるわけがないし。
「こちらのお館の女房衆でいらっしゃるのかな？」
訊ねられ、私は首をふり、
「いいえ、わたくしは、伽羅御所の姫ぎみ、綾姫さまにお仕え申し上げている者です」
「ああ、姫さまの――」
「はい」
「こんなところをふらふらしていて、いいの？」
「いえ――あの、私、実はくちなしの花をひと枝いただいてしまおうと思って」
こっそりと肩をすくめてみせた。
この人なら、やさしいから大丈夫――そんな気がしたから。

言っちゃった。
するとやっぱり、その人は、
「可愛らしい花盗人ですね」
くすくすと、私の肩から落ちたものとよく似た笑いを返してくれる。
「では、わたしがお切りしましょうか」
言うなり、その人の手は、太陽のしずくもしたたり落ちるほどに濃く輝く緑の中に、さし延べられた。
くちなしを、ひと枝——。
さわやかな香りが、私の手の中に降りてきた。
「ありがとうございます。綾姫さまが喜ばれますわ」
「姫さまは、くちなしがお好きでいらっしゃるのですか？」
「ええ」
「あなたは？」
「私ですか？　私も大好きです。くちなしの香りの中にいると、なんだか安心します。母の腕の中にいるみたいで——。なあんて、私は母を知らないんですけれどね」
「母御のことをご存知ない——？」
「私がまだ小さいころ、父も母も火事で亡くなったそうですから」

「それはそれは――」
「今は、兄とふたりきりです」
「兄ぎみと――」
その人は、すこし考え込んだ目をしたあと、
「この平泉のお生まれですか？」
「はい――？」
「あなたと兄ぎみは、この平泉で生まれ育っていらっしゃったのですか？」
「そうですけど――」
なんでそんなこと、訊くんだろ？
私の目が、いぶかしく歪んだのがわかったらしい。その人は、慌てて頬をやさしい微笑に染め、
「あなたにそっくりなお方を、わたしは存じ上げているのですよ」
「私にそっくりな――？」
「はい。くちなしがどの花よりお好きでいらっしゃる、美しいご婦人です」
「はあ――？」
「あまりによく似ていらっしゃるものですから、先ほどは、ついつい見とれてしまいました」
「はあ……」

なんだろ？
これって、噂によく聞く、都では当然のたしなみの、恋のかけひきってやつかしら？
でも私、そんなの、なんて答えたらいいのかわからないわ。気のきいたお返事なんて出来やしないわよ。
「私、平泉生まれの平泉育ちですから。よく似た方をご存知と言われても……」
もじもじと答えると、その人の瞳の中で、やさしい微笑が、さらにさらに深まった。
「そんなふうに奥ゆかしくていらっしゃるところまで、本当によく似ていらっしゃる。――不思議ですねえ。わたしは、この地に参ったのは初めてのことですが、なんだかこの旅は、あなたにお会いするためのものだったような気がしますね」
「……はあ」
なんなんだろう？
なんか、よくわかんないけど。
いいや、逃げちゃえ。
私は、てのひらの中にくちなしを抱きしめ、
「お花、どうもありがとうございました。私、早く戻らなくちゃいけないですから」
とりあえず、微笑んでみせた。
それから、くるっと踵（きびす）を返す。

すると、背中から。

「わたしは、平頼盛さまにお仕えしている者。また、いつかどこかでお会いすることがあるやもしれませんから、どうぞ、覚えておいてくださいね！」

平家の郎党――？

お公家さんのお付きの人の格好、してなかった？　でもあの人、ほんとは武士なの？

じゃあ、九郎の言ってたこと、本当なのかしら？　藤原基通さまからのお使者というのは、実は平家から放たれた偵察のための――？

ちらり、振り返ってみた。

あの人は、それに気づき、にこっと笑った。

やっぱり、なんとなく見た覚えのある人だなあと思った。

二

ある朝のこと。

「羽衣、羽衣、おまえ、今日はずーっと、わたくしのそばについていてくれるわね？」

と、綾姫さまに、しっかりと袖口を抱きしめられてしまった。

でも、困ったな。私、今日はちょっと用事があるんだけど。

私の表情から、私の気持ちを素早く読み取られたらしい綾姫さまは、
「だめよ。おまえ、今日はどこへも行っちゃだめ。だって、わたくし今日、九郎さまにお目にかからなくちゃいけないのよ？　正式に、許嫁者として、お目にかからなくちゃいけないのよ？」
そうなの。
今日は日がいいから――と、ついにお館さまが、姫さまと九郎との対面を、正式に計画なさっちゃったの。
それを聞いて、私はあわてた。
のんびり構えている場合じゃなかった、九郎のこと、なんとかしなくちゃ――って。
それでも、九郎はあくまでも姫さまと結婚する気はないなんて言うものだから、私、
「だったらそのように、お館さまに申し入れておいてね」
ちゃんとそう頼んではおいたのよ。
姫さまも嫌がっていらっしゃるし、ふたりが嫌だというのなら、成立しないほうがいいご縁なのかな、と思って。
でも九郎、だめなのよ。いつまで待っても、ちゃんとお館さまに言ってくれないの。
「あれから秀衡も、べつになんにも言ってこないもの、ま、なんとかなるさ」
ですって。

面倒くさがってるのよ。

まったく、男の人って、どうしてこうなのかしらね。細かいこと——細かいけれど大事なことを、すぐに面倒くさがるんだもの。まったく、あてになりゃしない。

仕方ないので、私は自分でお館さまのところへ行った。

お館さまに、すべてをお話ししたら、

「わたしにとっては願ってもない縁なんだがなあ。ふたりがどうしても嫌だというのなら、まあ、考えてみないでもないが。とりあえず、会わせるだけは会わせてみよう。案外、お互いに気に入らんともかぎらんし。まあ、すべて任せておきなさい。わたしが、うまく収めてやろう」

と、いうことになったの。

お館さま、絶対に無理強いはしないとお約束してくださったし、それなら、九郎にとっても姫さまにとっても、悪くはないんじゃないかな、と、私も思って。

ただ、その席に羽衣はいないほうがいいんじゃないか——と、お館さまがおっしゃった。

九郎が私を気に入ってくれているという言葉の、どこまでを本当の気持ちと信用していいのか、私にはまだよくわからないんだけれど。

彼の言葉や行動のすべてが、あんまり直接的すぎてしまって、そういうのって、逆に疑いたくなってしまうというか——たとえば、姫さまとの縁談を断る口実のためのダシに、私を使っ

ているのかも、とかね。
疑いだせばきりがなくて、どうも信用しきれずにいるんだけれど。
それでも、その席に私がいると、起こらなくてもいい騒動が起こってしまうかもしれないから——ということで、私は、お館さまから今日一日、お休みをいただいているの。
それを利用して、ちょっと兄さまに会いに行ってこようかな——なんて、思っていたんだけれど。
「だめよ！」
姫さまは、強い調子で命令なさる。
かと思うとそのあとすぐ、心細げに私を見上げ、
「おまえ、いなくちゃだめよ。わたくしは、おまえがいなくちゃだめなんだもの。安心できないんだもの」
「ですが……」
「どうしても、だめなの？」
「はい」
「羽衣、冷たい……」
姫さまは、じわりとふるえる声で、そんなことをおっしゃるの。
拗ねてらっしゃる。甘えてらっしゃる。

ああ、どうしよう？　抱きしめてさしあげたい。あたためてさしあげたい。甘えさせてさしあげたい。たっぷり泣かせてさしあげたい。どうしよう？

でも今日は、お館さまから直々にお指図をいただいていることだから。

私は、頬を必死に引いて微笑を作り、

「大丈夫ですよ、姫さま。お館さまがいらっしゃいます。乳母どのもいらっしゃいます。羽衣などいなくとも、怖いことなど何ひとつありませんわ」

「……どうしても、一緒に来られないの？」

「兄との約束は、とても大切なものなんです」

嘘をついた。

「……そう」

ちょこんと落ちた姫さまの肩を、ほんとはね、それでも抱きしめてさしあげたいの。

でも、だめ。

ともすれば、そちらへ伸びていってしまいそうになる手を、私はぎゅっと握りしめ、こらえた。

「怖がらずに、お会いしてみたらいかですか？」

姫さまの、両手を取った。

その手だけを、抱きしめてさしあげた。

姫さまは、ちらりとこちらを向かれる。
その目を、すかさず微笑で包んでさしあげた。
姫さまのくちびるが、ちらりと動く。
――うん。
これなら大丈夫。姫さまは、きっとすぐに頷かれるわ。

☆

私の兄さまは、藤原家に、郎党のひとりとして仕えている。
一方、綾姫さまの侍女である私は、毎日を、御所で起き伏ししているから、兄妹とはいえ、ふだんは滅多に顔も合わせられずにいるの。
兄さま、今日は平泉館に出仕しているはず。
昨日、連絡を取ったら、
「羽衣が来るまで、用事を片づけながら待っているから、いつでもおいで」
そんな返事をくれたもの。
姫さまのお支度を手伝い、乳母どのの手にお渡ししたあと、後片づけもそこそこに、私は姫さまのお住まいを飛び出した。
兄さまに会うのは、もう何日ぶりになるかしら？　わからなくなっているくらいに久しぶり

だわ。

空は蒼。風は夏。時間はたっぷり。

髪の先から足の先までを、わくわくとはずませて、私は、猫間ケ淵に架けられた橋を渡ってゆく。

この猫間ケ淵をはさんで、伽羅御所の北側にあるのが、平泉館だ。

伽羅御所をお館さまの私的な場所とするなら、平泉館のほうは、公的な場所といったらいいかな？

つまり、奥州の政治の中心地なの。ここで、様々な決定がなされたり、いろいろな儀式が執り行われたりするわけ。

そこに、私の兄さまはいる。

☆

ところが私は、すぐにも駆け抜けてしまうはずだったその橋を、渡りきることが出来なかったのだ。

半分まで来たときのこと。

「羽衣――！」

と、背中に名前を呼ばれた。

その、声。
私は、まずは混乱した。
だって、あの声。
あれは、ここにいるはずのない——いてはいけない人のものなんだもの。
ゆっくりと振り返った。
まちがいなかった。思っていたとおりの人だった。
……どうしてなの？
どうして、こんなとこにいるのよ？　どうして——どうして九郎が!?
「おい羽衣、どこへ行くんだよ？」
九郎は、それまでは走っていたらしいのだけれど、私が彼を認めたのを見て取ると、のんびりのんびりの足取りになり、こちらへ向かってくる。
彼の足が橋のたもとへ届くよりも早く、私は、
「なんでこんなとこにいるのよ!?」
「〝なんで〟って？」
九郎は、あくまでも呑気なの。
「だってあなた、今日は綾姫さまとご対面の日のはずでしょう!?」
「ああ、そうだけどさ」

九郎の足は、止まらない。
のんびりのまま、とうとう私の隣に立った。
「だっておまえ、この縁談は壊れるようにしてくれって言ってただろ？　まあ、言われるまでもなく俺もその気、ないしさ。だから、抜け出してきた」
「抜け出して――って、じゃあ姫さまは、待ちぼうけをくってらっしゃるってわけ？」
「そういうことになっちゃったなあ。綾姫には悪いことをしたな」
と、心底、申し訳ないという目をするの。
九郎のこういうとこ、やさしいと思う。ちゃんと気づかってくれるとこ、やさしいと思う。
そうは思うけど、でもね。
だったら最初から、抜け出したりなんか、しないで欲しい。
「だって、綾姫さまのお立場はどうなるの？」
「うーん……」
「お婿さまに逃げられて、立場なくていらっしゃるわ、きっと」
「……だなあ」
「〝だなあ〟じゃないわよ。私、実は、最近ではこの縁談、悪い話じゃないんじゃないかと思いはじめてもいるのよ？」
これは、本当の話。

最近、なんとなく思うんだ。九郎って、姫さまにはとてもお似合いのお婿さまなんじゃないかな——って。

だって、九郎はいい人よ。明るくて、やさしくて、楽しくて——まあね、それが、ちょっと過ぎるところも、あるにはあるけどさ。

だから、九郎の奥方になれば、姫さまは絶対、幸せになれると思うの。

「私、九郎になら綾姫さまを任せられると思う。だから今日は、ちゃんと姫さまに会ってさしあげて欲しかったな」

と、それは、本音をさらりと落とした言葉だった。

ところが。

何気なく九郎の目を振り仰いだ。その瞬間。

胸の芯が、びくっとふるえた。

だって、九郎の目。私の視線をそのまま吸い込んでしまうのではないかと思えるほどに、深く、荒く、見開かれた九郎の目——。

なあに、これ？　どうして？

胸のふるえが、そのまま正体の知れない恐怖に変わり、つ……、と指先までを駆け抜けた。

知らず知らず、じりじりと退がっていった背が、橋の欄干に触れる。真夏の午後をたっぷりと吸い込んだ木の感触が、熱い。ぬるぬると熱い。

けれども九郎はやがて、肩でちいさな息をついた。
その息とともに、九郎の中で突然ふくれ上がった何かとても怖いものも、はらはらと足元に散ってゆくのが見えた。
だから彼は、静かに——いつもの彼には似合わないほどに静かに、
「それ、本気で言ってるの？」
本気よ。
と、答えたい。
でも声にならなかった。
まだ怖い。静かすぎて怖い。九郎が怖い。怖くて声が喉にはりついたまま、はがれない。
「俺、綾姫を妻にするつもりはないよ、ほんとにないよ。それをはっきり秀衡に言わなかったのは、確かに悪かったけど。ほんとに俺が悪かったけど。心からそう思うけど。綾姫には、あとでちゃんと謝ろうと思うけど」
一度、言葉を切った。
私を、真っすぐ見つめた。
「おまえのほうが、ひどくない？」
その目が、まばたきの瞬間を確かめられるほどにまで、近づいた。
「俺、おまえを好きだって何回、言った？　おまえのところへ何日、通った？」

閉じ込められた。
九郎は、橋の欄干の、私の右側に左手をついて、私の左側に右手をついて。
九郎の腕の中に、閉じ込められた。
「その俺に、よく言えるね？　俺になら綾姫を任せられる――なんて、よく言えるね？　――俺の言うこと、全部、遊びだと思ってた？　冗談だと思ってたの？」
「……私」
やっとの思いで息をひとつ飲み込み、
「わからなかった……」
はりついていた声を、ようよう喉からはがし、私は、
「ほんとに、わからなかった。あなた、いつも真っすぐで――真っすぐすぎちゃって、本気なのか遊びなのか冗談なのか、ほんとに私、わからなかった」
「なんで真っすぐだと嘘になるんだよ？　俺、出来ないもん。なんか駆け引きとか、そういうの、出来ないもん。俺が好きだって言ったら、好きだ。嫌いだって言ったら、嫌いだ。俺は嘘はつかん。嘘は嫌いだ」
「そう――かもしれないけれど……」
私は、今もやっぱり真っすぐすぎるほどに真っすぐな九郎の視線から逃れるために、目を伏せた。

「それでもおまえがわからないって言うのなら、はっきり言う。俺、おまえが好きだ。だから綾姫を妻にはしたくない。――それでもまだ言うの？　綾姫を娶れって言うの？」

頷くしかなかった。ほかに答えはなかった。

九郎は荒く息をつき、

「俺のこと、嫌いなんだ？」

そうじゃない。そうじゃないのよ。そうじゃなくて、実は――。

本当のことを言うと、理由があるの。九郎の気持ちを受け入れるわけにはいかない理由が。

それを、正直に告げようと思った。

でもそれよりも早く、九郎がくちびるを開き、

「俺が今、形だけでも綾姫の許嫁者ってことになっているから？　秀衡がそのつもりになってしまっているから？　綾姫に気兼ねして？　それとも秀衡に気兼ねして？」

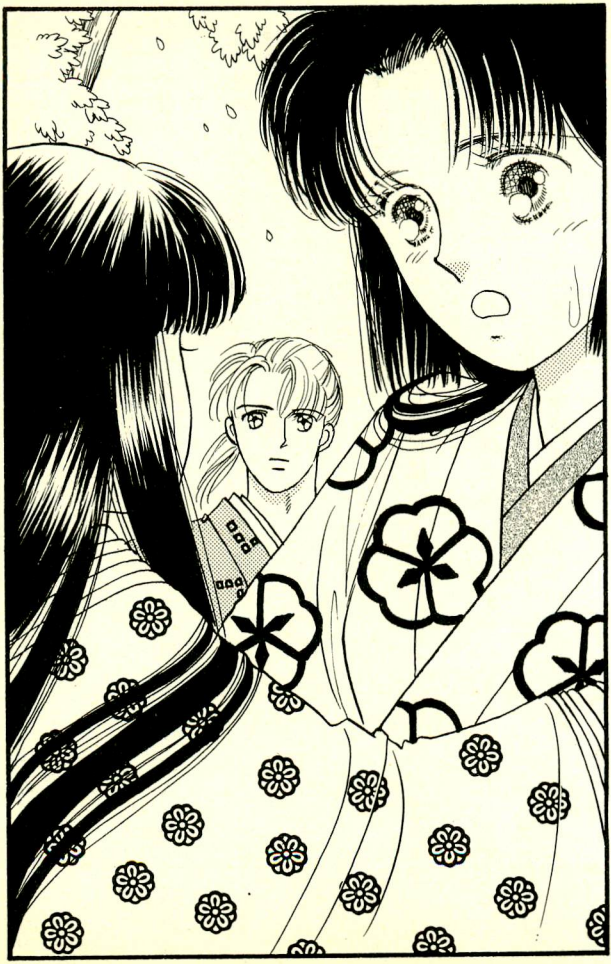
「ちが――」

「違うもんか。おまえ、なんか綾姫のこと大事にしすぎてる。自分のことよりも俺のことよりも、なんか大事にしすぎてる。今のままじゃあ綾姫から俺を横取りするみたいな形になってしまうのがつらい？　綾姫の立場に傷をつけることになってしまうのがつらい？　そのことを気にしてるの？　綾姫を気づかってるの？　そんなの、やめろよ。そんなの、なんとでもなるよ。そんなのに気持ちをつぶされるなんて、俺は嫌だ」

「そうじゃない！」
そうじゃないのよ。そうじゃなくて、私は。私には……。
涙、出てきた。
睫のあたりがじわじわと熱くなり、私は、それを人さし指で乱暴にぬぐった。
でも、ぬぐいきれなかった。
熱くて——しずくがはらはらとこぼれ落ちるほどに、熱くて熱くて……。
ひとしきり、泣いた。
九郎は、困った顔で私を見ていたんだけれど。
やがて、彼の右手が、そっと動いた。
——だめ。
そのあたたかさに触れたくない。触れるのが怖い。
お願い、私に触れないで——！
と、ぎゅっとまぶたを閉じたとき。
「羽衣——！」
私を呼ぶ、綾姫さまのお声が耳に届いた。

☆

「いい機会だ」
と、九郎は私の耳にささやいた。
綾姫さまが私たちのもとへ駆け寄ってくるまでの、ほんのわずかな時間に。
そのうえ、私を腕の中に閉じ込めたまま自由にしてくれないの。
「放して？」
「やだ」
「だだっ子」
「おまえだって泣いてたくせに」
「ばか言ってないで放してよ」
九郎の左手をはずそうとした。
するとその手は、思ったよりも簡単にはずれてしまった。
ちらりと見上げると、九郎はもう涼しい目をして、綾姫を迎えるための笑顔を作っている。
「羽衣、なにしてるのよ！」
やがて綾姫さまが走ってこられたのを、私は両手を広げて受け止めた。
甘酸っぱく、けれども深く淡く鼻孔に届く、少しだけおとなびた匂いが、ふわりと舞い上がって私の髪を揺らした。
綾姫さまの香り。私が、お衣装に薫きしめてさしあげた香り……。



なんとなく、心がなごんだ。はりつめていた気持ちが、じんわりと緩んでゆくのを感じた。
でも。
「羽衣のばか！」
腕の中の姫さまは、そんなふうに私をなじるの。
「羽衣のばか、嘘つき！　十四郎に会いに行くなんて言って、ほんとはこの人と会っていたなんて……！」
姫さまのちいさな指が、真っすぐ、九郎を示している。
嫌だわ、姫さま、誤解していらっしゃる。
「いえ、そうじゃなくて……」
と、訂正を入れようとしたんだけれど。
姫さまは聞き入れてくださらない。
「この人と会うことのほうが、わたくしの縁談より大事なの!?　そんなの、ひどい！」
「ですから姫さま、そうじゃなくて……」
「わたくし、待ちぼうけしてたのよ!?　九郎さま、いらっしゃらなくて。ずーっとずーっと待ってもいらっしゃらなくて。人を呼びにやったら、いないっていうの。どこかへ消えてしまったっていうの。わたくし、九郎さまに嫌われているのよ。きっとそうよ。九郎さまは、わたくしがお嫌いでどこかへ隠れておしまいになったんだわ。わたくし、悲しくて、寂しくて、羽衣

もいないしどうしようかと思って……！」
「それで、おひとりで出ていらっしゃったんですか？」
「うん」
「乳母どのやほかの侍女たちはどうしたんです？」
「知らない。わたくし、羽衣でなくちゃ嫌って言って、走ってきたの。平泉館のほうに行けば、羽衣、いるんじゃないかと思って。それなのに、こんなところで、こんな人と……」
姫さまの声が、滲んだ涙の中に消えてゆく。
私は、姫さまには覚られないよう静かに、ため息を吐いた。それから、九郎の目を探した。
――こんなご様子なのよ、姫さまは。どうしてくれるの？
軽く睨んでみせたのに、九郎は全然こたえていない顔で、にこっと笑い、
「おい、綾姫？」
私の腕の中でひくひくと泣き続けていらっしゃる姫さまを、呼んだ。
正体の知れない男から親しげに名を呼ばれた姫さまは、一瞬、怯えたように涙を飲み込まれた。そのあと、びっくり、肩をふるわせていらっしゃる。
「綾姫？」
と、九郎の声がもう一度、姫さまのお名前を綴った。
すると姫さまは、私の腕の中にいるので少しは気楽になっていらっしゃるのか、

「なあに？」
そろそろと、その目を九郎に向けられた。
「悪かったな」
「――？」
「今日はすっぽかしてしまって、悪かった」
「……どういうこと？　わたくし、おまえと何か約束などしたかしら？」
姫さまは、ぽけっと首をかしげていらっしゃるけれど。
九郎、言う気だ。自分の名前を、身分を、姫さまに明かしてしまうつもりだ。
私はあわてて、
「だめ、く――」
と、言いかけた。
でも、ばか！　九郎――と、私が呼んでしまったら終わりじゃないの！
くちびるを押さえ、その名前を飲み込んだのだけれど、結局、そのすきに。
九郎が、
「はじめまして、わたしは源九郎義経と申します」
やさしく、姫さまに微笑みかけてしまっている。
姫さまは、まじまじと九郎を見つめた。

「――く……？」
そのあと、私へ目を移し、
「く……九郎さま……？」
ぱちくりと、まばたきをひとつ、なさる。
……もう、仕方ない。
私は、ため息を滲ませつつ頷いた。
「実は、そうだったんです」
「じゃあ――、おまえの恋人は九郎さまだったの!?」
「いえ、そうじゃないんです。それは――」
違うんです、と言いかけた私の言葉を横取りして、九郎は、
「そういうことだったんだよ。でも秀衡は話をどんどん進めてしまうし、だから羽衣が悩んじゃって、俺もどうしたらいいのかわからなくなっちゃって」
「……まあ！」
姫さまの瞳いっぱいに、ゆらりと涙が広がった。
……やめてよ、もう。どうしてこんな嘘、つくのよ。
姫さまは、ほんとにほんとにほんとにおやさしい方だから、こんな話を聞いてしまったら、
「まあ羽衣、そういうことだったの！　だからおまえ、この縁談がきたとき、まずは壊したい

って言ったのね。でもそのあと、ずっと悩んでいたんでしょう？　だから今朝は、わたくしに九郎さまを勧めるようなことを言い出して……。でも、大丈夫よ。わたくしに任せておいてちょうだい。お父さまはね、わたくしの言うことならなんでも聞き入れてくださるから、大丈夫」

なんて、言い出しちゃうじゃないの。

私は、半泣きの気持ちで九郎に助けを求めた。

でも、九郎は知らんぷり。姫さまを誤解させたままで、知らんぷりの顔なのよ。

どういうつもり？

姫さまの誤解を利用して、私を〝九郎の公認の恋人〟に仕立て上げるつもりなの？　そうしておいて、私の気持ちは、あとでからめ捕ってしまおう――って？

そんなの、困る。

「あのね。姫さま？」

腕の中の姫さまに、私はそっと呼びかけた。

姫さまは、はらはらと頬を落ちる涙を、指の腹で押さえていらっしゃる。

「あのね、違うんです。実は……」

言いかけると横から九郎が、

「羽衣は黙っていなさい。おまえが何を言っても、どうにせよ綾姫は、真実をきちんと――」

勝手なことを言いはじめたのを、私は、
「いいえ、言わせて欲しいんです」
すっぱりと、はねのけた。
九郎は一瞬、怒りを飲み込んだようだけれど、結局、黙った。
私はまず、綾姫さまに、
「この人が源九郎義経本人なんだってこと、ずっと黙ったままでいて、本当に申し訳ありませんでした。九郎は、姫さまの許嫁者に――と、お館さまがおっしゃっておられる方なんですもの、どうやってお話していいものやら悩むうち、時間がどんどん過ぎてしまって……」
「いいのよ、羽衣。わたくしは何も気にしていないわ」
「ありがとうございます」
「それにね、わたくし、本当にお父さまに――」
「いえ、それはけっこうです。私と九郎は、なんでもないんです。そんなわけはないんです。だって、私には――」
顔を上げて、九郎を見た。真っすぐに見た。
すっきりと視線が合った。
彼が、微笑をくれる。やさしく、愛しく、せつなく――その瞳に心からの気持ちを込めて、淡く滲むほどの微笑をくれる。

でも私、言おうと思う、本当のことを。
ごめんね、九郎。ごめんなさい。
泣くように痛む心を、私は悲しく抑えて、
「だって私には、ずっと昔からの許嫁者がいるんですもの」

三

夜半から、雨になった。
もう寝ようかと思っていたのだけれど、単調に続く雨音が、妙に耳に馴染んで離れないので、つい気になって、蔀戸を押し上げてみた。
屋内からのわずかな灯りに反射して、雨の透明が、銀いろに光るものに姿を染め変え、降り注ぐその様は。
——なんだか、闇の中を落ちてゆく、迷子の涙みたい……。
ぼんやりと、そんなふうに思ったとき。
背中から、
「羽衣——？」
と、名前を呼ばれた。

振り向くと、十四郎兄さまの影がすぐそばに落ちている。
「風邪ひくよ。蔀は下ろしておきなさい」
「ええ――、でも、雨がとってもきれいなの。兄さまもいらっしゃらない？」
兄さまは、わずかに首をかしげ、どうしようかという顔になる。
でも、すぐにくちびるが微笑に溶けた。
「どれ、どんな雨だ？」
ふたり、並んで、真夏の夜の雨を見た。

☆

十四郎兄さまは、私より九つ年上の二十五歳。
私の両親が亡くなったのは、私が二歳のときというから、たった十一歳の少年だったころから、兄さまはひとりきりで、私を育ててくれたことになる。
それから、私が綾姫さまのもとへ上がることになったのは、八つだったか九つだったか――まだ、ほんのこどもだったころ。
御所へ上がりはしたものの、兄さまが恋しくて恋しくて、よく泣いては、黙って逃げ帰ってきたりもしたっけ。
今夜は、ちゃんと姫さまにお許しをいただいて、久しぶりに宿下がりをした。

なんだか寂しくて、御所のひとりの部屋では、夜の粒子をひとつひとつ数えては眠れなくなってしまいそうな気がして……。
兄さまに、会いたかったの。

☆

「冷えてきたね」
言うなり兄さまは、蔀戸をゆっくりと下ろした。
「もう終わり？」
「うん、終わり」
「雨、静かできれいだったのに」
「でももう寝んだほうがいい。明日の朝は、なるべく早くに御所へ戻るつもりなんだろう？」
「……そうだけど」
「おやすみ」
と、兄さまは微笑んだ。
私の髪に、そっと触れて。でも、その手をそのまま、するりと離して。
「昔みたいに、一緒に寝んではくださらないの？」
ちょっと甘えて、言ってみた。

兄さまは、さっきとよく似た角度に首をかたむけ、やっぱり、困った顔になる。
それを見たら、もっと甘えてみたくなった。
「すこしだけでいいの。お膝を貸して？」
眠り込んでしまえるまで、お膝を貸して欲しいの。
今日は、ちょっと寂しいから。
このまま雨音の中に置き去りにされてしまったら、朝まで眠れず過ごさなければならなくなってしまうような気がするから。
だから、昔みたいに、兄さまのお膝の中で眠りたいの。
妹だからこその甘えを、たっぷりと含ませた目で、兄さまを見つめた。
兄さまは、
「しょうがないなあ」
と、その膝に、私のための場所を空けてくれた。
ころん、と甘えて目を閉じる。
ほ――、とした。
十六の歳が全部消えて、私はちいさなこどもに還った。
「兄さま、あのね？」

「なに？」
「兄さまは、源九郎義経どのに会ったこと、ある？」
「さあ――、ないよ。お顔をお見かけしたことも、ない」
「ふうん――」
「九郎どのが、どうした？」
「私のこと、好きだって言うの」
「え――？」
「私のこと、好きだって言ってくれたのよ、九郎どのが」
「ふうん――？　でも、九郎どのは、お館さまが綾姫さまの婿ぎみに――と考えておいでなのではなかったか？」
「そうなの。でも、九郎は私のほうがいいって言うの。そんなふうに言ってくれたの」
「……ふうん？」
「いい人よ、あの人。真っすぐでね、素直でね、はっきりしててね、好きなものは好き、嫌いなものは嫌い、欲しいものは欲しい、いらないものはいらない――でも、ちょっと寂しそうなときがあるの」
「どんなとき？」
「平家のこと、話すとき」

「……平家のこと」
「平家のこと、嫌いだって言うの。でもね、そう言いながら、とても寂しそうな目をするの。お母さまのこと、思い出すのかしら？　それとも、お父さまのこと、思い浮かべるのかしら？　日暮れどきに迷子になっちゃったこどもみたいな目をするの」
「源九郎義経……。源義朝の末の子だね」
「ええそうね。末っ子だから、甘えんぼなのかな？」
「羽衣も好き？」
「――？」
「羽衣を好きって言ってくれた九郎のこと、羽衣も好きなの？」
「――――」
「どうなの？」
「――私」
「〝私〟？　なに？」
「でも、私は兄さまの妻になるのでしょう？」

降り続く雨。
すこしの乱れもなく降り注ぐ雨音。

兄さまの呼吸も、乱れなかった。やさしく私の髪を撫で、
「もうおやすみ」
呪文のような言葉をくれた。
とろりとまぶたが閉じてゆく。
眠りの中へ。
夢が沁み入る隙間もないほどの、眠りの中へ——

四

満開の太陽の下——。
綾姫さまを探して歩いた。
姫さま、朝から行方不明なの。
今日は、乳母どのが姫さまに物語を読んでさしあげることになっていて、でも、ふと気づいてみると、姫さまのお姿がないのよ。
御所中を捜しても、見つからない。
ところが、それを聞いた廊の者が、まず、
「ちょっと目を離した隙に、栗毛が一頭、消えてしまっているんですが……」

それを受けて、御門を守る衛士が、
「ああ、その栗毛なら、九郎さまが引いて通ってゆかれましたよ、背に姫さまをお乗せして」
九郎と姫さま――？
思ってもみなかった組み合わせだ。
けれども、実は前々からふたりの縁組みが気に入っていたらしい乳母どのは、
「まあ……、おふたりは、いつの間にそんなに仲よくなられたのでしょう？　まあまあ――！」
なんて、まぶたのお肉を揺らしながら、嬉しそうに笑われたあと、
「ですが、ちょっと感心いたしませんね。やんごとなき姫ぎみが、大切なお勉強を放り出して遊びに行かれるとは」
きゅっと眉を締めていらっしゃる。
そうなの。物語を聞くというのも、実は教養のためのお勉強のひとつなの。
物語の登場人物たちの生活の様子には、たとえば優美な振る舞いについてとか、お衣装の色目のこととか、男女の交際のしかたについてとか、いろいろと学べることが書かれているわけ。
なにしろ姫さまは、ご結婚を控えた身でいらっしゃる。となるとまあ、いろいろと伝授しておかなければならない事があるわけなのよ。

乳母どのは、ここのところずっと、姫さまを何ひとつ欠けたところのない完璧な花嫁に仕立て上げようと、はりきっていらっしゃるから。

「お遊びは、お勉強が予定どおり終わってから――と、羽衣、おまえ、姫さまを捜し出して、お諫めして、連れ戻してきてちょうだい」

姫さまは、おまえの言うことならとにかく、一も二もなく聞き入れられますからねえ――と笑った乳母どのの声には、ほんのわずか、皮肉げな揺れがある。

あの人、私のこと、姫さまを操るための便利な道具みたいに思っているんだから。

でも、馬で出かけたのならば、私の足などでは追いつけないところまで行ってしまっているかもしれない。九郎は前に、北上川沿いを行けるところまで走ってみたい――なんて言っていたことだし。遠駆けに、姫さまをお誘いしたのかもしれない。

それでも私、行かなきゃいけないのかしら？

ちょっと腹が立ったけれど、姫さまの側近の中では一の権力を握る乳母どのに逆らうわけにもいかず、仕方なく、私は御所を出て来たのだ。

☆

とはいえ、あまり真面目に捜し歩くつもりはなかった。

御所近くにある庭園のいろいろをちょっとのぞいて、あとは北上川の流れがちょっと見える

くらいのところまで行ってみて——それで帰ろう。乳母どのには、一生懸命、捜したけれどお姿が見えなかった——そう報告しよう。

だって、馬で出かた人たちを徒歩で捜すなんて、無茶な話だわ。

何より、九郎と一緒なら、姫さまに危ないことなどひとつもないだろうと思うし。

だから私は、散歩の足どりで、あちらこちらをめぐり歩いた。

それから、最後に。

北上川の川べりの、九郎と初めて会った木のあたりまで行ってみたところ——。

☆

いるんだもの、あのふたり、

九郎は、いつものてろりとした様子で木の幹に背をもたれて。

綾姫さまは、こんな自然の中ででも、姫ぎみらしくすっきりと背筋を伸ばし、お座りになって。

話しているのは、どうやら私のことのようだった。

「羽衣の許嫁者っていうのは、いったい、誰なんだよ？」

「わたくしも知らないわ。初めて聞いたお話だわ」

「だって姫は、こどものころから羽衣をそばに置いているんだろ？　なんで知らないんだよ？」
「知らないものは知らないのよ。わたくしも、ちょっと腹がたっているところです。羽衣ったら、わたくしに内緒で、男の方なんかと――。どこで知り合ったのかしら？」
「昔からの許嫁者――って言ってたぞ？」
「昔からの――？　昔から変わらず羽衣のそばにいる男の方っていえば、わたくし、十四郎しか知らないわ」
「なんだ、その十四郎ってのは？　そいつが羽衣の許嫁者なんじゃないのか？」
「それはあり得ないわ。十四郎は羽衣の兄ですから」
「へえ？　羽衣には兄がいたのか？」
「あら、九郎さま、そんなこともご存知ないの？」
「……悪かったな。俺は、まだ羽衣とは知り合ったばかりだからな」
「知り合ったばかりで、羽衣のことなんにも知らなくて、でも羽衣のこと好きなの？　すごくすごく好きなの？」
「――変かな？」
「いいえ、そんなふうには思わないわ。わたくし、わかるもの、そういう気持ち」
「姫にもそういう男がいるのか？」

「男の方なんかじゃありません」
「じゃ、なんなんだ？」
「羽衣」
「――羽衣？」
「そうよ。わたくし、羽衣のことは初めて会ったときから大好きなの。わたくしが七つか八つだったころだと思うけれど、お父さまが羽衣を、姫の話し相手だよ――って言って、連れてきてくださって。その瞬間から、わたくしは羽衣のことが大好きなの。羽衣がいれば、どんなところでも、どんなことでも、楽しいの。大事なひとなの」
「ふーん？　一目惚れか？」
「そうね。一目惚れね。理由なんかなんにもなくて、ただただ、羽衣のこと大好きなのよ、わたくし。九郎さまも、おんなじようなお気持ちなんじゃありませんか？」
「……そうだなあ。俺も、なんで羽衣のこと好きかって訊かれても、困るな、やっぱり。理由なんかないな、やっぱり。ただ――なんか、好きだ。ここで初めて会ったとき、意味もなく、こいつだ――って思った。羽衣が姫のいいところを俺に見せようと頑張ってたときも、姫には悪いんだけど俺、羽衣のことばっか気になっちゃって、羽衣のほうばっか見ちゃって……。それで、やっぱりこいつだ、やっと会えた――って」
「……やっと会えた？」

「変だろ？　なんか、前から知っていた人に、捜していた人に、やっと会えたような気がしたんだ」

「不思議ね。九郎さまと羽衣は、めぐりあうことが運命だったのかしら？」

「……運命――か」

――私もおんなじ。

大好きよ、姫さま。

初めてお会いしたときから、その瞬間から、姫さまのこと、大好き。

実は幼いころ、私は、姫さまに仕えるみんなから、苛められてばかりいたの。

私は、ちょっと変わったかたちで姫さまのもとへ上がったから。

あのとき、私はまだまだこどもだったけど、女童としてではなく、姫さまのお話し相手として――つまり、他の侍女たちとはちょっと違った特別な待遇で。

私は、みなしごなのに。有力な家の出でもないのに。それなのに、なぜ？

今の私にも解けないその謎は、当然、まわりの反感を買った。

嫉妬と蔑みの入り交じった目で苛められ、泣いてばかりいた幼いころの私――。

何度も兄さまのところへ逃げ帰ったのは、兄さまが恋しかったからばかりではないのよ。

御所にいても誰もやさしくしてくれないから。意地悪ばかりするから。でも、どうしてそん

なことされなきゃならないのかわからなくて、つらくて、悲しくて……。
　そんなとき、姫さまが私に手をさし延べてくださったの。
「羽衣、みんなが羽衣を苛めてること、わたくし、知ってるわ。でも、わかんない。どうしてみんな、羽衣のこと苛めるのかしら？　羽衣は、こんなに可愛いのに。こんなにやさしい目をしているのに。わたくし、わかんないわ。でも、みんなは苛めるのねえ。おまえ、つらいわねえ。――そうだわ、おまえ、いつもわたくしのそばにいらっしゃい？　片時も離れちゃだめよ？　そうすればみんなもおまえを苛めることが出来ないわ。苛める時間が出来ないわ。――ね？　わたくしって、なんて頭がいいのかしら」
　そんな言葉をくださったの。
　あのとき、私は姫さまのためになら何でもしようと思った。なんでも出来ると思った。あのときから、ずっと……。
　大好きな、姫さま。
　私もおんなじ。
　九郎のこともね。
　私も、九郎に初めて会ったとき、おんなじ想いが胸に滲んだのよ。
　会えちゃった――って。このひとだ――って。
　これは、運命？

どういう運命？
恋に落ちる運命？
なにもかも捨て去れるほどの、なにもなくても恐ろしいほど満ち足りた想いに包まれるほどの、一生に一度、めぐり逢えるか逢えないかというほどの——。
運命の恋？
わからない。私には、わからない。
だって私、九郎に恋してはいけないと思ってきたんだもの。
私には、許嫁者がいる。私の恋はもう決まっている。てのひらの中にある。求めなくても、もうすでに——。
だから、わからないの。
私は、あなたに恋をしないの。
わかりたくないの……。

〝大好き〟を、ありがとう。
ふたりがくれた〝大好き〟を、私は一生、忘れない。
私も、おんなじくらい好きよ。ふたりのこと、大好きよ。
だから。

私は今、何をすべきなんだろう？
ふたりからの〝大好き〟に応えるために。
今、私は――。

五

「なあ、おまえの許嫁者って、いったい、誰なんだよ？」
地にぺったりと座り込んだ九郎は、額から頬へ、つるりとひとすじ、汗をしたたらせた顔で、私を見上げる。
私は、洗濯をしていた。
井戸から杓で水を汲み上げつつの、足踏み洗濯だ。
水の飛沫が飛んで冷たいでしょうに、九郎は、
「暑いから、ちょうどいい」
にこにこ笑っている。
けっこう、呑気だ。相変わらずの様子だ。
実は許嫁者がいる――そのことを告白したあとなのに、九郎は、以前と少しも変わらない親しげな顔をして、御所の中を忙しく動き回っていた私を捜し出し、おしゃべりを仕掛けてき

た。

許嫁者がいると知れば、あなた、すこし遠のくかと思っていたわ、私。

どうして？

「そんなの聞いたところで、俺の気持ちがいきなり変わるわけじゃないだろ？　好きなものは、好き。今も前も変わりない。それに、許嫁者がいるいるって聞いたって、そいつが誰だかわからないうちは、なんか実感、わかなくてさ」

そういうものかな？

なんか、わかるような気はするけれど。

「なあ、おまえの許嫁者って、だから誰なんだよ？」

話は結局、そこのところへ戻ってゆく。

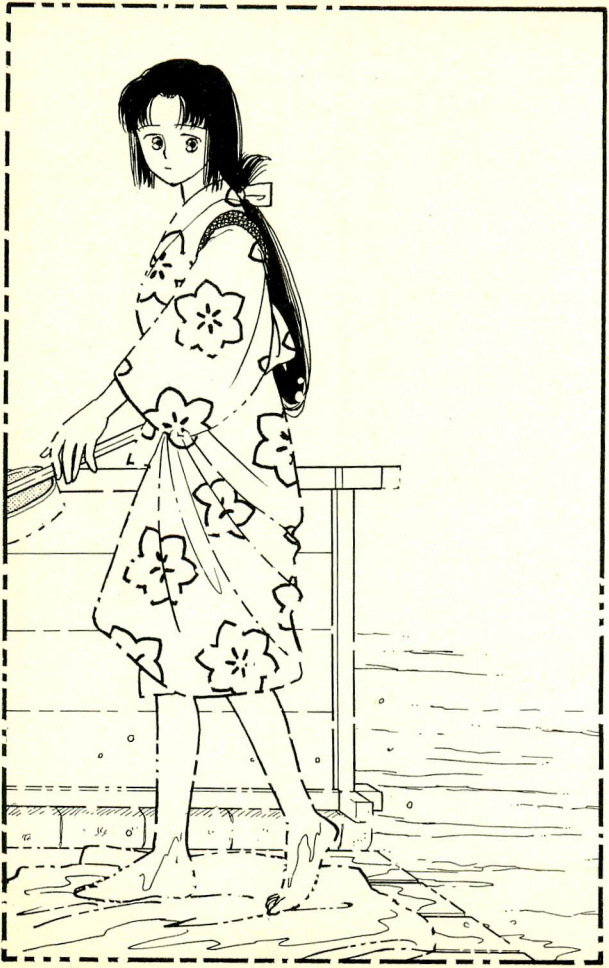
私、隠すつもりはないのよ。それどころか、なるべく早く、九郎に話さなくちゃと思っているくらいで。

でも、九郎のこの様子をみると、ただ名前を告げるだけじゃなく、会ってもらったほうがいいような気がする。

とすると、ちゃんと機会を作りたいと思うし……。

洗濯物をぐんぐん踏みながら、考えた。

ところが、考え込んでいるうちに、くちびるがぴったり閉まってしまったようで、気がつく



と、なんだか九郎を無視していたような具合になっている。
まずかったかな？
衣類の上を踏みまわる足を止め、九郎の目を探した。
案の定、九郎は、頬を落ちる汗のしずくを、実に不機嫌そうな荒々しさで拭ってみせる。
やっぱり、まずかったみたい。
「あのう……」
なにか話さなくちゃ、と、私は、とりあえずくちびるに声を滲ませてみた。
すると九郎は、私の声を無視したかたちで、でも怒ってしまっているわけでもないような様子で、
「おまえ、自分で洗濯なんてしちゃうの？」
まるで関係のない話だ。私は一瞬、戸惑いつつも、
「するわ」
こっくりと頷いた。
「そんなの、誰かにやらせればいいのに」
「やってくれる人がいないわ」
「おまえ、使ってるやつ、いないの？」
「うん」

私は使用人を持っていない。
兄さまと住む家に下働きの者をふたり置いてはいるけれど、あの者たちには兄さまのお世話を頼んでいるから、御所づとめをしている私は、自分の世話は自分で始末をつける生活を、もう長いこと続けてきている。
「使用人のひとりも持たずに御所につとめてる女房なんて、ひとりもいないんじゃないか？」
「そうねえ」
私ひとりだわ。
そこのあたりがまた、私を蔑みたがる人たちの急所を、くすぐってたまらないらしいから、本当はなんとかしたほうがいいのかもしれないんだけれどね。
（今はもう、綾姫さまの第一の信頼を得ている私だから、苛める人も陰口をきく人もほとんどいなくなってしまってはいるんだけれど、それでもいるの、時々。あの乳母どののようなばあさま連中なんかがね、ちくりと厭味を言ってきたりなんかしてね）
「だったら、綾姫に頼んでひとりでもふたりでも三人でも、つけてもらえばいいじゃないか」
そうねえ、そう思うときもあるけれど。
「意地、かな？」
「意地――？」
「うん。みんなにバカにされつつも、ここまでひとりでやってきたんだから、なんか、やり抜

いてみたいな――って」

それに、自分はもともと、人をたくさん使えるような身分じゃないってことは、ちゃんと自覚しておかなきゃとも思うし。

「ふうん……」

「こういう女の子、可愛くないかな？　わんわん泣いて姫さまにおすがりしちゃう子のほうが、可愛いのかしら？　女の子って、そのほうがいいのかしら？」

ふと、呟きがこぼれ落ちた。

これは、時々、思うこと。

私、みなしごだから、自分のことはとにかく自分でやらなくちゃという気持ちで生きてきたし、甘えられる相手は兄さましかいなかったし、もしかしたら、女の子としてはあんまり可愛い性格じゃなくなっちゃっているんじゃないかな――って。

ところが、

「いや、俺は羽衣みたいなののほうが好きだけどな。いっしょうけんめで真っすぐで、だけどおまえ、抜けてるぞ、時々。そういうとこ、俺は可愛いと思うけどな」

九郎は、さらりと言ってくれた。

まだ、くれる。〝好き〟をくれる……。

胸の奥が、しみるように痛んだ。

私は、九郎のまなざしから少しずつずらしていった視線を、ふたたび、洗濯物の上に落とした。逃げた。

それでも、頬が痛い。九郎のまなざしが熱くて痛い……。

「俺、やっぱり――」

九郎が、何かを言いかけた。

けれどもその声は、中途半端に切れてしまった。

「火事よ――！」

と、乱れた女の声が、すぐ近くで上がったからだ。

☆

「羽衣は、ここにいろ！　危ないから！」

そう言い置いて、九郎は、煙の上がる方角を確かめ、走って行ってしまったんだけれど。

私も、こんなところでぼんやりなんか、してられないわ。

とりあえず、桶に水をいっぱいに張り、それを抱えて彼のあとを追った。

火元は、どうやら倉庫らしい。

私が行き着いたころにはもう、そのあたりには人垣が出来上がってしまっていた。

桶いっぱいの水を抱えたまま、人の垣根をかき分けかき分け、前へ出た。

けれども、そうして見てみると、火事といっても、火はくすぶる程度のもののようなのだ。
まずは、ひと安心。
それから九郎を探してみると、彼は、みんなと一緒になって火消しの作業に加わっていた。
私の姿など目に入っていない様子だったけれど、
「九郎――！」
呼びかけると、ちゃんと声を聞き分けてくれた。
「おまえ、なんでこんなとこにいるんだよ!?　来るなって言ったろ!?」
「水、持ってきたの！」
水桶を示してみせると、
「じゃあこれ置いて、早く戻れ！」
手を出して、受け取ってくれた。
あとは九郎の言うことを聞いて、おとなしく人垣から外へ出た。
すると。
十四郎兄さまの姿があるのだ。
「兄さま、どうしたの!?」
「いや、火事だというから……」
どうも、みんなが仕事を放り出してきてしまったらしい。

「たいしたことはないみたいよ？」
「らしいな。大きな火の手があがっているらしい様子はなかったから、大丈夫だろうとは思っていたが」
それでも駆けつけてみたものの、手は足りているようだったので、兄さまはとりあえず、ここで様子を見ていたのだという。
やがて――。
焦げた臭いを残して火は消えた。
ところがその臭いが、鼻の奥を燻すように入り込んできては、喉にまで抜けて染みるのだ。
「なんだか気持ちが悪い」
兄さまが隣にいるものだから、ついつい甘えが出た。
「ここを離れて休んだほうがいいんじゃないか？」
「うん」
と、頷きながら。
いつもの調子で甘えて、兄さまの腕に手をからませた、そのとき。
「羽衣！」
私を呼んだのは、九郎の声だった。
私は、呼ばれるままに振り向いた。

九郎の視線が、真っすぐに届いた。
私を、私の手を、私の手がからみついた兄さまの腕を、そして兄さまを——九郎は、彼が一番、彼らしく見えるときのあの、過ぎるほどに真っすぐな目で、見つめた。
「……羽衣？」
あれは誰だ？
兄さまの目が、私に訊ねる。
いい機会だ——と、私は思った。
だから。
胸の鼓動を抑えて、それから、九郎に負けないくらい真っすぐ流れてゆくように視線を支えて、
「あの人が、源九郎義経さまよ」
私は兄さまに答えた。
「……ああ、この人が」
兄さまは大きく頷き、九郎を見つめ返した。
「九郎」
私が呼ぶと、九郎はすらりとまなざしを動かし、
「なに？」

はっきりと答えてくれる。
私と一緒にいるこの人が誰なのか、たぶん、彼は予想をつけているだろう。そして、私のくちびるが、彼の思っているとおりの言葉でこの人を紹介する瞬間を、緊張を隠しもせずに待っている。
私は応えて、まずは、
「この人、私の兄なの」
「兄さん……？」
と、九郎の瞳から、するりと緊張が抜けた。
なんだ、これは噂の兄ざんなのか——そのまま気持ちを緩ませ、安心したらしい様子が見えた。
——でも。
私はそこへ、さらに言うの。言わなければいけないの。
「この人、私の兄でね、そうして——私の許嫁者でもある人なのよ」
——と。
緩んだばかりの九郎の頬が、また、ぴくっと跳ねた。
「兄で……許嫁者？」
「そうなの」

「だってどうして……兄妹なのに」
「ほんとの兄妹じゃないの。血はつながっていないの。私、二歳のときに火事で両親を亡くしていてね、本当なら、私もそのとき死んでしまっていて当然くらいの火事だったらしいんだけど、兄さまが助けてくれたの。それからずっと、一緒にいるの。だから私、今日まで生きてこられたの」
「――ずっと一緒に生きてきた兄さんが許嫁者」
ぽつりと呟いたあと、九郎は何も言わなくなった。
それでも私たちは、数秒を見つめ合ったままでいた。
痛かったけれど、我慢した。九郎のまなざしを受ける、瞳も、くちびるも、胸も、心も、みんな痛かったけれど、我慢した。
やがて九郎は、無言のまま、くるりと後ろ姿になった。
そして、行ってしまった……。
見送る背中が消えたころ、兄さまが言った。
「あれで、いいの？」
……いいの。
胸が痛いけど。

瞳が痛いけど。
心が痛いけど。
くちびるが痛いけど。
痛がって泣くけれど。
いいの。
これは、恋じゃないから。

六

兄さまは、私の本当の兄さまじゃない——。
そのことを知ったのは、十四歳の秋だった。
兄さまが、ぽつりと言ったのだ。
「もう、おまえを妹として見るのが重くなってきたな」
はじめは、意味がわからなかった。
兄さまに嫌われたのかと思った。なにか私が悪いことをして、あきれられてしまったのかしら——と。
でも、とんちんかんに謝りはじめた私を、何も言わずに抱きしめてくれた腕の強さで、なに

もかもがわかった。

本当のこと、言うとね。

なんとなく、変だな——って思う瞬間は、それまでにも幾つかあったの。

兄さまの視線が、いつからだったのか、くすぐったいほどに甘いやさしさを含みはじめていたことに、気づいたとき。

そのくせ、私が兄さまの膝や腕に甘えようとすると、一瞬の戸惑いを見せるようになったのを感じたとき。

なんだろう、なんだろう？　と、私、胸をふるわせていた。

時々、甘くて。時々、怖くて。不思議な気持ちを胸の中で持て余しながら。兄さまが何かを言い出すのを待っていた。

だから、すぐにわかったの。兄さまの心が、想いが、そして、その深さが——。

「このまま、ふたりで生きてゆこう。俺たちは、十二年前のあの日、この世にふたりきりになってしまったんだから。この先も、ずっと同じ気持ちで歩いてゆこう」

その言葉をもらいながら、兄さまの腕の中で、どきどきしていた。

私はただ、どきどきと今まで知らなかった音で鳴り続ける自分の胸に、びっくりしていた。

これは、恋？　恋を告げる音？

兄さまを男の人として意識したことなんて、もちろん一度もなかったけれど。

でも、私が甘えられる人は、兄さまだけ。兄さまとふたり、一生、ふたりきりで生きてゆけたなら、それは私の至上の幸せ。昔から、そう思っていた。

「羽衣――？」

私の名を滲ませる兄さまの声が、ゆっくりと髪に染みた。

それだけの夜だった。

でも、私はひどく幸福だった。

だから、これは恋だと思った。

それでも、

「すこし、時間が欲しいの」

と、すぐに頷けなかったのは、なぜだったのか。

兄さまは、

「いいよ、急ぐことはない。時間をかけて、羽衣の中から〝兄の十四郎〟を消していってくれれば、それでいい」

あのときのその言葉のまま、今も待ってくれているのだけれど。

☆

九郎と綾姫さまとの婚約が、正式に披露されたのは、それからすぐのことだった。

ふたりが、みずからお館さまに願い出たのだという。
いつの間にそういうことに――？
みんなが驚いた。
私も、もちろんびっくりした。
「おめでとうございます」
早速、お祝いを申し上げると、
「どうもありがとう、羽衣」
姫さまは、いつものようにおっとりと微笑み、答えてくださる。
でも。
その微笑が消えたあとの目に、私は一瞬、首をかしげた。
見慣れない大人の色が、そこには滲んでいたのだ。
結婚を控えた身ともなると、やっぱり女の子は変わってくるものなのかしら？　あの色、姫さまは、九郎から教えてもらったのかしら？
そんなことを思いながら、ぼんやりと視線を泳がせてしまったのだけれど。
「さあさあ、これから忙しくなりますよ！」
耳元で乳母どのの声が爆発したので、我に返った。
そうか、これから忙しくなるのか。

姫さまが九郎に嫁ぐための準備を、私は整えてゆくんだわ。
よっこらしょ、と気合いを入れながら立ち上がった。そうしないと立ち上がれなかった。
からだから、妙な具合に魂が抜け落ちてしまっている。

☆

「羽衣、毛越寺のお庭に、お散歩に行きましょう。そろそろ菊が咲き始めて、それはそれはキレイだそうよ」
姫さまがおっしゃるので、私は早速、ぴくんと飛び出た乳母どのの角を、とにかくなだめて引っ込めさせなきゃならなかった。
ここのところ、姫さまは、妙によく外へ出かけられる。
こんなの今までなかったことよ。
特別なご用事のときにものものしい行列を仕立てて御門を出てゆかれるほかは、御所の内に引きこもられたまま、ご自分から外出を思い立たれるような方ではなかったんだもの。
「九郎さまの影響かしら？　九郎さまが、いろいろお外へ連れ出してくださるから、なんだかそれがクセになってしまったみたいよ」
毛越寺の菊が色をつけはじめたことを教えてくれたのも、九郎だという。
だったら、九郎と一緒に見にゆかれたらよろしいのに。

私が言うと、
「だめよ。今日はね、わたくしは羽衣と一緒に行きたいの。そういう気分なの」
やわらかな手が、私の腕にからみついてくる。
そのあたたかさは、やっぱり私の幸せ。
だから、苦手の乳母どのも一生懸命、説得してしまったし、
「うわあ、キレイねえ。来てよかったわ、ほんとに」
と、姫さまが、純白にほんのりと黄が滲んだ菊をたいそう気に入られ、はしゃいでいらっしゃるご様子を見ると、たまらなく嬉しくなる。
やがて姫さまは、そっと菊に手を触れながら、
「そろそろ秋ねえ」
高くなりはじめた空を仰がれた。
私も、おなじ思いを胸に滲ませながら、
「そうですねえ」
「夏の盛りのころだったわね、お父さまが、九郎さまをわたくしのお婿さまに——って言い出されたのは」
「……そうでしたか」
「そうよ。わたくし、悲しくて泣き出してしまって。そうしたら羽衣が、この縁談、絶対に壊

してくれるって言ってくれて。——あれから、幾らも経っていないのにね。変わってしまったわね、いろいろと。わたくしは九郎さまの妻になるし、きっと羽衣も、もうじき結婚するのでしょうし」

「……そうですね」

知らず知らず、視線が落ちた。

気がつくと視界いっぱいに、自分の足元に落ちた影があった。

けれどもすぐ、

「羽衣——？」

姫さまのお声が呼ぶままに、私は顔を上げる。

姫さまは、ふわりと微笑まれ、

「おまえ、いつから十四郎と婚約などしていたの？」

「あ——、申し訳ございません、姫さまに無断で」

「いいのよ、そのことは。ちょっとびっくりは、したけれどね」

「本当に申し訳ございません。お館さまには願い出てあったのですが」

でもお館さまが、

《昨日まで兄妹であったものがいきなり許嫁者同士ということになっては、なにごとかうるさく勘繰る者も出てこよう。しばらくは兄妹のままでいなさい。頃合いをみて、わたしがなんと

かしてやろう》

そうおっしゃったものだから、とにかく秘密にしていたの。

「ふうん……？　それで、わたくしも仲間はずれ？　わたくしにくらいは、本当のことを話してくれてもよかったんじゃない？」

「それは……そうでしたけれど」

なぜかな？

姫さまにも、なんとなく、お話しする気持ちになれなかったの。

本当に結婚することになったら、時期が決まったら——って、ついつい、ずるずると……。

そのことも、正直にお話しすると、

「どうしてかしらね？」

姫さまは、すこしだけ背のびして、私の目を真っすぐにのぞき込まれた。

夏が消えたあとの空いろみたいに、すっきりと澄んだまなざし——。

私がなにも答えられずにいると、姫さまのくちびるに、くすくす……っと笑い声が滲む。

そして、その笑いの中から、

「ねえ、羽衣、いつから？」

「——？」

「いつ、羽衣は十四郎の許嫁者になったの？」

「ああ――、十四のころでしたけれど。でも、その前からずっと、兄さまと私はふたりきりで一生を過ごしてゆくような、そんな気持ちがしていましたから」
「十四郎が、兄からいきなり許嫁者に変わってしまって、びっくりしなかったの？」
「しなかったといえば嘘ですけれど……」
でも、兄さま、婚約した後もする前も、すこしも様子が変わっていないし。
「……ふうん？　でも、羽衣ももう十六でしょう？　とっくに結婚していていいころなのに、どうしてそうしないの？」
「――え？」
「なにか考えてることでもあるの？」
「いいえ――べつに、なにもありませんけど」
「じゃあ、早く結婚してしまえばいいのに」
「……そうですねえ」
「そうして、ふたりで人妻になって、今まで以上に仲よくしましょ。おんなじ時期に結婚すれば、その先の悩みごとも、きっと、おんなじ時期にやってくるわ。お互い、助け合えるわ。そうして、わたくしたち、ずーっとずーっと、仲よく一緒に過ごしてゆくのよ。――ね？」
姫さまは、私の手を取り、胸の中であたためるように抱きしめてくださった。
「わたくしは九郎さまの妻になって、羽衣は十四郎の妻になって。ずーっとずーっと一緒に

……」

姫さまのくちびるが、歌うように、そんな呟きを繰り返す。

けれども私は、聞いていなかった。

耳の中で、さっきの姫さまのお言葉が、ぐるぐると回っていた。

——羽衣ももう十六でしょう？　とっくに結婚していていいころなのに、どうしてそうしないの？

本当にそうだ。

十四歳で婚約して、もう二年。すこし時間が欲しいの——そう言ってから、もう二年。

いいかげん、いい頃合いなんじゃないの？

いつまでも兄さまを待たせてないで、待ってくれる兄さまに甘えてないで、そろそろ私も。

結婚、しようかな？

そうしたら、どうなるのかな？

兄さまは兄さまじゃなくなって、私の夫になって——ほかにも、いろいろ変わるのかな？

べつに何も変わらないか？

私は今までどおり、姫さまにお仕えして、兄さまにはこちらへ通ってもらって。

ずーっとずーっと私は姫さまにお仕えして、一生、死ぬまで——、

九郎に嫁いだ姫さまに、お仕えするの？

☆

「私、御所づとめをやめようかしら？」

午後の陽だまりの中に、ぽつんと呟いてみた。

「――なんだって？」

何か書き物をしているらしい十四郎兄さまの声が、背中で揺れた。

姫さまが、ゆっくりしてらっしゃいな、と言ってくださったので、丸一日お休みをいただいた、秋の日。

私は、兄さまのまなざしを求めて振り返る。

でも兄さまは、顔を上げてもくれずに、自分の用事にかかりきりのまま。

それでも話だけは聞いてくれているらしいのはわかるので、私は、

「御所づとめ、やめようかな――って」

「なぜ？」

「だって、綾姫（あやひめ）さまのおそばに上がったままでいると、兄さまに、御所まで通ってもらわなくちゃいけなくなるでしょ？　私、それよりもうここに帰ってきて、静かに、兄さまが帰ってくるのを待つ――っていう、そういう生活したいなあと思って」

兄さまの、瞳が上向いた。
意味は、通じていると思う。けれど兄さまは、特別な反応は見せず、ただ、
「綾姫さまが許してくださるかな？」
「……わかんないけど」
私は、膝を立てて兄さまの隣まで擦り寄った。
「わかんないけど、兄さまは、どう思う？」
「どう思うも何も、羽衣が綾姫さまのおそばを下がりたいと言い出すなんて、思ってもみなかったことだからなあ」
「……そう？」
「当たり前だろう？　おまえ、俺よりも綾姫さまが大事で、自分の幸せよりも綾姫さまの幸せが大事――みたいなところがあるもの」
「私って、そんなふう？　前にも九郎に――」
と、言いかけて。
私はくちびるを閉ざした。
あんまり言葉にしたくない名前だな、これは。
前にも、九郎に同じことを言われたんだけれどね。そのことを、今は言いかけたんだけれどね。

「九郎どのに――？」
兄さまは手を止め、私を見た。おだやかなまなざしだった。
私は静かに首をふり、
「なんでもないの」
「――そう？」
「うん」
頷きつつ、私は心を決めた。
「私、やっぱり姫さまにお願いしてみる。兄さまと結婚したら、申し訳ないけれどおそばから下がらせてください――って」
「それでいいの？」
「うん。そのほうがいいような気がするから」
「本当に？」
兄さまの瞳が、不思議な角度に傾いた。
私を探るような――いいえ、見透かすような？
なんとなく、目をそらした。
「本当にいいの？」
兄さまは、なおも言った。

「俺と結婚して、綾姫さまのおそばから離れて――本当に、いいんだね？」
「いいの」
そらした目のまま、頷いた。
「羽衣？」
「なあに？」
「こちらを向きなさい？」
さからえないほどの厳しさが、兄さまの声に滲んだ。
仕方なく、顔を上げた。
「羽衣、忘れるんじゃないよ？　羽衣が綾姫さまの幸せを願ってやまないように、俺も、おまえの幸せだけを願ってやまないのだからね？　おまえが本当に納得できる答えとして、このことを決めたのなら、俺は何も言わない。でも、すこしでも迷いがあるのならば――」
「あるのならば？」
「いつでも俺に言いなさい。なんでも聞き入れてあげるから」
そして、兄さまは微笑をくれるの。この笑顔さえあれば、このやさしささえあれば、なにもいらない――そう思えるほどの幸福に包まれた微笑をくれるの。
でも、私はそっと目を伏せた。
ほんとのこと、言うとね。

迷い——ならば、ある。胸の底で、いつもいつも揺れている。

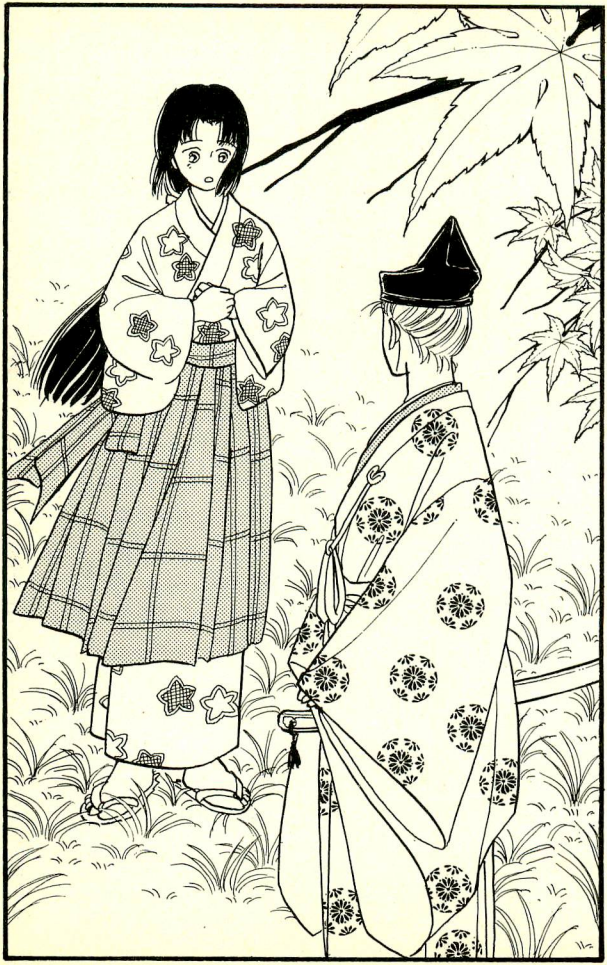
☆

姫さまのおそばにいるのが、息苦しい。
でも、今日は姫さま、九郎と出かけていて、いらっしゃらないから。
だから私も、御所を抜け出し、秋を探す散歩に出た。
萩に桔梗に女郎花——。
ひっそりと咲く秋を、ひとつひとつ、そっと目に映しながら、行く。
どこかで鳥の鳴く声がした。
その声にひかれ、振り仰ぐと、空の青にも秋いろのひと刷け。
桔梗を一輪、手折り、手の中に迎えた。
その青紫を、空の青にかざしながら歩いた。
心が、のんびりと広がるのを感じた。
出てきてよかったな、と思った。
でも——。
やがて、手の中の青紫が、ぽとりと落ちる。
はずんでいた足取りが、ぴたりと止まる。

私は、ひとつだけ、大きな息を飲み込んだ。
だって。
九郎がいる。

☆

でも、なんだかホッとした。
久しぶりに会えちゃったな——なんて、久しぶりに顔を見ちゃったな——なんて、胸の中で強張(こわば)っていた何かが、秋の気配をしみ込ませてやった時よりももっともっと、やわらかくやわらかく、溶けてゆくのを感じた。
それは、無意識。
その一方で、溶けてゆく気持ちを必死に寄せ集め、大地に立った足を強く強く踏みしめようと、彼を見つめる視線を強く強く支えようと、がんばっている私がいる。
それも、無意識。
ふたつの無意識の中で、私は混乱してしまい、
「どうして——」
訊ねる声が、最後まで続かない。
けれども九郎は、妙に落ちついた態度で、



「おまえ、御所を留守にしていると聞いたけれど、こんなとこをふらふらしてたのか」
「――え？」
どうして私が留守にしていたことを知ってるの？　私、九郎と姫さまが出かけられるまでは、ちゃんといたのに、ちゃんと、お見送りをしたのに。
「今、御所までちょっと帰ってきたから」
「帰った？」
「ああ。綾姫が、川で馬に水をかけられた」
「なんですって？」
「大丈夫だよ。ちょっと濡れただけ。でも、風邪をひくといけないと思ったからさ。火を焚いてやって、俺が人を呼びに戻った」
「姫さまをおひとりに残しておいて!?」
「仕方ないだろ？　ふたりきりで出てきたんだから」
「九郎に預けておけば、絶対、安心だと思ってたから、乳母どのがもっと供を供をってておっしゃるのを、私、押さえていたのに」
「おいおい、言っとくが、べつに事故が起こったわけじゃないぞ？　俺は、馬に水浴びさせてただけだ」
「……？　それで、どうして姫さまが濡れるの？」

「危ないかもしれないから離れてろって言って、ちゃんと離しておいて、それなのに綾姫、面白がってそばに寄ってきちゃって……」
「――まあ」
姫さまったら。
もともと無邪気な方ではあったけれど、それにしても最近は、なんていうのかしら、はしゃいだお顔をなさることが多くなったというか、おてんばになられたというか、なんというか……。
九郎の、影響かしら？
うら寂しい気持ちが、胸のあたりをすうーっとよぎったとき。
九郎が、にっと笑った。
……なに？
ぼんやり見上げると、彼は顔中に広がった笑いをくしゃりと崩して、
「羽衣がそうやって突っ走るみたいに綾姫の心配してるとこ、久しぶりに見た」
妙に嬉しそうに言うの。
「……そうかな？」
「そうだよ。ここんとこ、ずっと沈んだ顔して、綾姫から目をそらしてばかりいただろ、おまえ？」

……なんで知ってるの？

最近、九郎とは、彼が姫さまを迎えに来るときに顔を見るくらいで、ほとんど会ってなかったのに。

「綾姫が言ってた。わざといろいろ世話をかけるようなことをしてやっても、羽衣、ぜんぜん気づかないでボーッとしてるって。姫、面白がってた」

……なんで面白がるんだろ？

かしげた首の角度に、そんな疑問を滲ませてみせたのに、彼は答えず、

「ここって、あの木のあたりに近いな」

「――あの木？」

「そう。おまえと初めて会った、あの木」

言われてから、気がついた。

このまま行くと、そうだ、この原はあの川べりにつながってゆく。

「そういえば、姫さまは今、どうなさってるの？」

「着替えてるよ。俺が呼んできた女たちに手伝わせて」

「じゃあ私も……」

お手伝いに行かなくちゃ。

それが当然のことなのに九郎は、

「いい。手は足りてる」
短く言ったあと、私の足元に落ちていた桔梗を拾い上げた。
その青紫を、さっき私がしていたのとまったく同じに、空の青にかざしながら、歩き出す。
私の花とわかっているのに。
それなのに返してくれないのは、ついて来いという意味なのか。
わからなかったけれど、ふらり、私の足は彼の足あとを追って一歩を踏み出す。

☆

夏だったよねえ、あれは。
木もれ陽の影が、深く地面にしみ込んで。
しっとりと息づく緑が、まぶしいほどに揺れて。
ここで、会ったね。
真夏がぱっくりと口を開いた、ほら穴の中の午後。

歩くたび、ころころと転がった思い出に足がとられる。
つまずかないよう、ゆっくりと歩いた。
気まぐれに桔梗を振り回しながら行く彼は、先にあの木に辿りつき、

「なあ――？」
私を呼ぶけれど、振り返りもしない。
「おまえさあ、どうしてすぐ、十四郎と結婚しなかったの？」
「――え？」
「十四歳っていったら、べつにそれほど早いわけでもないのに」
「だって、それまでは兄としてしか見たことがなかったんだもの。すこし時間が欲しくて……」
「ふーん？　十四郎に気持ちを見せられるまで、おまえ自身は、一度も十四郎を男として意識したこと、なかったんだな？」
「当たり前でしょう？　兄さんだとしか思ってなかったもの」
「で、そのまんま今まで十四郎を待たせてたというのはつまり、この二年間も、おまえは結局、一瞬たりとも十四郎を男として意識できなかったってことだよな？」
「――？」
「そういうことに、なんない？」
くるり、こちらを向いた。
すたすた、私に近づいた。ぽんっと、私の頭上に桔梗の青紫を置いて。
「おまえ、十四郎の妻になる気、ほんとにあるの？」

「――ある」
「うそつけ」
「うそじゃないわ」
「うそだよ」
髪の上で、桔梗の花びらのやわらかさが、ちいさく弾んだ。
九郎はもう一度、
「うそだよ」
それから、
「だっておまえ、俺のこと、すきだもん」
と、笑う。
そのあと九郎は、私の頭に桔梗の花を置き去りにした。
九郎を呼ぶ、女の声が聞こえたのだ。あれはきっと、九郎が姫さまのために連れてきた侍女の誰かの声。
九郎は、それに応えて行ってしまった。
桔梗と私は、木の下においてきぼり……。
ぼんやり、背中を見送った。
だって、今の、なんだろう？

自分は姫さまと結婚するつもりのくせに。
あれ、なんだろう？
わからないまま、立ちつくすうちに。
髪から、桔梗の青紫がぽとりと落ちた。

☆

わからないまま、御所へ帰った。
姫さまのところへは上がらず、自分の部屋でぼんやりと時を過ごした。
なんだろう？　なんだろう？
頭のちょっと上のあたりで、そんな疑問符がくるくると回り続けている。
でも、胸の奥底では。
わかっているのよ、私。本当は、もうみんな、わかってしまっているの。
最初から——かなあ。本当は、最初からね、みんなわかっていてね。でも、わからないフリをしていたのかな。わざと心を引き裂いてね。
……ばかみたい。こんなの、わからずにいたほうが幸せだったのに。
ぽろり、涙が転がり落ちた。
大粒の涙は頬をすべり、くちびるを濡らし、したたり落ちては膝の上に染みをつくる。あと

からあとから、いくつもいくつも……。

でもやがて、ちいさな足音がヒタヒタとこちらへ近づいてくるのを聞き、私は、慌てて涙を飲み込んだ。

姫さまからの、お使いだった。

「羽衣さま、戻られているのなら、ちょっとお顔をお見せください、と姫さまが……」

そう言ってきた女童（めのわらわ）の着た汗衫（かざみ）の色が、青紫だったのを見て、私はまた、ぼんやりと先ほどの桔梗を思い出し……。

けれどもすぐ、我に返った。

「わかりました。すぐに参りますとお伝えしてちょうだい」

それから、髪をちょっと直した。瞳から、涙を完全に追い出した。頬をぴたぴたと叩いてもみた。

――うん、よし。

姫さまにお会いできる。ちゃんと微笑むことができる。

そうやって気合いを入れ、もの想いをすべて消し去り、私は姫さまのお部屋へ急いだのだけれど。

そこで私を待っていたのは、思ってもいなかった、私の新しい運命だったのだ。

七

私を待っていたのは、姫さまだけではなかった。
呼ばれて行った姫さまのお部屋に、見知らぬ人がふたり。
乳母どのくらいの歳の武家の婦人と、若い武士。
ほかに、お館さまや奥方さままでいらっしゃる。
いったい、なんなのかしら？
縁に控えたまま躊躇していると、
「羽衣、そんなところにいないで、お入り」
姫さまが、やさしく手招きしてくださったので、わずかに膝をにじらせ、すこしだけ、からだをお部屋に入れさせていただいた。
すると。
視線を、感じるのだ。頬に、痛いほどの視線を感じるのだ。
そっと、そちらを見やった。見知らぬ婦人が、身を乗り出さんばかりにして、私の顔を見つめている。
なんだか、気味が悪かった。

でも、お館さまに奥方さままでが同席していらっしゃるのだから、きっと、たいそうなお客さまに違いない。

粗相があってはいけないな、と思い、私は、とりあえず、にっこりと笑ってみせた。

「羽衣」

私の名をお呼びになったのは、お館さまだ。

「はい」

と、そちらへ顔を向けると、

「実は――だな」

お館さまは、ちょっと困ったように、まずは言葉を濁される。

「なんでしょう？」

「実は、このふたりは平家に縁の者たちでな。おまえに用事があって、はるばる都から来たというのだが」

平家の……？

なんでそんな人が私なんかに用事など――と、首をかしげたとき。

思い出した！

この武士、あのときの人だわ。衣河館に姫さまのお供で行ったとき、くちなしの花のところで会った人。

私によく似た人を知っている——そんなことを言っていたっけ。
用事って、それに関することなのかしら？　それにしても、いったい……？
私は、心細い思いでお館さまを見つめる。
するとお館さまは、私のその視線に応えるように、
「こちらの——」
と、武士ではなく婦人のほうを指で示し、
「こちらの者は、平頼盛どののお屋敷に、姫ぎみの乳母として仕えていた者なんだが、その姫ぎみというのが、十四年前、屋敷から急に姿を消してしまった人なのだよ」
「……はあ？」
「この乳母は、それからずっと、姫ぎみの行方を探していたというんだ。頼盛どのはとっくにあきらめてしまったが、乳母はあきらめきれなくて、ずっと」
「……はあ」
だから、なんなんだろう？
「それで、この者」
と、お館さまは今度は武士のほうを示し、
「この者は、乳母の息子で——つまり、姫ぎみの乳兄弟に当たる者なんだが、この者が先日、衣河館の義父上を訪ねた折、おまえを見かけ、なんというかその——おまえが、行方不明にな

っている頼盛どのの姫ぎみに違いない、と、そう言うんだよ」
「……はあ？」
私はただ、まばたきをひとつ、した。
お館さまは苦笑を洩らしつつ、私の目をのぞき込まれる。
「意味がわかるか？」
「……はあ」
わからない。
なんなの？　私が――なんですって？
平家の姫ぎみ……？
気がつくと、ぽかん、と、くちびるが軽く開いてしまっていた。
「あのう……」
乳母、という人が、膝でじりりと前へ乗り出し、
「姫さまですわ、あなたは。わたくしがふたつまでお育て申し上げた、羽衣さまに間違いございません」
「羽衣――というお名前なのですか、その姫さまも」
「ええ、ええ。お父さまの頼盛さまが付けてくださったお名前ですよ」
……おなじ名前。

「それより何より、奥方さまに生き写しの、その面ざし。間違いございません。わたくしの姫さまですわ」

乳母は、ゆるく皺の刻まれた目尻に、ほろりと涙を滲ませた。

「こんなに大きくおなりになって……。息子の景清から聞いたときは、半信半疑でしたけれど。こうして、思いきって奥州までやって来て、本当によかった」

「わたしは、ひと目でわかりましたよ」

と、乳母の横からにっこりと笑いかけてくるのは、景清という名であるらしい、例のあの武士だ。

「初めてお会いしたとき、すぐに姫さまだとわかりました。覚えてはいらっしゃいませんか？わたしは、姫さまがお小さいころ、よくお遊びのお相手をさせていただいたものなのですが」

この人は、私の乳兄弟なの？　だからあのとき、なんとなく見た覚えがある人だ——と、そう思ったの？

もう一度、まばたきをした。そうしたら、頬から、中途半端な笑いが落ちた。

だめだ。やっぱり、信じられない。私が平家の娘だなんて、そんなの……。

だって、だとしたら、いったいどういうわけで私は平泉までやって来たの？　どういうわけで、十四郎兄さまに育てられることになったの？

わからないことだらけで、信じられない。

笑いが落ちたあとは、ただ、真っ白い中に時間が過ぎた。
乳母という人に、抱きしめられたような覚えがある。
その人の腕の中は、甘くやさしい匂いがして、その人の頬から落ちて私の髪にしみ込む涙にも、たまらなく熱いやさしさが溶けていて。
でも。
ちっとも懐かしくなんかなかった。ちっとも心地よくなんかなかった。
その腕の中から、私は確か、こっそりと綾姫さまのお顔を探してしまったと思う。
姫さまは、すぐに気づいて、あたたかな微笑をくださった。
それをいただいて、私の瞳から、急に涙が溢れ出した。
乳母は、自分への懐かしさから、慕わしさから、溢れた涙だと思ったようだったけれど。だからそののち、彼女は声をあげて泣き出してしまったりなんか、したんだけれど。
違うの……。

☆

平頼盛というのは、平清盛の異母弟に当たる人だ。
その人が、私の父？
だとしたら、清盛は私の伯父ということになるし、おそれおおくも今上帝の中宮でいらっし

やる徳子さまは、私の従姉妹ということになってしまう。
……嘘よねえ？

☆

夏に咲き遅れた薔薇の下に、ぽつんと座り込んでいる。
なにもかもが、夕暮れのはかなさに紛れ込んで霞む時間。
ひとつだけ、ちいさく咲いた薔薇の白い花びらを、見るともなしに見つめながら、もうどれほどの時間、こうしているだろう？
「とにかく、まずは十四郎のところへ帰りなさい」
と、お館さまはおっしゃった。
あののち、私だけを別室に呼び、
「実は――」
と、教えてくださったお話によると。
お館さまは、私の生い立ちを、私が平泉に来た当初から、ご存知だったのだという。
「十四郎から、聞いていたからな」
「兄さまから……？　では、兄さまもこのことを――」
「承知で、あれはおまえを育ててきたのだ」

「どうして――」
問いかける私を、右手で制し、
「あとは十四郎に聞きなさい。あれが、すべてを知っているから。あれの言うことだけが、真実なのだから。――わかるね？」
「――はい」
わかります。
だって、十四年間、私にとってはあの人が世界のすべてでした。
私にはほかに頼るべき人はいなかったし、兄さまにはほかに守るべき人はいなかったし。
手を伸ばして触れられる相手は、お互いだけ――十四年間、そんな想いの中で生きてきた私たち。
「十四郎の話を聞いて、そうして、よく考えなさい。これからどうするのか、どうしたいのか――。おまえの将来がかかったことだからね。なにが一番、おまえにとっての幸せなのか、よく考えるんだよ？」
お館さまのやさしい言葉に、私は深く頷いたんだけれど。
そのまま、ここに来てしまった。
そして座り込み、薔薇を見つめて――どれほどを過ごしてしまったんだろう？
だって、なんだか怖い。兄さまの口から本当のことを聞くのは、怖い。

こういうことになってみて、初めて気がついた。

兄さまは——あの人は、誰なんだろう？

この平泉に、私たちの縁者はいない。私たちの血が——つまり、兄さまの血がつながってゆく家柄は、この平泉にはひとつもない。

だから私たちは、ふたりきり、身を寄せあって生きてきたのだ。ほかの誰をも頼らず、ふたりだけで生きてきたのだ。

私はずっと、兄さまも、私と同じみなしごなんだと思っていた。両親を亡くし、ひとりでさまよっていた少年なのだと思っていた。

でも、よく考えてみれば、いくつもの疑問が浮かぶ。

そんな寄る辺のない少年を、お館さまはなぜ、郎党として召し抱えられたの？　その少年が連れている女の子を、なぜ、ご自分の姫ぎみのお話し相手になど選ばれたの？

私が平家の娘だから？　そういう娘を連れている少年だから？　だからふたりを守ってくださったの？

でもなぜお館さまは、兄さまが言う「この子は実は平家の姫なんです」という言葉を、すんなりと信じてしまわれたの？

わからない。

わからないことだらけだ。

あの人は誰？　私を育ててくれた、あの人は――。
薔薇の花びらに、そっと触れてみた。
けれどもそれが、私の指の重みに耐えかねたのか、ゆらりとはかなく散ってしまった、そのとき。
背中に名前を呼ばれた。

☆

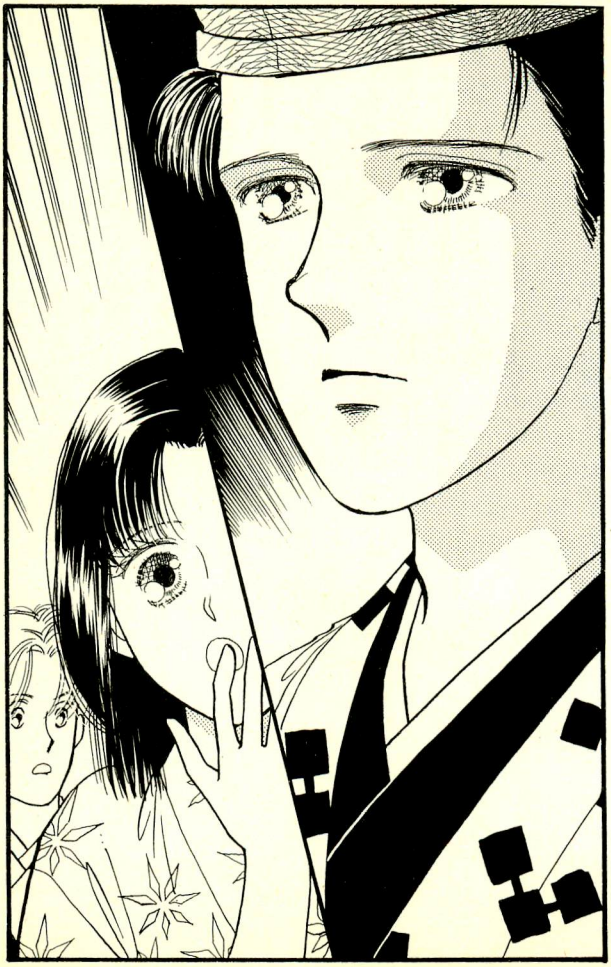
九郎だった。
「羽衣――！」
私を見下ろす位置に立ち、九郎の目尻が、恐ろしいほどにつり上がっている。
でも私は、その荒々しさをも、ぼんやりとしか見上げることの出来ない気持ちの中にいた。
「羽衣！」
もう一度、九郎の声は私を呼んだ。
「おまえ、いったい、なんなんだよ!?　平家の姫って、いったい、なんなんだよ!?」
ぱちくりと、まばたきをしたあと、
「……私に訊かれても、わかんないわ」
ため息の中から、私は答えた。

「私、知らないもの。平泉にいて、兄さまと暮らして、綾姫さまにお仕えして――そういう私のことしか、私、知らないもの」
「だって、あのばあさんと男が、おまえを迎えに来たんだろう？」
「らしいね」
「おまえを、都へ連れて帰るのか？」
「そうみたい」
「都へ――平家の屋敷へ？」
「うん。九郎の嫌いな平家の、屋敷へね」
意地悪な気持ちでそう言ったんじゃない。ただもう何も考えられなくて、私は、頭にポッと浮かんだ言葉を、浮かぶまま声にしていただけだ。
でも九郎は、ひどく傷ついた顔になった。そのまま、ぎゅっとくちびるを噛みしめた。
私を、見つめる。痛いほどに見つめる。
それから。
「俺は、絶対に認めない」
私の腕を取り、乱暴に引き寄せ、
「羽衣が平家の娘だなんて、絶対に認めない！」

☆

ほのかな灯火が、十四郎兄さまの顔を淡く照らした。
兄さまは、静か。なにもかもを忘れてしまいそうなほどに、いつもと変わらない静けさをその身にまとい、私を迎えてくれた。
九郎も、いる。
「俺も一緒に話を聞く」
と言って、ついてきてしまったんだもの。
九郎の姿を見て、兄さまは苦笑した。
「よろしいのですか、こんなときに出歩いていらして？」
「いい」
無愛想に、九郎は頷く。どうも九郎は、お館さまに、
「あの客人は、平家の人間なのですから。まあ滅多なことはないと思いますが、なるべくなら九郎さまは、身を隠されていらしたほうがよろしいでしょう」
と、言い含められていたらしい。
そういえば九郎って、平家の目から隠れるために平泉へ逃げてきた立場の人なんだっけ。
いつも、あんまり大きな態度でいるから、すっかり忘れてしまっていたけれど。

それを言うと九郎は、
「うるさいな」
いばって怒ってみせているけれど、ちょっと嬉しそうだ。
きっと、私が、いつもと変わらない調子の憎まれ口をきいたからだろう。
家に戻って、兄さまの顔を見たら、やっぱりちょっとホッとしたんだ。
隣には、九郎もいてくれるし。
これで姫さままでいらっしゃったら、私、なにもかも忘れて眠り込んで、夢の中から一生、目を覚まさなくなるくらいに、安心してしまうに違いないわ。
私は、くすくす笑いながら、嬉しそうな九郎の頬を見つめた。
それから、兄さまへ——と、目を移したのだけれど。
その途端、気持ちが、ふっと引き締まった。
おだやかな、兄さまの目。いつもと変わらない兄さまの目。けれども今、私を見つめているそれは、見知らぬ人のもののようなのだ。見知らぬおだやかさをたたえて——。
私の知らない兄さま。きっと、兄さまが十四年間、胸の奥底に眠らせてきたのだろう、本当の兄さま。
その人が、
「九郎どのも一緒だったというのは、なるほど、都合がよかったかもしれない」



と、言った。
「こうなったからには、そなたにも真実を伝えるべきだろうと思っていたからな」
そなた——と、兄さまは九郎を呼んだ。
それは、目下の者に使う呼称だ。
九郎は、まずは面食らい、そのあと鼻先から、短い笑いを落とした。
「なんなんだよ、いったい？」
すると兄さまは、ふ、と微笑し、
「わたしは、そなたの叔父だよ」

☆

「わたしは幼名を天王丸といった。源為義の、第十四子」
「その叔父ならば、もうずっと以前に——」
言いかけた九郎の言葉を受け取り、兄さまは、
「殺されているね、保元の乱の直後に」
それでも、おだやかな微笑のままなのだ。
「なぜ……」
問いかけた声の尾を、けれども九郎はすぐに消した。兄さまの説明を待つつもりらしい。

ちなみに、保元の乱というのは――。

九郎のお祖父さま――源為義が殺されたときの戦だ。

天皇家の内紛に端を発するこの戦は、やがて摂関家内部の対立を絡み込み、のちに源氏と平氏をも巻き込んでの武力争いに発展してしまった。

そのとき、為義が味方した側が負けた。

戦後の処理として、為義も、その子供たちの多くも、斬られたという話なのだけれど。

「わたしは、そのとき七つだった。兄弟のうちの末っ子で――。同腹の兄弟四人、屋敷の中でふるえていると、父からの使いという者が来たんだよ。そのとき、実はすでに父は斬首されていたんだが、幼いわたしたちは、そんなことなど知らなくてね。心細い思いでいたものだから、父が船岡山に隠れていてわたしたちを呼んでいると聞いて、嬉しくて嬉しくて。先を争って迎えの輿に乗ろうとしたんだが、どういうわけかわたしだけを、こっそりと兄たちから離してしまった男がいたんだよ」

わけもわからず、兄さまはその男のするがままになっていたのだという。

すると、迎えの輿には兄さまの身代わりのように、その男が連れてきた子供が乗り込み、行ってしまった。

「それが実は死への旅だったのだと聞いたのは、ずいぶんと経ったあとのことだったな。話ではわたしも死んだことになっていて、けれども幼いわたしには、自分は本当は生きているの

に、表向きは死んだことになっているなど、そんな難しい話を理解できるわけもなくて」

「叔父上を――」

と、九郎は、ためらいがちに兄さまをそう呼んだ。

「叔父上を助けてくれたというその男は、いったい、誰だったのですか？」

「わたしの異母兄――つまりそなたの父の、郎党だよ」

「俺の父上の――」

九郎の父・源義朝は、保元の乱のとき、一族のほとんどを敵に回す立場を取っていたのだ。ただひとり、勝者となった。

だから、父を、弟たちを、殺さなければならない苦しみの中に、立たされていたのだった。

「さっきも言ったように、わたしはあのとき七つ。同腹の兄弟のうち、一番年長だった兄上も、やっと十三。義朝兄上は哀れんでくださったのだろう、四人兄弟すべてを、なんとか助け出すようその男に命じたというのだが、間に合わず、わたしひとりを連れ出すのだけが精いっぱいだったという話だった」

そののち兄さまは、九郎の父・義朝の屋敷に隠れ住んでいたのだそうだ。

けれどもその三年後、また、乱が起こった。

平治の乱――。

今度は、平清盛と源義朝とが直接にぶつかりあった戦だ。

結果は、清盛の大勝利に終わった。
「わたしはまた保護者を亡くし、ひとりぼっちになってしまった」
けれど、まだ義朝の子供たちが生きている。平家に捕虜として捕らわれた、希義、九郎を含めた三兄弟、そして頼朝――。
「その頼朝が預けられていたのが、平頼盛が召し使う郎党の屋敷だった」
兄さまは、ちらりと私に目をくれた。
私はそれを、すこし緊張した気持ちで受け取った。
ここから、私がからんでくる。私の生い立ちがからんでくる。
だから私は、わずかに胸を緊張させて、兄さまの言葉が続くのを待った。
「頼朝というのは、わたしにとっては甥に当たるわけだが、わたしよりも三つ年上でね。義朝兄上の屋敷では、兄弟のように、よく遊んでもらったよ。仲よしだったし、私自身、捕らわれて殺される運命にあったところを義朝兄上に助けられていることだし、なんとかして頼朝を助け出してやりたくてね」
兄さまは、頼朝が捕らわれている屋敷に忍び込んだのだそうだ。
「でも、あの頼朝というのは、なんというのかなあ？　実に変わった人で。あのとき十四だったんだが、妙に覚りきったというか、涼しげなというか、落ちついたというか、けなげなというか――」

助け出しに行った兄さまに「生き延びるつもりはない」と言ったのだそうだ。武将の子らしく、自分の運命を潔く受け入れるつもりだ——と。

それでも兄さまは、危険をおかして頼朝の許へ通いつづけ、説得を続けた。

ところが。

そうするうちに、頼朝のその態度が人々の哀れを呼んだのか、平頼盛の家族の中から、頼朝助命を願う声があがりはじめたのだ。

結果、頼朝は斬首をまぬがれ、伊豆へ配流されるにとどまった。

「嬉しかったけれどね。あまりにも呆気ない話で、わたしは、いったい何のために走り回っていたのかと情けなくもなってしまったよ」

頼朝は、申し訳ないと頭を下げながら、一緒に伊豆へ向かうよう兄さまを誘ってくれたのだという。

けれど、兄さまは断った。

「なんだか、妙に虚しくなったんだよ」

世では死んだはずと思われている我が身。亡霊の身の自分。

走り回っても走り回っても、願いを叶えることすら出来ない。それどころか、横から差しのべられた手が、自分の存在など知らない人からの手が、やすやすと同じ願いを叶えてしまうのを、指をくわえて見つめていることしか出来ない。

そんなとき、兄さまは私に会ったのだという。
「頼朝に、最後に会いに行ったときだった」
頼朝が捕らわれていたのは平頼盛の郎党の屋敷だから、それは頼盛邸の隣にある。
兄さまは、あまりの虚しさに荒れる気持ちを抱いて歩くうち、頼盛邸の中に迷い込んでしまったらしい。
そこに、私がいた。
ひとりで遊んでいたという。
兄さまを見つけ、まるで生まれたときからの遊び友達を見るように慕わしげに、私は笑ったのだという。
「思わず手が伸びたよ。気がついたら抱きしめていた。たぶん、一緒に、しばらく遊んだのだと思う」
けれどもやがて、私を探す声が聞こえてきたので、兄さまはその場を離れようとした。
でも、私が離れたがらなかった。
近づいてくる声、そして足音。
思いあまった兄さまは、その場はとにかく、私を連れて逃げたのだ。
「あとで返せばいいと思った。返すもなにも、すぐにおまえが泣き出して、帰る帰ると騒ぐだろうと思っていたし」

ところが、私は泣きもせず、おとなしく兄さまに従っていたのだという。そのあたたかさを抱きしめるうち、兄さまの中に、私を放したくない気持ちが芽生えてしまった。

「このまま、この子を連れて逃げてしまおうか——とね。頼朝を連れて逃げるつもりだったのを、この子と一緒に逃げようか——と」

だって、ひとりは寂しすぎる。

十一歳の少年に、ひとりの寂しさは重すぎる——。

「頼盛邸で、姫がひとりいなくなったと騒いでいるのは知っていたけれど、知らんぷりで、わたしは、かねてから頼朝を連れて向かうつもりだった奥州を目指して、都を出たのだ」

奥州は——この平泉は、治外法権だから。平家の追及はもちろん、朝廷の力でさえ及ばない聖域だから。私たちのお館さまは、それほどの権力を持った方だから。ここに逃げ込んでしまえば、大丈夫。もう何に怯える心配もない。

その安心を求めて、奥州へとはるばるやって来た兄さまを、お館さまは、快く迎え入れてくれたのだという。

兄さまの身分を証明するものなど、何ひとつなかったけれど、でもお館さまは、

「嘘なものか。おまえの目を見ればわかるさ。それに、こんな時代だ。源家の御曹司だと嘘をついても何の得にもなりはしないしなあ」

と、笑っていらっしゃったそうだ。そして、

「どうせ死んだとされている身の自分、源家の嫡流の血を持つ者であることは忘れて、ただの武士として、静かに暮らしてゆきたい」

そんな兄さまの願いを聞き入れ、ご自分の郎党のひとりとして召し抱えてくださった。

兄さまの連れた女の子が――つまり私が、実は平家の姫であると聞いても、お館さまはその真実をおひとりの胸にだけ秘めてくださったのだという。

それは、

「おまえがわたしの生き甲斐だと、お館さまは、すぐに見抜いてくださったから」

私は、兄さまの生きるすべて。

私がいなかったら。あのとき、私と出会わなかったら。

私が兄さまを拒否したら、兄さまになつかなかったら。

兄さまは、今ごろどうしていたんだろう？

生きて――こられたのだろうか？

☆

長い長い話のあとに、兄さまは、短いため息をひとつ吐いた。

「羽衣が都へ帰りたいというのなら、わたしは何も言わない。わたしには羽衣を引き止める権利はないし、羽衣にもわたしに気兼ねする義務はない。――どうする？」

訊ねられ、私はまずは、真っすぐに兄さまを見つめた。

ふたりきり、都から奥州へ、さまよってきた私たち。

まるで前世からの知り合いのように、兄さまになついた私ではあったけれど、道中、時には母を恋しがり、泣くこともあったのだという。

「そういうときは、本気で捨ててしまおうかと思ったよ。でも、泣きながら羽衣は、わたしを見るんだ。母を呼んで泣きつつも、わたしの反応を確かめているんだよ。わたしが羽衣を捨てていこうとすると、途端に泣き止んで抱きついてきたりしてね。可愛かったなあ。あんまり可愛くて、よく、わざと苛めたりもしたっけ」

兄さまは、目を細めつつ、そんな思い出も話してくれた。

ふたりきりの私たち。

私、母を知らない。父も知らない。乳母という人も、乳兄弟という人も、知らない。覚えていない。

私が知っている〝私〟は、兄さまの妹の羽衣、それだけだ。

「私ね」

と、心を告げようとした。

けれどもそのとき。
「――しっ！」
と、九郎がくちびるの前に指を立てた。
彼はそのまま立ち上がり、そろりと遣戸を引く。細めに開けられた戸の隙間から、とろりと濃い夜が流れ込んでくる。
「人の気配がした」
九郎は言う。
私たちは、そっと顔を見合わせた。
死んだはずの源家の御曹司と、都から逃亡中のもうひとりの源家の御曹司と、十四年前に消えた平家の姫とが顔を突き合わせ、人に聞かれてはまずい話をしていたのだから。
兄さまは、緊張する頬をなだめて心を隠しながら、召し使っている女を呼んだ。
「おまえ、今、この部屋の近くに来たか？」
すると女は、言うのだ。
「いいえ、わたくしはずっと、平家からのお客さまのお相手をいたしておりましたから」
「平家からの客――!?」
叫んだのは、九郎だった。
「なんでそんなのがこの家にいるんだ!?　いったい、いつの間に――!?」

あまりの剣幕に、女は怯えたように瞳を歪ませつつ、
「つい先ほどでございます。なんだか、十四郎さまにお目にかかりたい、と、おっしゃられまして」
女はまだ事情を知らないので、どうもわけがわかっていなかったようなのだけれど、話を聞いてみると、我が家を訪ねてきたのは、どうやらあの景清という、私の乳兄弟らしい。
私が、今夜、兄さまからこの十四年間の事情を聞くと知って、自分もそれを聞きたいと、やって来たもののようだ。
「ですが、今夜は誰もおそばに寄ってはならない、寄せてはならないと言いつけられておりましたから、わたくし、お話が終わるまでお待ちくださいと申し上げて――」
景清の相手をしていたというのだけれど、その景清が、やがて、やっぱり帰ると言い出した。
一応は止めてみたものの、夜分のこと、女も迷惑していたので、そのまま見送ってしまったらしいのだけれど。
「そいつが、戸の向こうに潜んでいたんじゃないか？」
九郎が、兄さまに向けて眉をひそめてみせた。
兄さまは、弱く頷いてみせたのだけれど。
「それならそれで、仕方あるまい」

短く、そう言っただけだった。
「叔父上――」
九郎は、なにか言いたそうに兄さまを見つめた。
けれども兄さまは、それを、ふわりとかわしてしまった。
「もう夜も遅い。九郎どのは、泊まっていらっしゃるか？」
呑気に、このあとのことを心配しはじめている。
九郎が何を言っても興味のない声を出すので、彼は不満げに、やがて、用意された寝所にもぐり込んで行ってしまった。
兄さまは、私にもやさしく言った。
「疲れただろう？　今夜は、ゆっくりおやすみ」
もう、なにも訊かない。私の気持ちを訊ねない。
兄さま、怖がっているの？　私がなんと答えるか、怖がっているの？
ばかね。
私の気持ちは、もうずっと前から決まってしまっているのに。

☆

その翌日。

朝もやが、まだ消え残るころ。肌寒い秋の風が、やさしく朝を抱きしめているころ。
庭へ起き出してゆくと、兄さまももう起きて、片隅に植えられた桔梗の花を見つめていた。
「おはよう、兄さま」
声をかけると、ゆっくりと私を振り向く。
「おはよう、羽衣。早いね」
「あら、いつもはもっと早いのよ。私が起きなければ、綾姫さまの一日もはじまらないんですもの」
「そうか？　眠れなくて早く起きてしまったのかと思ったけれど」
「うん――、それも、あるかな？」
私は、正直に頷いた。
それから、桔梗の青紫を見下ろす。
昨日も、この色を見たっけ。九郎と一緒に見たっけ。
あのときはまだ、なにも知らなくて。こんなことが起こるなんて予想もしていなくって。
ずいぶん前のことのような気がするけれど、まだ、たった昨日の出来事なのよねえ。
なんだか、不思議。
「――羽衣？」
兄さまが、私を呼んだ。

「昨日、訊ねたことなんだが」
兄さまの声が、すこしふるえている。
隠しているつもりのようだけれど、私にはわかる。
「そのことなら、私、もう決めているから」
「――え？」
「ずーっと前から決めていたから」
桔梗の青紫を、瞳の中から、えいっと追い出した。
そして、兄さまを真っすぐに見つめて。
「私は、兄さまの妻になるの。そうして、兄さまとふたりで、ずーっとずーっとふたりで、暮らしてゆくの」
「……羽衣？」
兄さまの瞳は、一瞬、ぽかんと見開かれた。
私がこんな答えを返すとは、思っていなかったみたい。
「都へ帰ると言い出すかと思っていた。都へ帰れば、平家の姫として何不自由ない暮らしが待っているのだし……」
「ばかなこと、言わないで。都なんて、べつに興味ないわ。本当の両親とか本当の家族とか、そんなのにも私、興味ないし」

「だが……」
「いいの。私は、平泉生まれの平泉育ち、兄さまの妹の——あ、違うか。これからは兄さまの妻の、羽衣。今までのままの私で生きてゆきたいの」
見開かれたままだった兄さまの瞳が、淡く、ゆるく、滲んでいった。
広げられた腕の中に、そっとからだを委ねてゆく。
抱きしめてくれた腕を、やわらかく肌に馴染ませてゆく。
この腕の中が、私の生きる場所。私の還る場所。そしていつか、私が一生を終える場所。
「おまえは、九郎を好きなのかと思っていた」
耳に、兄さまのそんな声が触れた。
「どうして？」
「理由なんてない。でも、ここのところのおまえを見ていて、そう思った。おまえは九郎に惹かれているに違いない——って」
「だから兄さま、迷いがあるならすぐに言いなさいって言ってくれたの？」
「うん」
「私が九郎を好きになったって言い出したら、私の気持ちを優先させてくれるつもりで？」
「うん」
「——ばか」

やさしすぎるよ、兄さま。
私がそんなわがままを言い出したら、殺してくれてもいいのに。おまえは誰にも渡さない——って、殺してくれればいいのに。
だから私、引き裂かれてしまった。
引き裂かれた末に、でも、兄さまを選んで——。
後悔は、ないよ。
この人を愛している。
この人に恋してはいけないけれど、深く深く愛している。
抱きしめてくれる胸に、頬を溶かした。
そうしながら、でも私は。
その頬に、九郎の視線を感じていた。
あの人が、いる。私たちを見ている。
でも、いいの。
私のこの姿を見てください。あなたに応えられない気持ちを見てください。
そうして。
私を憎んでくれていい。
許されるより、憎んで欲しい。私には、その憎しみが何より嬉しい。あなたが私にくれる愛

より嬉しい――。

☆

私の中に、恋がある。
嘘をついていたけれど。自分でも気づかないうちに、自分に嘘をつき、あれは恋じゃないと言い聞かせていたけれど。
心の底では、だめだった。やっぱり欲しいと泣いていた。
きっと、一生に一度の恋。
めぐりあえたことが嬉しくて嬉しくてたまらなかった恋。
でも、だめなの。何かが違うの。すれ違ってゆく何かが見えるの。
恋だけじゃ、だめだ。
好きだけじゃだめなときが、ある。
私たちの恋は、そういう恋。
兄さまがいなかったら。私と兄さまの間に、こんな事情がなかったら。
私、この恋に走ったかもしれない。あなたを恋することだけに、私の一生をかけたかもしれない。
でも。

まるでそんな私を諫めるかのように、兄さまと私の過去が知れてしまった。
恋だけじゃ、好きだけじゃ、だめだった。時の歯車を回せなかった――。
こんなの、だめ？　わかってもらえない？　理解できないですか？
でもお願い。わかって欲しいの。
私は幸せを考えたの。
私の幸せは、兄さまの手の中にも、九郎の手の中にも、等しくある。
九郎の幸せは、私の手の中にも、綾姫さまや誰かほかの女の子の手の中にも、等しくある。
でも、兄さまの幸せは。
私の手の中にしかないのよ。私が離れてしまったら、あの人は寂しい。たまらなく寂しい。
寂しい人に、戻ってしまう。きっと一生、その寂しさのまま――。
私の幸せは、兄さまの手の中にもあるんです。あの人と歩いてゆけば、私は必ず、幸せでいられるんです。
自分を犠牲にしたんじゃありません。私、私の幸せを、一生懸命、考えました。
そして選んだの、兄さまを。
あなたが私を憎んでくれたら、嬉しい。
一生、憎みつづけてくれたら、嬉しい。

こんな愛も、あるのね――。

☆

その日。

私は私の気持ちを、乳母と景清に、正直に告げた。

「私は、ここで暮らしたい。兄さまと一緒に暮らしたい。父上さまや母上さまには、あのとき私は死んだのだと思ってください――と、そうお伝えください」

けれども乳母は泣いて嫌がり、

「そんなことをおっしゃられたら、わたくしのこの十四年間は、どうなってしまうんです!? 姫さまだけを思い、姫さまのことだけを案じ、死んだように過ごしてきたわたくしの十四年間は――!」

その涙が痛くて、私はそっと目をそらした。

ごめんなさい。

でも私、行けない。ここにいたい。

すると隣から、景清が、

「母上、何が姫さまの幸せか、今は、そのことを考えなくては。母上が姫さまを思って過ごしてきたこの十四年間は、母上がそうしたくてしてきた日々であって、姫さまには、なんの負い

目もないはずなのですからね。姫さまを責めてはいけませんよ」
やさしく、乳母をなだめている。
その結果、
「とにかく、わたしたちは一度、都へ帰ります」
と、そういうことに落ちついた。
それを決めてくれたのは、景清だった。
彼は、なにも言わない。昨夜、私たちの家を訪れたことは、自分から言ってきたけれど、だからといって私たちの話を聞いたらしい様子はない。なにも言わない。不審な素ぶりも見せない。
やっぱり、気のせいだったのかもしれない。

八

「羽衣、羽衣――!?」
厨で、囲炉裏の火をおこしていた午後。
庭のほうから、どうも綾姫さまのもののような声がする。
私は、下働きの女にその場をまかせ、ちょっと様子を見に立った。

すると、縁に飛び乗らんばかりにして私の名前を呼んでいるのは、やっぱり姫さまなのだ。

「羽衣――！」

私が顔を見せると、姫さまは本当に、縁に飛び乗ってこられた。

と思うと、その勢いのまま、私の胸の中に飛び込んでいらっしゃる。

「どうなさったんですか、姫さま？」

私は、姫さまの重みを支えきれずに尻餅をついてしまったのだけれど、それでも姫さまが痛い思いをなさることなどないように庇ってさしあげるのは忘れない。

「羽衣、わたくしに黙っていなくなってしまうんですもの。わたくし、びっくりして、悲しくって、それで――！」

御所を飛び出してこられたのだという。

あのあと。

私は、御所で乳母たちと数日を過ごし、都へ帰るふたりを見送ったあと、そのまま宿下がりをしてきてしまったのだ。

御所へ帰るつもりは、もうなかった。そのまま、退がらせてもらうつもりでいた。

とはいえ、もちろん、明日にも姫さまにご挨拶申し上げにうかがおうと思っていたんだけれど。

「申し訳ございません、そのように、ちゃんと申し上げてから下がらせていただけばよかった

ですね」
「――羽衣？」
「はい」
「おまえ、ほんとにわたくしのそばにいてくれなくなっちゃうの？」
「はい――、そのつもりでおりますが」
姫さまの毎日のお世話をしてさしあげられなくなってしまうのは、胸が痛いほどつらいことだけれど、でも、前に決めたとおり、御所づとめはやめさていただこうと思っている。
「といっても、姫さまのお召しがあれば、私はいつでも参上いたしますよ？」
「そんなの、いや。いつも一緒にいてくれなくちゃ、いや」
「……姫さま」
私の胸の中で、姫さまはちいさく身じろぎされたあと、ひょっと顔を上げて、
「ねえ？」
「はい？」
「わたくしのせいなの？」
「――はい？」
「羽衣がわたくしのそばからいなくなってしまうのは、わたくしのせいなの？　わたくしが九郎さまと婚約したから、だから羽衣、わたくしと九郎さまの姿を見るのがつらくて、だから

――！」

「違いますよ、姫さま」

私は、すこしのためらいもなく微笑んでみせる。

昨日までの私には、確かに、その気持ちが少しあった。

いいえ、少しどころか、それが姫さまのおそばから下がらせていただこうと決めることになった理由の、すべてかな？

でも、今はもう違うんだけれど。

姫さまは、どうしてもそれが気になっていらっしゃるようで、

「嘘をついてはだめよ、羽衣。わたくし、ちゃんと知っているのよ。羽衣は九郎さまのこと、好きだったわ。わたくし、知ってたわ。わたくしにもわかってしまうくらい、羽衣は、九郎さまのこと、大好きだったわ。そうでしょう？」

さすが姫さま。私の一番、近くにいてくださるだけあるわ。

でも、もう姫さまにも言わない。終わったことだし、姫さまのご結婚にけちをつけたくはないし。

私はそう思い、曖昧に微笑むだけで言葉を濁していたのだけれど。

姫さまは、こんなことをおっしゃるのだ。

「わたくしね、ほんとはね、九郎さまのことなんて、好きでもなんでもないのよ！」

「……なんですって？」
「わたくし、べつに九郎さまのことを好きで婚約したわけじゃないの」
「好き――じゃない？」
「ええ」
「じゃあ、なんで……」
「羽衣が好きだから」
「……はい？」
「わたくしが九郎さまと婚約したのは、羽衣のことが大好きだからよ」
姫さまは、ただもう、必死に、私を見上げていらっしゃる。
「羽衣がわたくしの幸せを願ってくれるように、わたくしにとっても、羽衣の幸せは何よりの願いなの。だから、考えたわ。今、どうなることが、どうすることが、羽衣には一番、幸せなのか。そのこと、羽衣は考えてなかったみたいだったから、考えることを拒否しているみたいだったから、だからわたくしが、代わりに一生懸命、考えたの」
「姫さま……」
胸が、熱くなった。
私が、私のことを考えるだけで必死になっていた、あのころ。姫さまを思いやる心が、今思えば少し薄れてしまっていたような、あのころ。

姫さまは、私のためだけに、一生懸命、心を砕いてくださっていたなんて。

申し訳なくて、涙が出た。

ぽろぽろこぼれる涙の中で、それがあまりにも終わらない涙なものだから、困っていると、姫さまが、つ、と手を伸ばし、拭ってくださった。

白い、ちいさな、あたたかい手。

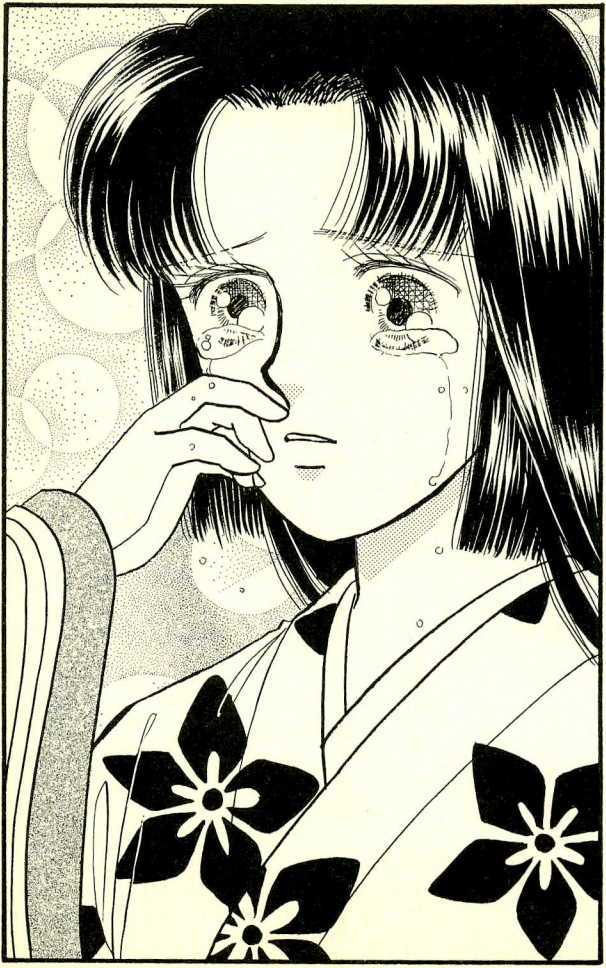
気がつくと、私はその手に甘えるようにからだを預け、姫さまの胸の中でホッと息をついている。

私が姫さまを抱きしめてさしあげていたはずなのに、いつの間にか立場が入れ代わり、姫さまが私を抱きしめてくださっている。

「わたくし、こどもかなあ？　一生懸命、考えたんだけど、あんまりいい考えが浮かばなくってね、それでね、わたくしが九郎さまと婚約すれば、羽衣、あわてるんじゃないかなーって思って。それしか、思いつかなくて」

姫さまを包むお衣装の、萌黄色を、私はきゅっと摑み、まぶたを閉じている。

「それをお話しして、協力してくださいって申し上げたら、九郎さま、笑っていらっしゃったわ。こどもみたいな手段だけど、面白そうだね――って。それからはね、羽衣は気を悪くするかもしれないけれど、わたくしと九郎さま、いつもいつも、羽衣のこと観察してたの。ふたりで出かけたふりをして、御所の中に隠れて、羽衣の様子を盗み見ていたこともあったわ。羽



衣、全然、気がつかなかったけど」

くすくす……っと、笑ってらっしゃる。

揺れる姫さまの胸の中で、私も一緒に揺れている。

「そのときのね、羽衣の様子を観察しているときの九郎さまのね、お顔を見てるの、わたくし、とても楽しかったわ。九郎さま、こどもみたいに喜んでいらっしゃるんだもの。羽衣の様子が、すこしずつすこしずつ沈んでゆくのが、嬉しくて嬉しくてたまらなくていらっしゃったみたい」

そう言いながら、姫さまはそっと手を伸ばし、私の髪を撫でてくださった。

不思議。

いつもは、私が姫さまの髪を撫でてさしあげて、そうすることで、姫さまを守ってさしあげることで、私、とても幸せな気持ちになっていたのに。

今日は、反対なの。姫さまが守ってくださる手の中で、私、いつもよりももっともっと幸せな気持ちになっているの。

「それで、いつだったかしら？　ほらあの、わたくしが川でびしょ濡れになってしまったあの日。俺を見たら途端に羽衣、ホッとした顔をしたんだよ――って、もうこれ以上、嘘をつづけていたら、羽衣が可哀相かな――って、九郎さま、わたくしのことなんて目にも入っていらっしゃらないようなご様子なの。だから、もうそろそろ潮時かしらって、わたくしも思ったもの

だからね」

姫さまは、あの日、私を呼んで本当のことを話してくださるおつもりだったのだという。

「でも――、そうだわ、あの日、おまえの乳母という人が御所を訪ねてきて。それで、わたくしの計画はおじゃんになってしまったんだわ」

悔しそうに、おっしゃる。

「ねえ、羽衣？」

私の髪をちょっと引き、仰向かせて、姫さまは、

「まだ遅くはないのよ？　おまえ、都へ帰らずにここにいるって決めたんだもの。自分の気持ちに正直になってもいいのよ？　そうして、九郎さまと――。わたくしは、すぐにもお父さまに本当のことを申し上げて、九郎さまとの婚約を解消するつもりでいますから」

それは、嬉しい言葉だった。

本当に、嬉しくて嬉しくてたまらない言葉。

でも。

また、私と九郎との恋の運命を、見せつけられただけのような気が、私はしていた。

姫さまが私を呼び、本当のことを話し、私に九郎の許へ走るよう勧めてくださろうとした、その刹那。

私の生い立ちが、暴かれてしまったんだもの。そして私は、意地ではなく、義理でもなく、

兄さまと生きてゆこうと心を決めることになったんだもの。

やっぱり、すれ違う運命だ。好きだけではどうにもならなかった恋だ。

私は、姫さまにそっと笑いかけた。

「それでも私は、十四郎兄さまの妻として、一生を終えたいと思っているんです。本当に、心から――」

「……羽衣」

それでいいの？

と、姫さまの瞳が訊いていた。

私は、やわらかな微笑でそれに答えた。

「――そう」

やがて姫さまは、ちいさく肩から息を吐き、

「また、御所にも遊びに来てね。もう、わたくしの侍女としてではなく、本当に、話し相手として――お友達として。だって羽衣、本当は、平家のお姫さまだったんですものねえ。わたくしと、身分も違わない人だったんですものね」

そんな身分じゃなくっても、ただの羽衣でも、わたくしはもちろん、羽衣をお友達だと思っているけれど。

姫さまは、そんな言葉を付け足して、ちょっとおとなになられた顔で、笑ってくださった。

私の、お友達。
きっと、一生のお友達。
姫さまがいてくださるかぎり、私はきっと、幸せだ。

☆

そして、そのまま日々は過ぎてゆくのだ——と。おだやかに過ぎ、やがて私たちも年老い、すべては思い出に変わってゆくのだ——と。
そう思っていたのだけれど。

☆

わずか数日後のことだった。
九郎に呼び出された——と、兄さまは笑って私に言い、約束の場所へ出かけて行った。
その場所は、私と九郎が初めて会った、あの木の下——。
ぽかりと胸に浮かんだ思い出の中に、我知らず、思いを馳せてしまったそのとき。
兄さまは、気づいたはずなのに、気がつかないふりをしてくれた。そしてやさしく微笑み、
「羽衣は、心配しないで待っておいで。九郎どのには、俺の気持ちのありったけを話して、わかってもらってくるから」

そのまま、行ってしまった。

ああいう人だから。私の気持ちを、やさしく見守ってくれる人だから。

あの人を選んで、よかった。私、おとなしく兄さまの帰りを待つことにしよう。

——とは、思ったんだけれど。

やっぱり、どうも気になる。

あの、真っすぐの九郎のことだもの。なんだか面倒なことにならなければいいんだけれどな。

彼をふってしまったのは、私なんだし。私が、彼に悪いことをしたんだし。

なんだか、気になる。

気になりはじめると止まらなくなり、たまらなくなり、私は、家中をうろうろと歩き回った末、ついに出かけることにした。

口を出すつもりはない。姿を見せるつもりもない。物陰から、遠くから、様子を見るだけでいいから。

結局、家から飛び出してしまったのだ。

行かなければ、よかったのに。

☆

冬が近い。

奥州の早い冬が、風の中にもう、その匂いを淡く含ませている。

久しぶりのその季節を、すこしだけ懐かしく思いながら、私は走った。

御所を、そして平泉館を抜けさせてもらい、北上川の川べりへ出る。それから、すこしだけ北へ。川べりを北へたどれば、あの場所へ着く——と、いうとき。

私は、ここにいるはずのない人の姿を見た。

景清だ。あの、私の乳兄弟の。

「景清——？」

私は、彼の名前をそっと呼んでみた。

半信半疑だった。よく似ているだけの人かもしれない。だって景清は、あの日、都へ帰ったはず。また来ると言ってはいたけれど、いったん、都へ帰り、それからまた出直してきたにしては、ちょっと早すぎる。

その人は、枯野に隠れるように身をひそめ、何かを一心に見つめているようだった。

けれども私の声を聞き取ったらしい。ちょっと首をかしげ、それからこちらへ目を回し、

「姫さま!?」

驚いている。——というより、まずい、と舌打ちしたときの顔に、私には見えた。

なんだろう？

けれどもとにかく、あれは景清だ。

私は、なんの躊躇もなく彼に近づいていった。

ところが彼は、その私を困った目で見つめるばかりなのだ。私は、景清の主人の娘なのだから、本当は景清のほうから私の許へ参じるのが筋のはずなのに。

もちろん私は、そんなことなど気にしたりはしないのだけれど、それでもやっぱり、変だと思った。

近づいていった私に、景清は、

「姫さま、このようなところへ、いったい、どうなされたのですか？」

「この先の木のところに兄さまがいるはずだから、呼びに来たの」

もちろん、詳しいことは言わない。

「それにしてもあなた、どうしたの？　都へ帰ったはずじゃなかったの？　まだ何か用事があって残っていたの？」

「それが――」

景清は、私から視線をそらしつつ、声を濁す。

「なんなの？」

ふ……っと、胸が騒いだ。

その騒ぐものの正体がわからないまま、それでも私は、

「なにかあったの？」
景清を問いつめた。
もちろん、景清は口を閉ざしたままだ。
騒ぐ胸を押さえつつ、私は何度も景清に訊ねた。それでも景清は、言わない。
いったい、なんなのよ!?
いよいよ、私の胸で不安が悲鳴をあげはじめる。
言葉での答えを期待するのは無理、そう思い、私は景清の視線を追った。
ここからは、あの木のあたりがよく見える。
夏には緑が騒がしいほどだったのに、今はもう、その葉も茶に縮れてしまい、それもすでに半分近くも落ちて、寂しくなって——と、思ったそのとき。
まだ散り残る枯れ葉の中に、なにか、動くものを見つけた。
あれは——人？
目を凝らした。
そうだ。あれは人だ。それも、弓を手にした——。
「景清!?」
私は、彼の名をなじるように呼んだ。
「あれは何!?　あの、木の上にいる者は——あれは何なの!?」

「姫さま、それは――」
言い渋る景清の腕をつかみ、ゆすぶった。
「なんなのよ!?」
すると景清は、もうたまらない、というような激しさで叫ぶ。
「申し訳ございません！」
片手を、がっくりと地に落として、
「都へ帰ったというのは、嘘なのです。――いえ、母はあれからすぐに帰ったのですが、わたしは帰ったと見せかけて、この平泉にひそんでおりました」
「なぜ!?」
「源氏の御曹司が、この地に隠れていると知ったからです」
「おまえ、やっぱり、あの夜、私たちの話を聞いていたのね!?」
「申し訳ございません！　盗み聞きするつもりではなかったのです。ですが、人を遠ざけるなどあまりにもものものしい様子だったので、これは何かあるに違いないと思いまして――」
「平家の郎党が、盗賊のような真似をするのね？」
「ですが姫さま。姫さまが頼盛さまのお屋敷から消えた状況は、あまりにも異常すぎます。十四郎というあの男が誰なのか、いったい何の目的で姫さまを連れ去ったのか――、知りたいと思うほうが当然でございましょう!?」

「……それは……」

そうかもしれないけれど。

「聞いてしまった以上、わたしはわたしの立場として、見過ごすわけにはいかなかったのです。都へ早馬を走らせ、指示をあおぎ、そして――」

「そして？」

「源氏の御曹司が、本当に平泉に隠れているのなら、殺せ――と」

「殺す――！」

私は、息を飲んだ。

そしてそのまま、景清などその場に残し、走り出す。

「頼盛さまが、本当に怒っていらっしゃるのです！　もっと違った事情でこのことが知れたなら、もしかしたら殺せなどとは、そこまでの命令は、下されなかったかもしれません！　源氏の子供たちは、保元の乱ののち結局、誰ひとりとして殺されてはいないのですから！　ですが、頼盛さまが、本当に怒っていらっしゃるのです！　当たり前です！　可愛らしい盛りの姫さまを、奪われたのですから！　お父上のそのお気持ちは、姫さまにもおわかりになられましょう!?」

背中で、景清が何かを叫んでいた。でも私は、聞いてなどいなかった。

殺す！　あの弓で、殺す！

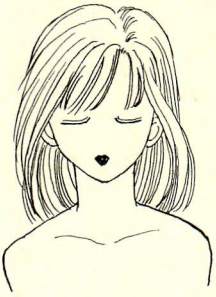
息がきれるほどに走り続けながら、けれども、ふと思う。
源氏の御曹司——と、景清は言った。
それって、どちらのことだろう？　兄さま？　それとも九郎？　ふたりとも、同じ源氏の御曹司じゃないの！
頭の中で、ふたりの顔がくるくる舞った。でも、答えを出せるまで考えていられるような余裕はなかった。
すぐに、ふたりの姿が見えてきた。
ふたりは、頭上の危険になど気づきもせず、なにごとか話し込んでいるようだ。
「逃げて——！」
私は、声のかぎりに叫んだ。
「——羽衣!?」
ふたりの声が、同時に私の名を呼んだ。
木の上の男も、もちろん私に気がついた。
兄さまも九郎も、きょとんと私を見つめるばかりだ。
ああ、どうしよう!?　呑気に説明なんかしている暇はない！
私は、とにかく走った。
木の上の男は、それまでは、絶好の時をうかがっていたようだ。けれどもそれが、あわてて

弓に矢をつがえるのが見えた。
どっち!?　兄さま!?　それとも九郎!?
私は、とにかく顔を上げて男の視線を確かめながら、木の下に走り込む。
弓弦が、素早く引き絞られた。
兄さまだ――!
矢が届くよりも早く、私は兄さまの胸の中に飛び込み――。

☆

あとのことは、わからない。
喉のあたりが、急に熱くなった。
兄さまを狙っていた矢が、私の首を射抜いたのかな――と、ぼんやり思った。
私、死ぬの？　このまま死ぬの？
ああ――。
だったら、もう言ってもいい？
私、九郎が好きだった。あなたと恋をしたかった。
もう一度、会いたい、死んでも、あなたにもう一度、会いたい。
いつか、また、もっと違う世に生まれて――。

finale
あづさ



1

それは、一瞬の夢だった。
ふと我に返ると、耳をつくのは嵐の声。そして、目にしみるのは稲妻の叫び。
あたりは一瞬前と何も変わらない夜だった。
私は、あづさ。羽衣じゃない。
でも。
羽衣の心が残っている。髪の先にも、指の先にも、もちろん胸の奥にも。
夢——だったのだろうか？　私は夢を見ていたのだろうか？　今のはすべて——？
ゆっくりと、まばたきをした。そうしたら、一本だけ灯されたろうそくの明かりが、まぶたの裏で揺れた。

「教えてよ」
と、彼は言う。
「教えてよ。そんなに愛していたの？　ミイラになってまで寄り添い続けたいほど――それほどまでに――」
私は、もう一度、まばたきをした。
そうしてみると、羽衣の心が私の中に、ゆっくりと溶け込んでくるのを感じた。
前世、生まれ変わり、輪廻転生――そんな言葉たちが、頭の中で、ぐるりと一回転した。
羽衣は、私。私の昔の姿だ。そして、あのミイラは羽衣――。
「教えてよ」
彼は、もう一度、言った。
私は、彼の目をまっすぐに見つめた。
でも、すぐに答えてしまうのは、なんだかもったいないような気がする。もうすこしだけ、この不思議を抱きしめたままでいたいような気がする。
たっぷりの時間のあと、私は、くちびるをそっと開き、
「――九郎？」
懐かしい、そして、たまらなく愛しい名前を呼びかけた。
彼の瞳が、ちらりと動く。

「わかる――の？」
私は、こくりと頷いた。
「夢を見たの。さっき眠っていた間も、そうして今の、この一瞬も。たまらなく懐かしいあのころを、私、夢に見ていたの」
「羽衣――だよね？　おまえは、羽衣だよね？」
「そうよ。私は羽衣よ」
何度も何度も頷いてみせつつ、ぽろぽろとこぼれ落ちて止まらない涙を、私は両手で拭っている。
私の中の羽衣が泣いた。会いたかったの――と、ただただ会いたかったの――と。
私は、羽衣。
越智くんは、九郎。羽衣があきらめて手放した恋の行方に、いた人。
羽衣はあなたが好きだったのよ――と、もうひとりのミイラが誰なのかは知らないけれど、羽衣が恋した人はあなただけだったのよ――と、私は告げてあげようと思った。
でも、その前に。
私は、陸の存在を思いだしたのだ。
私の隣に陸はいた。口のあたりを右手で覆い、夢の続きに今もまだ心を迷わせた目をして。
「……陸？」

呼びかけてみた。
すると陸は、ゆっくりと視線を回し、私を見た。
「夢を――」
「見たの？」
こくり、陸は頷く。
「陸も、夢を見ていたの？」
「見た。俺の夢。俺が、あの柩の中で眠るミイラだったころの夢」
陸の指がそっと上がり、示したのは、男のミイラが納められた柩……。
男のミイラは、陸の前世の姿？　じゃあ、陸は……。
「夢の中で、俺、十四郎という名の男だった」
「十四郎兄さま……」
なぜ？
羽衣が庇ったはずの十四郎が、なぜ死んでいるの？
「あののち――」
と、越智くんが語る。
「羽衣が死んだあののち、十四郎も同じ矢に倒れた」
「羽衣が庇ったのに!?」

「おまえが死んだのは、一の矢だ。次の矢で、十四郎が死んだ。まるで羽衣のあとを追うように、ぴたりと狙ってきた刺客の視線から、逃れようともせずに」

「羽衣がいなければ、俺は生きる甲斐などなかったもの。羽衣さえいればよかった。ほかに何もいらなかった。だから、羽衣がいない世ならば、俺にはなんの未練もない」

陸は、歌うように呟いた。

でも、なんだかそれは陸の声ではないような気がした。

あれは、きっと十四郎の声。陸の中に残っていた十四郎が語る声。

「俺はひとり、生き残ってね。秀衡に堂を建ててもらって、ふたりの遺骸をそこに安置して。それがたぶん、藤原四代のミイラと同じような条件を引き起こして、ミイラ化してしまったんだと思うけど。それから、あののちを生きた。ふたたび平泉に戻り、果てるまで」

九郎のその後を語る越智くんに、私は、

「そのあともあなた、恋をしたわね？」

責めるつもりなどなく、そう訊ねた。

「ああ――、したね。いろいろと」

彼も、悪びれずに頷いた。

羽衣の選択は、間違っていなかったのだ。

羽衣が死んだあと、自分の生き甲斐をもなくして彼女を追った十四郎。

その後もたくましく生き抜いて、恋をし、戦に駆けた九郎。
きっと、間違っていなかった。あのとき命が途切れなかったら、あののちを二人ともが生き抜いていたら、きっと、あの夏の日々は素敵な思い出に変わっていたことだろう。
「でも、九郎は生涯、羽衣を忘れたことはなかったよ。自分を好きでいてくれたのか、それともやっぱり十四郎を愛していたのか、思い出すたび、羽衣の面影に問いかけながら――ね」
「羽衣は――」
と、私はくちびるを開いた。
そして、羽衣の最期の叫びを伝えた。
「羽衣は九郎が好きだった。もう一度、生まれ変わってめぐり逢えたら、今度こそ九郎と恋をしたい――って」
夢のような羽衣の恋の想いを伝えながら、けれども私は――あづさは、たまらなく苦い思いを噛みしめている。
陸の顔が、見られない。怖くて、哀れで、つらくて――見られないのだ。
双子の兄妹に生まれた私と陸。
他人として出会った私と越智くん。
これは、羽衣の願いだったような気がする。
《九郎と、もう一度めぐり逢いたい。そして今度こそ、あの人と恋をしたい。そして、兄さま

とは今度は、本当の兄妹に生まれてこれたら幸せなのに》

残酷だ。羽衣の本音は、残酷だ。

でも。

感情のままに走ろうとするからだを必死に抑え、なにが本当の幸せかを真剣に考えた末、恋を手放した羽衣。彼女のあの苦しみを思えば、それくらいのわがままを、私は許してあげたいような気がする。

それともそれは、私のずるさだろうか？　昔の私を庇おうとする、ずるさなのだろうか？

☆

夏が逝く。

不思議の中を、夏が行く。

そして十月。

私と陸は、十九歳になった。

2

誕生日。

祝ってやるから出ておいで――と、越智くんが誘ってくれた。
といっても、べつに豪華なディナーをおごってくれるわけじゃなく、素敵なプレゼントを買ってくれるわけでもなく。
ただ、ふたりでぶらぶらと街を歩いた。
ウィンドウをのぞき込んだり、街角で見つけたゲームにたっぷりの時間を食べられてしまったり。
夕食は、私が彼の部屋へ作りに行ったんだけれど、
「私、祝ってもらう立場のはずなのに。どうして私が作らなきゃならないの？」
だだをこねたら、
「うるさーい！」
と怒鳴ったあと、いきなり立ち上がり、キッチンで何やら作りはじめている。
私は、ソファに転がってテレビをつけた。すると外国のミイラの話をやっていて、すこしだけ目が釘づけになった。
といっても、特別、越智くんを呼びつけたりはしなかったんだけれど。
「――なあ？」
キッチンから、私を呼ぶ声がする。
「なに？」

「陸、どうしてる？」

そんなふうに訊いてきたことからすると、テレビの音を聞いていたらしい。

「生きてるよ」

と、私は答えた。

「元気？」

「うーん、前よりはちょっとね」

あのあと——。

越智くんの実家から戻ったあと、陸は、ぴたりと私の名前を呼ばなくなった。もう、つきまとってこない、私の生活に干渉しない、私の目すら見つめない——。

私のほうも、なるべく陸から離れるようにしている。

陸の過剰な愛情を、それでも私が拒否せずにいたのは、羽衣が十四郎を慕った気持ちが残っていたからなのか、それとも、今生で叶えられた願いの残酷さに、知らず知らず負い目を感じていたからなのか。

今ではもうわからないことだけれど、とにかく、私はすべての思いを捨て去り、陸に距離を置くようになったのだ。

そうするうちに、陸は変わった。誰も見なくなった。自分の心の奥底以外は見つめなくなってしまった。

陸の中に甦ってしまった十四郎の想いと、残酷すぎた羽衣の本音と、そして自分――陸の心と。三つのバランスをうまく取れずに、苦しんでいるようなのだ。

本当は、手を差しのべたい。

なんとかして陸を苦しみの中から救い出してあげたい。

でも、私に出来ることは、ひとつしかない。

陸から離れること。つまり、羽衣の想いを捨て去って、私として――三浦あづさとして、正常な双子の兄妹の関係を取り戻すこと。

だって、今生での私たちは、正真正銘、血のつながった兄妹なのだから。私には、羽衣がそうしたように陸を選ぶことなど、出来やしないのだから。

だから、知らん顔で、陸が苦しみの淵から這い上がってくる日を待っている。

「おまえ、辛いの食べられたっけ？」

越智くんは、もう陸の名前などくちびるから捨て去り、料理のことをあれこれと話しはじめている。

「辛いの、好きよ、私」

「ふーん？　じゃあ、豆板醤、ごっそり入れといてやろう」

「え？　なんなの？　なに作ってるの？」

私は急に不安になり、ソファから立ち上がった。

☆

実を言うと、あの夜の夢は、日が経つにつれて、私の中で、少しずつ少しずつ、薄れはじめているのだ。

私に前世があったこと。その人は、羽衣という名の平家の姫であったこと。その人が恋した相手は、あの、源九郎義経であったこと。そして、その恋の顚末。

今ならまだ、なんとなく覚えてはいるのだけれど、それでももう、細かいところは思い出せなくなってしまってきている。

いつか——それもきっと早いうちに、すべてが消え去ってしまうのだろう。

それは私だけでなく、越智くんも、同じことを言っていた。

「俺が、羽衣と十四郎のミイラを守り続けてきた家に生まれたのは、九郎の中に死ぬまで残りつづけた羽衣への未練が、そうさせたのかもしれないなあと思うんだけれどね」

だから越智くんは、こどものころから何となく、あのミイラが誰であったのかを知っていたのだという。

「はっきりとわかってるわけじゃないんだけど、なんとなく、自分が昔、九郎義経と呼ばれていたころに好きだった女と、それを奪った男と——そのふたりに違いないってね」

その思いが、大学で陸に会った途端、吹き出すように強まった。直感で、陸があのミイラの

男のほうに違いないと気づいた。そして、陸を実家へ誘い――。
「でも、おまえのことは知らなかったからなあ。羽衣までついてくるとはね」
「どうして私が羽衣だとわかったの？」
「直感。あれほど好きだった女だもん。すぐにわかった」
笑ったあと、越智くんは、
「あの夜以来、いろんな記憶が、ぽろぽろ剝がれ落ちるみたいに消えていくんだよ。義経のこと、俺はいろいろ知っていたはずだったのになあ。もったいないこと、したな。論文にまとめて取っておけばよかった。――あ、でもだめか。ああいう学問って、裏付けがなければ認められないもんな。実は俺は義経の生まれ変わりで、だからいろいろ知ってるんです――とか言っても、笑い飛ばされて終わりだよな」
ばかなことを言っては、また笑う。
ミイラは――羽衣と十四郎のぬけがらは、あのまま永遠を眠りつづけているけれど。
心を持たないからだは〝人〟ではないと、私はそう思う。
「うちの親父はミイラ命の人だから、親父が死ぬまでは無理かもしれないけど、俺があのミイラを引き受けるようになったら、研究者に預けようかと思ってる」
それが、越智くんの考えだ。
こうして少しずつ消えてゆく、羽衣の、九郎の、十四郎の夢。

あとは、陸だけ。囚われているのは、もう陸だけ。

「陸と話せるようになったら、俺、訊いてみたいことがある」

私たちは、こんなことを話したりもする。

「陸が、異常なくらいわがままな気持ちであづさを大事にしてたのは、あれは、十四郎が物静かでおだやかで、どっちかというと自分の心を押し隠すようなやつだった、その反動なのかな——って」

「あ、それ、あるかもしれないね」

「だとしたら、十四郎も本当は、羽衣の好きなようにしなさい、なんて大人なことを言ったりなんかしないで、わがままに羽衣を独占したかったのかもしれないな」

「そうね。その気持ちを一生懸命、抑えてまでも、羽衣の幸せを願っていた人だった」

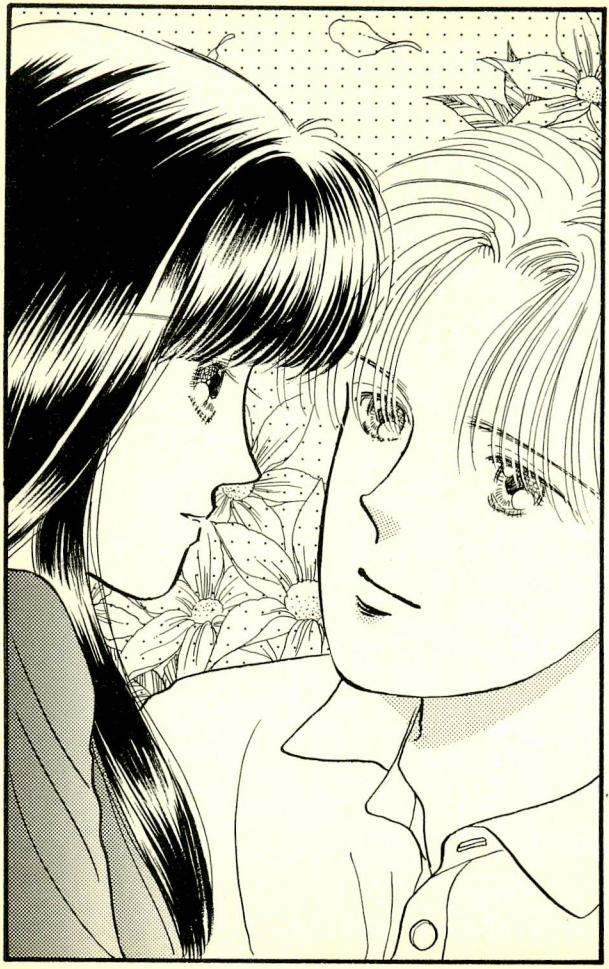
「でもさあ」

「なに？」

「十四郎がもっとわがままな奴だったら、羽衣もきっともっとわがままに走りやすかっただろうし、あんな複雑な話にならなくて済んだんじゃないのか？」

「うーん……、言えてるかも」

こんなふうに、気がつくと、まるで物語の中の登場人物を批評するような気持ちになっていたりもして。



こういうのも、なかなか楽しい。
陸も早く、つまらない前世の想いなどからは解放されておいで。
待っているから。

☆

越智くんは、どうやら海老チリを作ろうとしているみたいだった。
「なんだ、まともなもの作ってるんだ」
安心した。
ソファへ帰ろうとすると、
「なんだと思ってたんだよ!?」
背中で、なんか怒ってる。でも知らない。勝手に怒らせておけばいいや。
私はソファに寝そべり、優雅にテレビのリモコンを操った。
情報グルメ番組がいい。何か、やってないかな？
でたらめにボタンを押しながら、番組を変えていると、
「あ、メシ炊いてない！」
越智くん、あわてている。
私は、あくまでも優雅に、

「いいよー？　ゴハンなくても」
「俺、やだ！」
「じゃあ炊けばいいじゃん」
「時間、かかるぞ？」
「待ってる待ってる」
いつまでも待ってるよ。
その言葉に、越智くんは気をよくしたらしい。なんだか、鼻唄なんかが出てきている。
私は、そっと頭を上げて、彼の背中をうかがった。
生まれ変わったらもう一度あなたに逢って、今度こそ恋をしたい——そう願った心のまま、死んでいった羽衣。
願いは叶えられたよ。この人とめぐり逢えたよ。
そして、まるで何年もそうしてきた恋人同士のように、連絡を取り合っては会うようになった私たち。
でもね。
私、時々、思ったりするの。
羽衣や九郎や十四郎が生まれ変わっているということは、もしかしたら、私の知らない九郎の恋人たちも——あの静御前や、九郎が死を共有したという奥方も、生まれ変わっているんじ

やないかしら？
その人たちと越智くんがめぐり逢ったら、どうなるの？
その人たちも、羽衣と同じように、もう一度めぐり逢えたらまた九郎と恋をしたい——そう願っていたのかしら？
なんだか——。
前途多難だな。
でも私は負けないよ。
ね、羽衣？

☆

思いつつ寝ればや人の見えつらむ
夢と知りせば覚めざらましを
〈小野小町〉

あなたを想いながら眠ったから、だからあなた、夢に現れてくれたの？　あれが夢だとわかっていたら、私、目を覚ましたりなんかしなかったのになあ。

けれど。
覚めてこそ、夢――。

――おわり――

あとがき

約一年間、私は義経のことを考え続けてきました。
雑誌『コバルト』の連載から、この文庫まで。準備期間を入れると、一年以上です。
義経——というと、義仲。
そんな連想をしてしまう人間は、たぶん、世の中には私以外にそんなにいないんじゃないかなーと思うんですが。
私は、このふたりのうちのどちらかを思い浮かべるときにはいつも、もう一方の名前も思い出してしまっています。
義仲といえば、私、ちょっと悲しい思いをしているのよ。前に『海に眠る』という文庫で義仲のことを書いたら、
「倉本さんは義仲が嫌いなんですね」
と、一部の人に誤解されてしまったようで……。
私、義仲って嫌いじゃないよ。好きよ。

ただ、
「不滅で不敵のヒーロー」
という意味での〝好き〟じゃないものだから、あんなふうに淡々とした書き方をしてしまったの。あの書き方が、誤解を呼んでしまったみたいです。結局のところ、自業自得。仕方ないんだけれど。

私にとって、歴史上の人物は——私が好きな鎌倉時代の、頼朝も政子も大姫も静も義経も義仲もみんな、〝物語の中の登場人物〟ではなく、私が今こうして生きている、同じ日本という大地の上に、かつて存在していた、確かに存在していた、〝生きた人たち〟なんです。

物語の中の登場人物、でしかない場合は、たとえば、一〇〇パーセントの善人とか一〇〇パーセントの美形とか、そういうのも存在しちゃうじゃない？

でも、本当に生きている、私たちのまわりに本当にいる人物なんかは、いいところも悪いところもごちゃまぜになっていて、両方あるからこそ人間というか、だからこそ手応えがあるというか、顔もそんなにステキなわけじゃないんだけどあの人っていい人だよね、かっこいいよね、とか、そういうの、あるでしょ？

私は、歴史上の人物たちにも、同じものを感じているの。

だから、義仲の悪いところというのは実際、あるわけだし、義経もそう、頼朝もそう、政子もそう。そういうのをひっくるめて、私はあの人たちが好きなんです。

その証明のための話をひとつ——というか、『海に眠る』を書いていたころ、私は巴の話を書けなくてがっくりしていたんだけど、今はね、胸の中に、彼女の物語があります。

ただ、義仲と巴の純愛物語ってわけじゃないんで、もっとシニカルな話として私の中にあるので、いつか、死ぬまでに書けたらいいなー、なんて思っているところです。

☆

ひとつ、不思議なこと。

私は以前、『天使のカノン』というシリーズを書いたんだけど、その中に、主人公・花音のお姉さんというのが出てくる。

それが、けっこう、カゲキな人生を背負った人で、物語の中盤で、彼女の恋人が飛行機事故で死んじゃうの。

でも、彼女は強い人でね、その運命を、幸せになるためのステップのひとつだ——って受け取って、物語の最後には、素敵な人と結婚するところまで頑張るのよ。

その彼女には、みんなから、

「私もまどか（彼女の名前）みたいになりたい！」

という手紙をよくいただきました。

ところが、歴史物のシリーズになると、みんなの声が変わるの。

「恋人が死んじゃったら、私も絶対、あとを追うわ！」
と、なってしまうの。
なんでかなー？

☆

今回、久しぶりに転生ものを書いてしまいました。
きっかけはバカみたいな話で、実は私、中日新聞の浜松版に、一カ月に一度くらいの割で歴史エッセイみたいなものを書かせていただいているのですが、その中で、奥州藤原四代のミイラのことを書いたの。
ところが、書いているうちに、ふと、
「生まれ変わりっていうのが本当にあるのなら、藤原四代の生まれ変わりってのもどこかに存在していて、記憶なんかもちろん残っていないにしても、前世の自分のミイラとご対面！　なんていうこと、ないとは言い切れないよなあ」
なんて、思ってしまって……。
それで、この話が生まれました。
もともと、今回は、義経の若いころの話を書きましょう、というのが打ち合わせで決まっていたので（めずらしく、打ち合わせなんてのがあったのよ。いつもは、勝手に好きなことを書

いている私だが)、こうなったの。

私は、ものがたりの中で幾人もの〝義経の恋人〟を登場させていますが、

「えー？　結局、義経の究極の恋人ってのは誰なのよー？」

と疑問に思った人は、ラストであづさが気づいた不安というか決意というか、そこのところを読んでみてくださいね。私も、おんなじことを思っているから。

義経の恋人の生まれ変わりたちを一堂に集めて、恋の大戦争！　とかバカみたいなのをやっちゃったら、面白いかも。

それにしても、歴史がらみの転生ものって面白いね。いつか、大姫なんかの転生ものとか書いたら、それも面白いかも。

それから。

これって、単なる作家側のこだわりに過ぎないことかもしれないんだけど。

私はこの話の中で、羽衣に藤原秀衡のことを〝お館さま〟と呼ばせていました。

でも本当は、藤原一族の当主は〝御館(みたち)〟と呼ばれていたんです。

〝館〟という字は、あの当時、〝やかた〟とは読まず、〝たち〟と読まれていたんだそうです。

政庁というような意味だったらしい。

でも、それだとどうしても堅苦しいかんじになってしまうので、話の中では〝お館さま〟と、私たちの耳に馴染んだ呼び方をさせていただきました。

でも、平泉館、衣河館、と出てくる建物の名前は、それぞれ、〝ひらいずみのたち〟〝ころもがわのたち〟と読み仮名をふってあるので、混在する形になってしまっていて申し訳ないのですが、これは話の筋に直接、関わりのあることではないので、軽く読み流しておいていただけると嬉しいです。

☆

次は、何を書こうかなあ？

予告をすると、それが嘘になって、全然、違うものを書くことになってしまう——というジンクスが私にはあるので、本当に、もう二度と予告なんかしないようにしたいと思います。

でも、今回は、ほんとに何も決めてない。

何を書こう？　すごく楽しみ。

このあとがきの冒頭で、あんなことを書いてはいますが、私は基本的に純愛物語が大好き。

だから、これからも、どっぷりと純愛、でもちょっぴりシニカルなエッセンスもきかせて——みたいな物語を、たっぷりと書いていきたいと思っています。

それから、最後になりましたが。

これを読んで、

「あ、倉本さんて、きっと古今和歌集が大好きで、くわしいんだろうな」

なんてことは、決して思わないでくださいね!?

一九九三　秋

倉本由布

この作品のご感想をお寄せください。

倉本由布先生へのお手紙のあて先

〒101―50　東京都千代田区一ツ橋2―5―10

集英社コバルト編集部　気付

倉本由布先生

くらもと・ゆう

1967年6月14日、静岡県浜松生まれ。双子座、O型。浜松市立高校をへて、共立女子大文芸学部卒業。1984年春、高二のとき、第3回コバルト・ノベル大賞に『サマー・グリーン／夏の終わりに…』が佳作入選、高校生作家としてデビュー。コバルト文庫に『恋は風いろ不思議いろ』『シナモンハウスの午後』『ガラスの靴に約束』『夜あけの海の物語』『秘密の夏を花束にして』『ポケットにハート時計』『プリティ・プリティ』『星姫紀行』『さよならから始まる物語』『イブたちへの伝言1～2』『さよなら、夏のシルエット』『雪あかり幻想』『天使のカノン』『眠り姫たちの序曲』『HEARTS』『あの夏に逢おうね』『ガラスの楽園』『初恋草紙』『夢鏡』『片想園』『雪の系譜』『あの海へかえりたい』『海に眠る』『空耳の恋唄』『八月に夢を見よう』などがある。趣味・旅行と衝動買い。



千の夢を見る～義経転生幻想記～

COBALT-SERIES

1993年10月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　倉本由布
発行者　若菜正
発行所　株式会社集英社

〒101－50
東京都千代田区一ツ橋2－5－10
(3230) 6268 (編集)
電話　東京 (3230) 6393 (販売)
(3230) 6080 (制作)

印刷所　図書印刷株式会社

©YÛ　KURAMOTO　1993
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本はご面倒でも小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-611783-5 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

涙と感動の歴史悲恋ものがたり。

倉本由布 〈鎌倉盛衰記〉シリーズ

イラスト／湯口聖子

海に眠る

義高と大姫

源 頼朝の長女・大姫の婿としてやってきた義高。だが、その実態は人質で一。



鎌倉へやってきた文珠は、はかなげな少年と出会う。彼こそが、源 頼家だった…。

空耳の恋唄

頼家私伝

〈好評発売中〉 コバルト文庫

歴史の中に咲いたちいさなロマンス。

倉本由布

イラスト／湯口聖子

夢鏡

義高と大姫のものがたり

（ゆめのすがたみ）

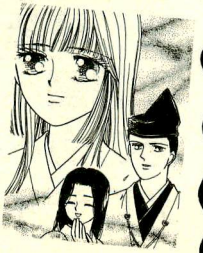
源頼朝の娘・大姫は14歳。父が決めた婿・義高との恋は、悲しい運命をたどるが…。



雪の系譜

竹御所・鞠子

鎌倉二代将軍・源頼家の娘、鞠子。ある日、次郎泰村という少年に出会い、恋を——。



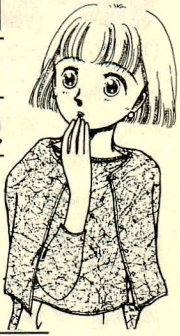
〈好評発売中〉 コバルト文庫

少女の恋をみつめた人気ラブ・ロマン。

倉本由布 〈天使のカノン〉シリーズ

イラスト／槇 夢民

天使のカノン
眠り姫たちの序曲
HEARTS(ハーツ)
あの夏に逢おうね
ガラスの楽園
初恋草紙
片想園(かたおもいえん)
あの海へかえりたい
メロディ～もう夢は終わらない～

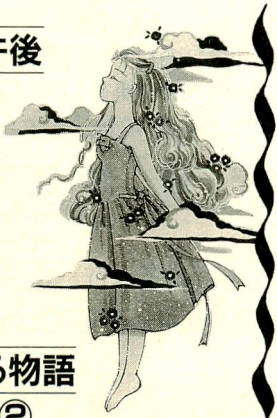


〈好評発売中〉 コバルト文庫

女の子の心をやさしく描く夢色ロマン。

倉本由布

イラスト／槇 夢民



シナモンハウスの午後
ガラスの靴に約束
夜あけの海の物語
秘密の夏を花束にして
ポケットにハート時計
プリティ・プリティ
星姫紀行
さよならから始まる物語
イヴたちへの伝言①②
さよなら、夏のシルエット
雪あかり幻想
八月に夢を見よう

コバルトノベル大賞募集中!

『COBALT』編集部では、「コバルト・ノベル大賞」を募集しています。

この賞は、才能ある作家志望のかたを、新人作家として世に送り出すためばかりではなく、小説を書くことの楽しさ、創作することの喜びを広く若いかたたちにも味わっていただきたい、という願いもこめて設置されたものです。

ロマンの新しい時代を切りひらく、あなたのフレッシュな力作100枚前後(400字詰原稿用紙95枚以上105枚以下)を、お待ちしております。

〈入　選　作〉**正賞の盾と副賞100万円**

〈佳　　作〉**正賞の盾と副賞 50万円**

〈コバルト読者大賞〉**正賞の盾と副賞 50万円**

応募要項は隔月刊「Cobalt」に毎号掲載されています。

人気作家の最新作が一気に読める夢♡小説誌!

コバルト **Cobalt**

1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売!

隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。あらかじめ書店にご予約をおすすめします。

●「コバルト短編小説新人賞」「ショート ショート」を毎号募集しています。